

910.25-Ta54ウ



1200500754404

910.25
TA54

事故本

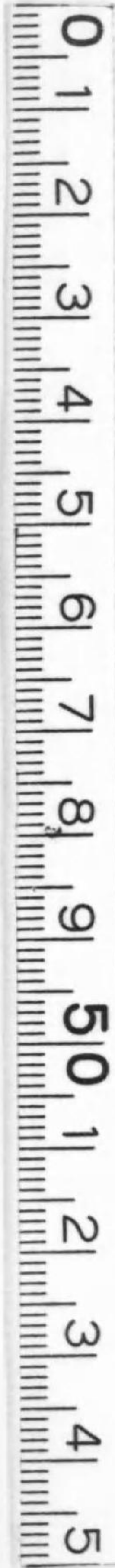
書込み刺)

目次.1.2

本文p.5

他巻数

2001.12.11



始



33.12.15

91025
TA54



高須芳次郎著

爛熟期・頽廢期の江戸文學

東京

株式會社
明治書院



196-315

序

江戸文學が再吟味を加へられねばならない時が來た。茲にいふ江戸文學は主として江戸の地に發生した文學の意味で、廣い意味での江戸文學ではない。この意味に於ける江戸文學は、當時の文化が最高潮に達した文化文政期を中心として見るのが普通で、本書も亦、化政期中心に、主として、小説に關する考察を爲した。(勿論、順序として近松・西鶴歿後の京阪文學をも概説した)

在來、部分的に、或は傳記方面に於て、化政期の江戸文學を記述したものはあるが、これを大觀して、或程度迄、その細部に亘つて、研究したところを記述、評論したものが極少い。且つ今日は文學の見方も、鑑賞の方法も漸く一變せんとする傾向があるので、本書は左様した時代の新しい傾向をも中正的な態度の下に多少取入れ、全體としては、文學史の新しい行き方を用ひ、書史的、考證的、常識的批判よりも、もつと思想的、鑑賞的、文化的、社會的方面に重きを置くこととして一切の文學現象を見た。そこに多少の意義がある事を信ずる。

以上の意味において、本書は單なる文學史でなく、文化史及び社會史の任務についても、いくらか關與した次第である。それから江戸を中心とした文學が、京阪文學と交渉を保ちつつ、如何に發達したかについて、その思想的背景、文化的基礎に特別の注意を拂ひ、且つ川柳、狂歌、小話などの類が如何に小説の領土に潤ひを與へたかについても亦、大體の考察を爲した。

その出來榮えは兎も角、明治書院の厚意により、かう一つに纏つた江戸中心の小説史を書くことが出來たのを何より欣快とする。が、その成績については、江湖諸賢の批評、教示を得たいと思ふ點が少くない。切に是正を仰ぐ次第である。

昭和六年三月

市外上北澤の村莊にて

高須芳次郎

例言 二 三

一 本書は、最初、江戸化政期の文學として戯曲、短歌、俳句、漢詩漢文、隨筆等に亘つて詳しく言及する豫定で、長い間材料を調査したが、それらを入れると、非常に大部の物になるので、今回は小説を中心として考察し、他は折々、言及したに過ぎない。他日、別に各部分に亘つて、調査研究したところを發表する。

一 化政期に於ける第一流作家の私生活については、書翰、日記などにより、調査したが、これ又、その一部を茲に收め、詳細は他日に譲つた。紙數上、止むを得ぬ事と諒承ありたい。

一 附録に收めた二篇は明治四十四年の執筆（始めて江戸文學研究に留意した頃のもの）で、意に滿たぬところもあるが、内容上、本欄の記事と密接な關係を有するので、少しばかり補訂して茲に掲げた。體裁、文體の上で少しく異るところある點は寛恕を仰ぐ。

目次

第一篇 時代と環境

◎第二章 江戸文化發達の過程

- 一、江戸文化と上方文化……………三
- 二つの最高峰—江戸の文士と上方の文士—化政期の文化と元祿期の文化—江戸の色彩と調子—江戸文化の進展史—民衆生活と文學—文化の水準
- 〇二、京阪文學の勃興……………七
- 武士時代から町人時代へ—大阪市民の經濟的勢力—文化の京都—經濟中心の時代—民衆のための文學—平民文學の勃興—ブルジョアの聲
- 三、江戸に於ける民衆の勢力伸張……………二
- 京阪文學の感化と影響—江戸市民の勢力—札差の出現—俠的精神と町奴—化政時代—武士生活と町人生活—趣味の江戸—江戸ッ兒のプライド
- 四、江戸文化の開花期……………一四
- 享樂機關—江戸民衆の特色—江戸趣味の成立—通と濫味—江戸禮讚の文學……………一四

◎第三章 文化文政時代の世相

- 一、十八大通の出現……………一六
- 江戸文化の最高頂—武斷主義の重壓—特有のアトマ—スファイア—劇場と花街—守成的と尙古的—神經過敏式—花街の發達—町人の天國—十八大通の人々—大通謳歌—曉翁と助六—曉翁の風采—仲の町—名刀の切れ味—福の神
- 二、大口屋曉雨と併立した大和屋文魚……………二
- 大和屋文魚—洒落味—大盡的氣分—藏前風—意氣の象徴—一種の俠的行爲—上方趣味からの解放と獨立
- 三、花街の繁昌……………二三
- 花街讚美の事情—一得一失—化政期の遊び振—四疊半裡の淺酌—船宿の發達—深川の全盛—町藝者の時代—岡場所の繁昌—武士の町人化—露伴の江戸武士觀
- 四、歌舞伎趣味の普及……………二六

人生の縮圖—江戸情調本位の演劇—當時の人氣俳優—演劇ファン—劇畫の發展—寫樂のカルケチュア—初代豊國—似顔繪に於ける大首—豊國門下の國政—俳優團扇の贊—聲色の専門家—柳亭種彦と阪東三津五郎

五、新興江戸音楽……………三〇
 上方から輸入した音楽—金平節と操人形—初代團十郎の荒事—大薩摩—肥前節—河東節と江戸情調—義太夫及び豊後節—辰松八郎兵衛—長唄の發達—常盤津と新内—清元節と江戸のロオカル・カラア

六、大名武士の經濟的窮迫……………三三
 大御所時代—經濟難—士道と經濟は兩立せず—封建制度の本質—大名の經濟的減收—幕府の態度—武士の生活難—偽りなき人情—武士軟化の事情—消極的對策

七、町人階級の生活向上……………三六
 生の享樂—經濟上の餘裕—生活向上—通人の風俗—酒井抱一の服裝—婦人の姿態—色彩上の滋味—藝妓の贊澤振

八、種々の贊澤……………三九
 江戸人の持物—贅を盡した下駄の好み—飲食の進歩

と料理通—純粹の酒味—菓子子の風味—通人の食物—江戸名物詩—住居の贊澤と建築美

九、享樂の世界……………四二
 町藝者の擡頭と吉原の不振—式亭雜記—爲永春水と深川情調—水邊に於ける第一流の料亭—吉原と深川の比較—深川を中心とした文學—猪牙船—船宿の光景—花街の中心勢力としての吉原—客と遊女の墮落—各種の享樂機關—町人が武士に反抗した傾向

一〇、勞農階級の生活……………四九
 武士階級の崩壞へ—西力東漸—固定した文化—悲慘な農民階級—當時のプロレタリア—犠牲になつた農民—反抗と一揆—工業に關係した職人階級—生活苦少し—江戸ッ兒の特色—太平謳歌

第三章 文化文政時代の精神生活(上)……………五三
 一、寛政の改革と思想界……………五三
 思想は時代に伴ふ—愚弄せられた儒者—武士の無學—時代の移り—輕浮な傾向—新奇を求むるの風—聖人を翻弄する口吻を洩した小説—行詰つた儒教—松平定信の政治改革—文教統一策—異學の禁

二、平民道徳教の勃興……………五七
 朱子學派の勢力—その長短—學問の自由を束縛す—

心學の勃興—民衆の時代—心學の先驅、石田梅巖の人物—心學の意義—心學の感化—禪家の修養に類す

三、江戸に於ける心學……………六三
 梅巖門下の人々—手島堵庵の講演—道徳と經濟の調和—具體的な儉約說—中澤道二と山東京傳—巧みなる構造—心學の特徴—通俗道話—町人道の確立—日常の修身訓—日本的な心持

四、日本學の勃興……………六六
 日本中心主義—支那崇拜の弊—新思想運動—惺窩と羅山—儒學の日本化と神道—國學勃興の機運—一時衰へた國文學—長流と契沖の努力—北村季吟の國文學に於ける貢獻—戸田茂睡と荷田春滿—日本學の創建—

五、賀茂眞淵の日本精神高調……………七〇
 徂徠の支那崇拜—儒學の行詰り—眞淵の任務—古代日本文學の闡明—儒學排撃—日本には固有の道あり—無爲自然的傾向

六、本居宣長の日本中心主義……………七三
 宣長の出現—極端な支那崇拜行はる—宣長の思想運動—宣長をルソオと同視することの不當—ルソオの自然主義—古代理想主義者—宣長の自然主義—目的

論と方法論—日本の道

七、宣長が組織した日本哲學……………七七
 日本特有の國家形態—宣長の日本論—宣長の見た古代日本—自然主義から古代理想主義へ—純正神道—支那の道と日本の道—儒學者の妄見を破る—日本文化の卓越—人情主義

八、思想界の巨星、平田篤胤……………八一
 篤胤の活動—彼れの宇宙觀—宇宙の根本生命—彼れの死生觀—科學的傾向—古道即神道—純粹の根本道徳—眞の道—神道の民衆化

第四章 文化文政時代の精神生活(下)……………八五
 一、日本文化優越論……………八五
 神道の要旨—篤胤の日本觀—ケンベルの日本讚美—西洋文化に通じた篤胤—日本は文明上の先覺—支那文明は日本人の開拓する所—支那は文化上、日本の後進也—儒佛二教排撃

二、儒佛兩教に對する辯雜攻撃……………八八
 學問は何のためにするか—日本を中心とせよ—自國文化を輕んずる拜外者流—孔子が若し日本に生れたらば—自國文化を正しく認識する意義—不純の神道を一撃す—蘭學者非難

三、國學者と儒者の論争……………九二

論壇の偉觀—市川匡磨の宣長攻撃—諸學者の論難—
時に起る—太宰春臺の支那崇拜と牽強附會說—國學
派と儒學派に對する批判—篤胤の老子に對する共鳴
—有力なる影響

四、日本主義哲學の影響……………九五

日本の思想の基礎—新時代の到来—篤胤の宗教的信
念—勤王精神の勃興—思想改革から學術改革へ—水
戸學派の精神—藤田東湖

五、新興經濟思潮……………九六

日本中心主義の經濟學—海保青陵の儒者罵倒—儒者
及び拜外者流の無氣力—日本独自の經濟思潮—江戸
前半期の情勢と經濟學—佐藤信淵の政治經濟觀—平
田篤胤の影響—新しい傾向

六、佐藤信淵の國家社會主義……………一〇一

プロレタリアの一人として—農民の窮迫—信淵の
『復古法概言』の内容—商事官營論—貧富片落を難
ず—商人の弊—世界の運命を豫言す—上下救済の道
—一個のユウトピア—階級闘争の根絶—教化事業と
社會政策

七、農民道德と階級思想……………一〇六

—材料を供給した『怪談全書』—怪異についての評
論—正徳以後の諸作

四、八文字屋物の作家、江島其磧……………一二六

文學の新領土—八文字屋自笑の出版上に於ける成功
—其磧の經歷—好色本に於ける新生面—傾城の二字
を冠した小説—『傾城色三味線』の人氣—その趣向
—教訓の形式に好色趣味を加へた『傾城禁短氣』の
新工夫—粹道の經典—江戸文學の影響

五、其磧の氣質物……………一三三

馬琴が推奨した『風流口三味線』—その内容—波瀾
曲折ある筋立—西鶴の『五人女』と氣質物—其磧の
第一作—いろいろの癖—老人氣質の描寫に成功す—
氣質物と諸家

第六章 近松・西鶴以後の京阪文學と江戸文學との

交渉(下)……………一三六

一、其磧が開拓した文學上の領土……………一三六
其磧の佳作—『商人軍配圖』に於ける新結構—黃表
紙趣味の『魂膽色遊懷男』—興味中心の—遙かに群
作家を凌ぐ—江戸の作家と其磧

二、讀本に先驅した近路行者……………一三九

讀本系統の諸作—學者肌の作家—岡島冠山の支那文

二宮尊徳の農民道—彼れの主張—經濟と道德—封建
的階級思想—武士と農民—商人階級を輕視する傾向
—四民同位說—農民の境遇—町人の勢力—町人のた
めの文學

第五章 近松・西鶴以後の京阪文學と江戸文學との

交渉(上)……………一二二

一、西鶴歿後の好色本及び教訓小説……………一二二
江戸文學と京阪文學との對立—京阪文壇の有力者—
西鶴の影響を受けた作品—『浮世榮華一代男』の内
容—西鶴と教訓小説との關係—月尋堂の『今様二十
四孝』—孝道の解釋—西鶴を崇拜した北條團水の『子
孫大黒柱』—青木鷲水の『古今勘忍記』

二、事實小説の實現……………一二六

何故事實小説が生れたか—西澤一風と一風とは別人
—一風の商品—心中物—仇討物—都の錦と錦文流—
都の錦と處女作『元祿會我物語』—女敵物—町人物
—白浪小説

三、怪異小説と支那趣味……………一三〇

支那ロマンスとの交渉—了意と松雲は同一人—先驅
した『奇異雜談集』—材を『剪燈新話』に採る—了
意の翻案版—『御伽婢子』の價值—

學翻譯—岡白駒と支那趣味の人々—近路行者の擡頭
—その作品『英草紙』—翻案の技術—その文章—『繁
野話』の特色

三、建部綾足の『本朝水滸傳』……………一四三

國文學者の創作熱—馬琴と綾足—綾足の人物—『本
朝水滸傳』—その作品としての價值—水滸傳物のい
ろいろ

四、藝術家肌の上田秋成……………一四六

新機運に先驅した秋成—不遇の人—質に於て優秀—
早く悔り難い才氣を示す—『妾形氣』の内容—本來
の素質—『雨月物語』について—白峰の一節—近路
行者と秋成

五、秋成の『雨月物語』……………一五二

全部殆ど支那小説の翻案—語るよりも描く—了意と
秋成—創作同様—『雨月』の内容—幻怪を描く巧妙
な筆—亡靈の凄味

六、群小作家を抜いた秋成の藝術……………一五七

白峰の出所材料—独自の風味—馬琴と秋成—劃期的
作品—『雨月物語』と『春雨物語』—歴史小説とし
て非凡—篇中の傑作—短篇作家としての成功

第二篇 笑を基調とした文學

第一章 江戸式短詩短文の發達

- 一、金平本の流行……………一六五
- 江戸文壇初期の情態—金平本の勃興—その作者—武人本位の趣味—グロテスクの匂ひ強し—主人公金平の人氣—その衰頹の原因—草雙紙の出現と作家
- 二、江戸の經濟的發展に伴ふ新興文學……………一六九
- 先行的光景—狂歌・狂文・狂詩・小話などの勃興—初期資本主義と江戸の發展—商業上の進歩—札差の由來と職務—旗本らの財政難—札差の致富—ブルジョアの勢力—江戸文學起らんとす—京傳の氣焰
- 三、江戸ッ兒氣質の成立……………一七五
- 思想的安んず—大阪商人の所謂「商賈冥利」の觀念—江戸市民の不平—時勢を諷した落首—蜀山人の有名な狂歌と政治的諷刺—江戸市民と武家の感化—地理的影響—江戸名物の火事—町火消の一團と俠客—江戸ッ兒の特徴—狂歌と川柳
- 四、天明期を中心とする狂歌……………一七九
- 狂歌の先驅者—江戸に於ける狂歌の諸作家—狂歌と小説及び浮世繪の交渉—狂歌の目的—天明調—蜀山人の風貌—狂歌界に於ける第一人者……………一八三
- 五、狂歌界に於ける代表諸家……………一八三
- 蜀山人の名吟—各方面に於ける注目すべき諸作—狂歌集の刊行—清新味を帶ぶ—取材の範圍—卑俗分子少し
- 六、狂詩狂文の新趣味……………一八六
- 銅脈先生—情景生動する狂詩—『寐惚先生文集』と銅脈—安穴道人の出現—才氣縱横—江戸の狂詩境—寐惚先生の諸作—狂文と風來山人—見るべき價值ある狂文—眞の狂味に乏し—横井也有の『鶉衣』に於ける風韻
- 七、江戸の小話……………一九三
- 大衆文學の一種—所謂ヲチを取る可笑味—小話の粗ひどころ—その材料—ペランメイ組—一群の小話文學—落語中興の祖
- 八、社會詩・風俗詩としての川柳……………一九九
- 俳諧の一方—前句附—柄井川柳とその一黨—川柳集の刊行—より多くプロレタリア趣味—江戸ッ兒見た社會—大衆的性質—小漫畫式—通ガリ—

九、川柳の特質……………二〇一

人間の弱點を冷笑す—半可通排斥—花街に關する川柳—江戸ッ兒の意氣—歴史に關する川柳—皮肉味と辛辣味—根強い根據

第二章 ナンセンス文學の發達(黄表紙)

- 一、江戸文學の開幕を告げた黄表紙……………二〇六
- ナンセンス文學とエロ文學—有階級の文學—獨自無類の民衆文學—黄表紙に先驅した戀川春町の『金先生榮華夢』—功利主義の束縛—合巻物の出現—黄表紙作家たるべき要件—『榮華夢』の内容—勸懲傾向—春町の諷刺的意味—『楠無益委記』を模倣した作品—少年の讀物から大人の讀物となる—春町の失意—政治上の現象を諷刺した諸作
- 二、有力な黄表紙の作家……………二二二
- 朋誠堂喜三二—春町と喜三二—喜三二の佳作『長生見度記』—芝全交—傑作『大悲千録本』—手を全篇に活用した奇趣向—『十四傾城腹之内』と大通趣味—全交の着想、意表に出づ—三馬の全交崇拜と模倣のあと
- 三、徹底ナンセンス主義……………二二六

黄表紙の中堅作家三人—市場通笑の教訓主義—日常生活の穿ち—唐來三和の作風—繪本位の文學—萬象亭の『從夫以來記』の可笑味—豫言の偶中—その他の人々

- 四、黄表紙の巨匠山東京傳……………三三三
- 無類の才人—早く時代精神を知る—時勢の傾向—京傳の前半生—京傳の好學—最初は畫家志望—一人前の放蕩兒—その出世作—『江戸生變氣樺燒』の好評—モデル問題
- 五、京傳の諸名作……………三三六
- 變次郎物の續篇—儒教味を加へた作品—婉曲な諷刺を寓した『孔子篇于時藍染』—ナンセンス式解釋—心學當て込みの作品—其磧の軍配團に暗示を見出す—京傳の奇抜な趣向—一種のカルケチュア
- 六、黄表紙の長短と京傳懺悔……………三三二
- 繪組についての工夫—小話の連續—短篇漫畫小説—毒氣全くなし—輕佻の弊—作者の懺悔—笑への行進開始
- 七、馬琴その他の黄表紙……………三三四
- 馬琴の黄表紙—彼れ一流の儒教主義—その當り作—馬琴の學力について—仇敵物をも書く—南仙笑楚滿

人の作品、非常に喝采せらる

第三章 諷刺好笑本位の大衆文學(滑稽本)(上)……………二二七

一、大衆的傾向……………二二七

笑の爆發—滑稽本の最初—二三の作家—風來山人の『風流志道軒傳』に於ける奇想—滑稽本の開拓—洒落本と滑稽本—より大衆的—プロレタリア式人物多し—わかり易い可笑味

二、十返舎一九……………二四二

一九の青年時代—その處女作—種々の逸話—存外神經質な人—著作する時の用意—好めるは酒と旅—強い精力—調査に熱中

三、式亭三馬……………二四四

純粹の江戸ッ兒—少年時代—古本屋となつて著作—敵討物を執筆—三馬の奇禍却て彼れに幸ひす—人物と性格—才子多病—非社交性—喧嘩早い性質—一九と三馬及び馬琴の人物比較—三馬と狂歌—處世に通ず—化粧品「江戸の水」の賣出に成功—一氣呵成の速筆家

四、藤栗毛の由來……………二四九

一九の『東海道中藤栗毛』—その同傾向の作品—二十一年間書き續ける—東海道の旅行記—田舎中心の作

品—萬象亭の『田舎芝居』に於ける才氣—野趣横溢の『田舎談義』—一九の手柄—都會中心の作品—紀行式小説の流行

五、藤栗毛成功の理由……………二五五

まだ珍しがられた東海道—道中に於ける不便—意外の大當り—文壇の單調を破る—作品の豫定—一九の苦心—熱心な讀者—模倣作の續出—一躍文壇の人氣者となる

六、一九の苦心……………二五九

非常な賣行—無邪氣な可笑味—三馬の笑と一九の笑—彌次郎兵衛と北八—一九好み—愛敬横溢—江戸ッ兒肌—地方描寫について—旅中の費用—各地の方言—彌次郎の財産調べ

七、單純な可笑味……………二六三

藤栗毛の缺點—面白味淺き弊—春日悠々—興味ある箇所—五右衛門風呂の失敗—第一錯誤—釜の底を踏みぬく

八、複雑な可笑味……………二六七

小話を活用す—京都に於ける梯子買の失敗—大原女に包圍せらる—素人狂言の失敗—二百文惜しさの苦笑—作者の働き

九、寫生を主とした現實味……………二七〇

夜の田舎道の寫生—高價な田樂に驚く—藤栗毛の現實味—自然美の閑却—馬琴の文章に見る如き弊少し

一〇、狂言の趣向を借る……………二七三

材料の出所—『どぶかつちり』との對照—『狐塚』からの換骨脱胎—一九の工夫—八文字屋物からも材料を探る—當時の小説からも取材

一一、趣向工夫の材料……………二七六

一九が活用した『通物茶話太郎』—『川童一代斬』と藤栗毛—比較的巧みな翻案振—藤栗毛續篇に用ゐられた材料—趣向上行詰る—代表的名作には『東海道中』を推す—魯文の『西洋藤栗毛』

第四章 諷刺好笑本位の大衆文學(滑稽本)(下)……………二八一

一、三馬の『浮世風呂』……………二八一

合巻物に先驅—出世作『浮世風呂』—文學上一九との關係—諸家の解釋—藤村作氏の意見—三馬の影響を受けし作品は諸家の指摘する他にあり—京傳に私淑—三馬の負惜み—偶然性と必然性—穿ちと皮肉

二、江戸市民の社交俱樂部……………二八五

三馬の『浮世風呂』と京傳の『錢湯新話』—聰明な方法—教訓主義的口吻—江戸人の生活—時代の暗影—

平凡な身邊雜事—無脚色、無結構—立川馬馬との關係—独自の工夫を加味—篇中の人物はプロ六分にブル四分

三、江戸人と上方人との對照……………二九〇

漫畫式一筆がき—異つた二人物の對照—個々人の癖とアラを巧みに穿つ—上方人の商賣上手—江戸人の弱點

四、描寫のうま味……………二九五

惡口上手—彌次郎の啖呵—純江戸式老人—婦人俱樂部の女軍—學者に對する反感—諷刺銳利

五、三馬の氣質物……………二九九

巧みに他作家の作品、趣向を利用す—其積の氣質物と三馬—甘い其積と鹽辛い三馬—鋭い觀察—漫畫式の小幅—ジェロルドの『女房氣質』と三馬の『古今百馬鹿』—種々の癖を穿つ—ジェロルドの作者的手腕

六、酒癖についての穿ち……………三〇四

三馬得意の作—醋酩氣質の人々—『一盃綺言』の人々—三馬の通有癖—ドイツケンズ初期の作に似たり—鯉丈と金鷲

第五章 エロチシズム及びナンセンスを母胎とし

た花街文學(洒落本)……………三〇八

一、洒落本の開拓者……………三〇八
 洒落本の國—花街中心の文學—洒落本の淵源は上方にあり—『傾城禁短氣』は上方式洒落本—上方に於て先驅した洒落本—粹な漢學者—支那文學のエロチシズム—漢學者の粹人化—諸家の作つた歌曲—洒落本の題名—作者は概ね漢文家……………三二四

二、通と半可通……………三二四
 花街漫筆—傑作の一つに數へらるゝ『聖遊廓』—輕浮の氣味あるところが缺點—聖人も先覺者も戲畫化する—倫理批評—當意即妙—凡手に非ず—洒落本の體裁—一定—支那めかす風—通と半可通—通の經典……………三三九

三、洒落本の特徴……………三三九
 黄表紙と洒落本—人情本と洒落本—男女の情痴と洒落本の描き方—人情本の戀愛中心—社會意識の缺乏—平凡無事の時代相—狹斜的ナンセンス—變つた趣向—洒落氣満々……………三四

四、會話の妙趣……………三四
 作中の人物とその範圍—プロレタリア優遇—プロレタリアの描寫—野暮の象徴としての田舎者—地の文は古典的—會話は純江戸式—奇句警句の亂發—巧妙な會話—戀愛帳中の説法……………三五七

五、洒落本の第一人者、山東京傳……………三三九
 蓬萊山人飯橋—唐來三和の諸作—京傳独自の領域—風變りの洒落本—遊女、遊客のスケッチ—傾城本位から藝妓本位へ……………三三三

六、吉原の變遷……………三三三
 遊女に於ける階級—遊女の大衆化—高級遊女—面倒な慣例—晝時の閑散—藝妓の擡頭—深川に於ける名俠妓—吉原以外の別天地……………三五五

七、京傳の明文……………三五五
 花街生活の體驗—京傳の素性についての一説—放蕩資本の出所—一篇の吉原歳事記—文辭洒脫—吉原の風景を生動せしむ……………三三九

八、京傳獨得のスケッチ……………三三九
 京傳と尾崎紅葉—二文豪の類似點—一種の獨創性—太夫道中の考察—すつば抜き—鋭く半可通のアラを穿つ—主要な作品……………三四三

九、才氣縱横……………三四三
 洒落本の類別—洒落本の集大成—締めくくりに注意—通と半可通の擴大描寫—畫龍點睛—冒頭執筆の工夫—寫生文式の味—辰巳情調—印象明瞭な筆……………三四七

一〇、半可通に浴びせた嘲笑……………三四七

通の科學—半可通の種々相—モデルの事—巧みに半可通の面目を描く—洒落本作者の慣手段—京傳の技倆卓拔せる所以……………三五〇

一一、口説描寫の妙……………三五〇
 京傳の頓才—戀愛の取引と戰術—典型的なタクト—雙方の探り合ひ—男性の遁辭—遊女の口説—戀の花……………三五三

一二、色道哲學……………三五三
 通の科學者—色道學概論—吉原深川及び品川—遊女……………三五三

第三篇 道德及び情緒の文學

第一章 文學と道德の問題……………三六五

一、勸善懲惡主義……………三六五
 江戸カラアの乏しき讀本—純藝術味に乏しい傾向—小説を勸懲の方便とす—馬琴の小説眼—教化第一義—讀本が勃興した理由—當時の有識階級と文學觀—松平定信の文教統一と朱子學の全盛—小説の行詰り—讀者の新要求と大衆文學……………三七〇

二、浪漫的傾向……………三七〇
 讀本の意義—傳奇小説の要素—ウオルター・ベネダアの解釋—馬琴の立場—京傳の教訓的口吻—學者め……………三七〇

に同情—中庸の道—當時のモダンボーイとモダンガアル—遊客への戒め—遊女の道—寛政改革と洒落本に對する打撃—禁を破つて出版—京傳罰せらる……………三五七

一三、洒落本から人情本へ……………三五七
 京傳の作の如く見せた『田舎談義』—洒落本の中堅作家—谷崎の『二筋道』—しんみりした味—振鷺亭の諸作—三馬の洒落本三部作—京傳を模倣す—深川を背景とした三馬的情趣—鼻山人の洒落本に於ける貢獻—その主要作……………三五七

かす風—小説と道德……………三七三

三、濃厚な支那的色彩……………三七三
 讀本作家の浪漫主義—支那的色彩強し—京傳の『本朝醉善提』と支那小説—怪奇と殘忍の趣味—馬琴の支那癖—儒教的教訓—不自然—六樹園の小説と支那戯曲—昔の支那崇拜は今日の西洋崇拜に同じ……………三七六

四、眞面目な態度……………三七六
 長篇小説の進歩—功利的文學觀—京傳の假裝的勸懲—曲亭式哲學—馬琴のイデオロギイとテエゼ—『源氏』と『大鏡』—『水滸傳』の構圖と描寫—ゴンクウル……………三七六

兄弟の日記
 五、小説作法の原理……………三七九
 組織、結構についての法則―『八大傳』に於ける場合
 ―文外の深意―人物の二大對立―雙庭篁村の批評―
 作者の用意
 六、如何に人生、人間を見るか……………三八二
 勸懲主義に因はる―因果律の肯定―抽象的概念―善
 惡應報と人生の實際―心性の微妙―除外例ある人生
 ―假作的人生と人間―機械化の弊―固定した人間
 七、一種の尙古的マンネリズム……………三八五
 讀本の文章―現實感に乏し―類型的筆法―生温い感
 じ―七五調の會話―生氣を缺く
 八、怪奇偏重……………三六七
 獵奇心―怪奇美の創造―殺伐極まる異常事―京傳の
 皮相怪奇主義―讀者の要求―史的考證は一種の方便
 ―矛盾せる所あり―今日の大衆文學と共通せる弊―
 作家としての立場に同情すべきか―馬琴の自信ある
 態度
第二章 道義精神を基礎とした傳奇文學(讀本)(上)……………三九一
 一、京傳の傳奇小説……………三九二
 京傳の本領―文學的轉身術―彼れの讀本―馬琴と前

後す―『水滸』を忠臣藏の世界へ活用―『忠臣水滸
 傳』の結構―世評高し―傑作『櫻姫全傳曙草紙』の
 内容―斧削の跡歴々―因果律の適用―京傳の不眞面
 目に近き態度と興味本位
 二、京傳の新趣向……………三九五
 讀者受けよき『稻妻表紙』―芝居に上演―謠曲に趣向
 を借りた忠義小説―支那小説に暗示を得た『醉菩提』
 ―『雙蝶記』の結構―京傳の非凡な才能
 三、苦學した曲亭馬琴……………三九八
 文壇の霸權、馬琴に歸せんとす―夙に文學を好む―
 生活上の窮乏―京傳に逢ふ―京傳に勧められて代作
 ―漸く行狀を謹む
 四、馬琴の人物とその生活……………四〇〇
 書肆萬重のもとに寄寓―新進作家の列に入る―伊勢
 屋に入婿―俗事多忙―機を見て著作に専心―勸懲に
 志した頃―馬琴が大名を馳せた所以―無限の精力―
 剛腹不遜―ブッキラ棒式―交友に乏し
 五、馬琴の精神生活……………四〇三
 馬琴の長所―彼れの合卷物―文學生涯の區分―馬琴
 に對する非難―魯庵の馬琴論―馬琴の同情者―彼れ
 の思想を理解するの必要あり―思想家らしき佛―そ

の前半生―脱線せんとした時代―時勢一轉
 六、馬琴の政治的ユウトピア……………四〇九
 品行方正―最初の作品―思想上の展開―儒教から出
 發したユウトピア―治國平天下の理想―『八大傳』に
 於ける政治的ユウトピア―里見義實の王道主義と新
 建國―仁義の軍―民は國家の大本―大義名分を明か
 にす―一種の理想小説
 七、馬琴の人生觀及び人間觀……………四二一
 馬琴の自叙傳―學問該博―雜駁な傾向―國學精神の
 影響―儒教本位―善の勝利を信ず―孔子の精神―善
 の實現としての人生―人間は悉く性善―因果律の三
 世一貫―神祕力の存在―善惡直ちに應報―『八大傳』
 に於ける場合―勸懲主義の成立
 八、勤王愛國の精神……………四二六
 怪力亂神を語る―人間の禍福を支配する神祕力―馬
 琴の迷信的傾向―勤王愛國の心―幕府に對する感想
 ―時代の新傾向―思想上の經過―獨創味乏し―武士
 階級の代辯者―武士道の頹廢を防がんとす
第三章 道義精神を基礎とした傳奇文學(讀本)(中)……………四三三
 一、讀本に於ける欠陥……………四三三
 勸懲に對する理解の要―情的要素の缺乏―義理一方

に傾く―不自然味多し―偶然の出來事を濫用―小供
 だましの慣用手段―道德の説教―馬琴の代表作
 二、馬琴の出世……………四三五
 作家としての生涯―作品の種類―独自の解釋を下し
 た史上の人物―歴史及び傳説より材料を得しもの多
 し―戯曲より取材せるものも少からず―その分類
 三、出世作『弓張月』……………四三八
 第二期の作品―謎の人物としての爲朝―材料蒐集の
 苦心―役立つた雜學知識―新奇な南國の天地―史上
 の源爲朝―その結構―一旦局を結ぶ―更に續篇起稿
 ―うるさい小道具立―長篇説話の構成力―文章に於
 ける爽快味―人物の配合―全體の統一―光明と希望
 とを與へる小説
 四、世話物式佳作……………四三四
 道義的規制―心中物に對する新解釋―男女の理想化
 ―不孝者の美化と善化に力む―世話物式作品に於け
 る自然味―馬琴の探偵小説―誇張の弊少し
 五、馬琴の探偵小説的な作品……………四三六
 馬琴の『青砥藤綱摸稜案』の内容―珍事出來―主人
 公の善因善果―馬琴の民政觀―治道の要―善人悪人
 の言行對照

六、馬琴の文章……………四三九
 巧妙な叙事—『弓張月』の文章—朗かな調子—鳥の爲朝—その爽快極まる態度—蠻民を驚かす—光景躍動

七、支那小説戯曲の知識……………四四三
 文學的發展の第一道標—支那小説との交渉—支那文學に傾倒—小説構成の骨法を會得—讀書好き—趣向を支那小説に借る—その實例—一種の翻案—『水滸』

『西遊記』の解釋……………四四六

八、馬琴の自家辯護……………四四六
 支那流の怪奇濫用—讀者からの非難—怪談鬼語を何故用ひるか—勸懲の一方便—二三の錯誤—案外に喜ぶ讀者も亦多し—快い刺戟として受容られたりしか

九、外人の見た馬琴……………四四九
 英人アストンの馬琴論—長短兩面について舉示—人情の機微を閑却す—過去に葬らるべき傾向—結構及び構想の雄大と豊富

第四章 道義精神を基礎とした傳奇文學(讀本)(下)……………四五二

一、馬琴の小説論……………四五二
 第三期に於ける代表作—大作『八犬傳』—馬琴は何故に小説を書くか—小説史的考察—既成小説に對する

不滿—小説の最大目的—馬琴の自重—勸懲の大旗を翻す所以—人生を規制する大道—方便に用ふる情生活の展開—馬琴の本意別にある

二、馬琴の周到な用意……………四五四
 小説の結構について—種々の苦心—新機軸を出す—有意義な點—『八犬傳』の缺點—部分的に優れた點

三、『八犬傳』梗概……………四五七
 『八犬傳』の發端—八犬士の出現—犬塚信乃の生ひ立ち—濱路とのロマンス—犬山道節の火定の術—一波一瀾湧起す

四、八犬士の離合集散……………四六〇
 曲折變化に富む場面—劇的色彩—女装した勇士毛野の活躍—妖猫退治—犬塚信乃と美女濱路の後身—四犬士の劃策

五、八犬士出世、一堂に會す……………四六三
 犬塚毛野の變裝—犬塚親兵衛、里見義實の危難を救ふ—妖尼妙椿の出没—義實の勝利—八犬士悉く義實に仕ふ—勤王の誠意を表す

六、『八犬傳』の興味ある場面……………四六六
 孝の象徴—智の象徴—忠の象徴—浪漫趣味多き場面—一つの繪模様—『八犬傳』の人物地圖—二十八年續

けた大長篇—馬琴一流の哲學を寓す—親切な作者の用意—芳流閣上の大格闘を描いた一節

七、傑作『美少年録』について……………四七〇
 異色を帯びた作品—讀本の行詰り—境遇が人物を支配する運路—『美少年録』に描かれた美男美女—佳人薄倖—悪化しゆく少年描寫の上に於ける成功

八、晩年の雄篇『俠客傳』……………四七四
 勤王小説—支那小説『女仙外史』に暗示を見出す—楠姑摩姫の俠勇—南朝の遺臣—野上著演の義俠—南朝復興に志す姑摩姫—足利義滿を襲ふ—老練な馬琴の描寫

九、英雄小説『朝夷巡島記』……………四七八
 困難な材料を取扱ふ—鎌倉時代の隱微—氣乗りせぬ馬琴—統一を缺く—朝夷義秀の一生—彼れをめぐる二傑物—義秀の義俠的行爲—怪奇荒唐のあと少し

一〇、讀本作家としての六樹園……………四八二
 功成り名遂げた馬琴—小説家として割合に知られぬ六樹園—學者として知らる—支那小説を譯す—アマテイユアとしての彼れ—その二佳作—素直な感じ—誇張少き描寫—自然味—支那小説から取材—六樹園以外の人々

第五章 歌舞伎趣味を反映したロマンス(合巻物)……………四八七

一、柳亭種彦の閱歷……………四八七
 一種の變態小説—馬琴が合巻物を得意とせぬ理由—合巻物の書き方—嫌らぬ點—種彦の生活—最初は讀本を執筆—反響なきに失望—種彦の一轉步—京傳の合巻物—歌舞伎趣味を中心に—『田舎源氏』の執筆—情熱に乏し

二、『田舎源氏』が歓迎された理由……………四九一
 紫式部の『源氏物語』と種彦の『田舎源氏』—上品な種彦好み—馬琴の『傾城水滸傳』に對抗—『源氏』研究—周到な結構—大體の構圖—馬琴の『田舎源氏』評—優雅な筆致

三、『田舎源氏』の梗概……………四九四
 足利光氏—種々の情事—忠義のための享樂生活—光氏の謀略—彼れに對する讒訴—須磨に隱退す

四、足利光氏の後半生……………四九八
 光氏京に歸る—新たに展開せられゆくロマンス—光氏と黄昏との間に出來た愛娘—美女玉葛を中心とした戀の繪卷—賤機を嫉妬を描いた遺篇—天保改革と種彦の文學上に於ける打撃

五、光氏的生活態度についての非難……………五〇一

武士的精神—一種の矛盾—芝居めいた色彩—足利時代と平安時代との不調和な點—武士道の形式主義—不可解な光氏の行動—美名の下に愛慾に耽る—虚偽の風—女性の盲從的傾向—眞實味を缺く

六、種彦の正本製……………五〇五

觀劇の實感性を再現する趣向—歌舞伎趣味の横溢—種彦の柄に合つた作品—窮屈のあとなし—手に入つた技巧—勸懲主義の弊—正本製の作例

七、『邯鄲國物語』の内容……………五二二

技巧の圓熟—淨瑠璃本から取材—『近江の卷』の内容—『大和』『播磨』の卷と大近松の影響—鎗三郎とお笹の戀—近松の『鎗の權三』と同一題材を取扱ふ—圓満な終局—その他注目すべき種彦の作品—佳作『六枚屏風』の蘭譯—學者としての風格—種彦の特徴—合巻物の中堅作家と代表作

第六章 江戸情調に彩られた戀愛文學(人情本)……………五二六

一、人情本の特質……………五二六

エロチックな色と抒情的な模様—人情本の意味—人情本の由來—人情本の價値—その使命—頽廢期の世相反映—江戸市民の理想—作中の主人公と特質—一夫多妻主義—女性のあきらめ—戀愛に於ける妥協

二、人情本の時代と春水……………五三三

人情本の作者—讀者は概ね婦女子—人生的意義に乏し—情痴の世界—行詰つた讀本に取つて代る—爲永春水の閑歴—賣名に焦慮して失敗

三、爲永春水の人物及び作品……………五三五

漸く世に認めらる—佳作『婦女今川』—代作と補作—天性の人情本作家—情痴の世界に通ず—彼れの無學—馬琴の術學—京山の學者的氣質—春水の無學は却て彼れに幸ひせるが如し

四、人情本に先驅した東里山人……………五三九

人情本の長所—洒落本作家として人情味多き小説を書いた東里山人(鼻山人)—彼れの傑作『廓字久爲壽』に於ける泌々した味—人情本のタイプを創始す—梅川忠兵衛の情事を描いた結構—人情本に於ける東里山人の活動と收穫—春水のために地盤を開拓せし功勞

五、人情本の進展……………五三三

春水の寫實主義—その現實味—讀本以外に新領地を開く—人情本の着眼點—女子は如何にすれば男性に愛せられるかといふ問題—柔順な女性の群—男性に反抗する女—概して誠實—三角關係の實例—四角關係

係の實例—姉妹が戀した一人の美男—義理と人情との葛藤—戀の行進曲に於ける一波一瀾

六、人情本の背景と人物……………五三五

現實の江戸—日常の些事—下町方面を主として背景に取られる—江戸市内及び市外の描寫—深夜の深川—兩國廣小路の寫生—女王の如く輝く狭妓名妓—春水が描いた歌妓仇吉、米八—地方の歌妓—遊女の佛—江戸の年中行事—縁日の光景—平凡人の平凡生活—非英雄主義の戀と人

七、『娘節用』から『梅ごよみ』へ……………五四〇

曲山人の閑歴—有名な『娘節用』の材料—武家から出た美妓小さんの悲痛な生—悲劇的情趣に依て讀者を魅す—同様の材料を表現した戯曲二三—描寫無難—偶然の利用—春水の『婦女今川』の内容—女主人公お繁—春水一流の書き方—作家生活の本道—春水が私淑した文壇の先輩—京傳、三馬に負ふ所多し—京傳の『梅花水烈』と『梅ごよみ』の關係

八、人情本に於ける描寫……………五四五

春水の人情本に於ける長所—『梅ごよみ』の内容—本系の男女ロマンスと傍系の男女ロマンス—洒落本に見出され得ぬ戀の殉情—美男丹次郎を中心として戀

の渦卷—米八と仇吉の戀愛戰術—彼の女らの懊惱苦悶—應急的構想—本系と傍系との連絡—會話に於ける妙味—迫眞の致あり

九、處女の戀及び狭妓の戀……………五三二

一脈の抒情味—純眞な處女の戀を描いて美しい場面を作る—印象深い米八と仇吉—理想の深川藝者—互ゝに意氣を競ふ眞劍味—江戸式氣前の活躍

一〇、春水の苦心とその二三の短所……………五三四

女性的な春水—流行衣裳の細かい描寫—紅葉氏と露伴氏が時勢粧に對する態度—春水がマンネリズムに囚はれた地の文—類型的男女—偶然の濫用—度々夢を作中に用ふ—餘りに卑下した春水—自家吹聴—甘く見過ぎた人生

一一、晩年の春水……………五五八

すばらしい春水の人気—天保の改革が春水に與へた打撃—春水の晩年—彼れの勸懲的作品—『梅ごよみ』以外に於ける彼れの傑作—若旦那鳥雅とお民のロマンス—花曉と小間使お冬のロマンス—初戀の妙趣を描く—口説描寫の技巧に長ず—アルジオア氣分濃厚—春水の門下から出た松亭金水とその代表作

附録

笑の文學に現はれたテカダン生活……………五六三

諷刺文學としての『夢想兵衛』『和莊兵衛』と『ガリバア旅行記』……………六〇二

参考書目……………六三九

索引篇

人名索引……………六四九

書名索引……………六五七

事項索引……………六六七

第一篇 時代と環境



第一章 江戸文化發達の過程

江戸文化と上方文化

現代人が近世日本の名を以て呼ぶ江戸時代の文化は、二つの最高峰によつて代表せられる。その一つは元祿期の文化であり、今一つは、文化文政期のそれだ。前者は江戸よりも、より多く上方文化の飛躍を示し、後者は上方よりも、より多く江戸文化の發展を示した。この二つの最高峰が江戸時代を著しく特色付けてゐる。

上方文化の特質を見ようとするならば、元祿時代の京阪を一瞥すべく、江戸文化の特徴を知らうとするならば、化政期の世態を鳥瞰すべきである。元祿期は上方文化の飛躍時代であつたと同時に、上方文學の開花時代でもあつた。當時の江戸は、未だ獨自の文化を築きあけるところ迄ゆかず、萬事、上方文化に教へられたのである。

従つて當時の江戸には、目ほしい文學が生れなかつた。俳聖芭蕉は一時、江戸にゐたが、本來、上方の人である。近松巢林子、井原西鶴は勿論、寶曆、明和の頃に至る迄の文壇人は概ね上方の人であつた。勿論、一部

の硬文學は、江戸に於ても漸く芽を吹出し、木下順庵、荻生徂徠、新井白石、山鹿素行、室鳩巢などが現はれた。それと共に徂徠門下として名高い護園の七才子——徂徠を加へて八才子と云つた——などが前後して、漢詩壇を飾つたのである。

けれども小説、戯曲、歌俳、國文學などにおいては、まだまだ上方に及ばなかつた。唯僅かに俳壇に於ける榎本其角が江戸ッ兒として氣を吐いたと云つたやうな有様に過ぎぬ。芭蕉をめぐる諸才人は多く上方人であつたのみならず、蕉門以外の系統に立つ上島鬼貫も亦上方人だつた。即ち純文學の上からすると、元祿期においては、江戸の勢力、影響が殆ど稀薄に近く、上方文壇の人々をして自由にその力を揮はしめた趣があつた。

それ故、眞に江戸文化を味ひ、合せて江戸文學の眞趣を知るには、勢ひ文化文政時代に俟たねばならなかつた。江戸時代を綜合大觀するものは、ともすると、元祿期の文化を賞揚し、化政期の文化をその下位に置かうとするものが往々ある。その故は、元祿期の文化が創造的作用を十分に發揮し、生氣、霸氣旺盛として、奔放、眞摯、豪快の心持が鮮明に浮び出てるからである。

或一部の人々が化政期の文化を元祿の下位に置かうとする所以は、前記の如き特徴が、漸次影をうすめて、守成的作用が一般に波及し、輕快、洒落の趣はあつても、霸氣、生氣、活氣に乏しくなり、頽唐、爛熟の色彩に包まれてゐるからだとする。これを現代に引移して考へると、明治文化は元祿的であり、大正、昭和の文

化は化政的だと云ふのである。

が、現代人は大正、昭和の文化をそんなに軽く見るであらうか。殊に文學の一點においてすれば、どうであらう。私は必ずしも大正、昭和の文學を輕視すまいと思ふ。その文化の調子の上に明治ほどの霸氣、活氣がなくとも、また明治の如く突進、飛躍の態がなくとも、やはり、そこに時代相應の特色と進歩した一面とを考へ合せて見ると、一概に低く評價し難い。

それとひとしく、化政期の文化は、元祿などの豪快味には缺けてゐたが、文學上、江戸獨自の色彩、調子を發揚し、江戸ッ兒の眞の姿をそこに反映したのであるから、純粹な江戸文學を展望するとすれば、正にその尖端に起つものとして重視せらるべき理由が十分にある。文學上の江戸は化政期に至つて、始めてその基礎を据ゑ、土臺が出来上り、面目、體裁を整へたのである。即ち上方文學が、元祿をその開花期として始めて根幹、花實を作りあげたのと同様で、それによつて、始めて上方文學との平衡を支持することが出来たのである。

蓋し都會文化の爛熟するところ、その上層建築としての文學の展開、飛躍が必然的に伴ふ。元祿期は京阪文化が爛熟した時で、巢林子、西鶴を出し、その他多くの文壇人を輩出した。その後、京阪文化が頽唐的になると、文學も勢ひ低調化して了つたのである。この傾向は、江戸においても亦同様に見られる。化政期は江戸文化が爛熟して、京傳、馬琴、三馬、一九、種彦、春水などの小説家を輩出し、尙ほ戯曲に歌俳に、川柳に、隨

筆に多くの名ある人々を出した。が、その文化が類唐的となつた江戸末期に及ぶと、文學もそれにつれて低調化し、固定した。歴史は繰返す。上方も江戸も、文學上同じ過程を辿り、同じ結末を見たのである。

以上によつて考へると、江戸時代の前半は上方文化の發達史であり、後半は江戸文化の進展史である。勿論、茲に云ふところの上方は大阪六分、京都四分の割合で、中心勢力となつたのは大阪であつた。當時の大阪は經濟上、日本に於ける最大勢力を占め、その市民は自由都市生活者として強大な經濟力のもとに、文化的飛躍を示した。といふよりも、寧ろ文藝上のベトロンとして、有力な小説家、戯曲家、俳人、歌人、學者らの飛躍を促したと云つた方が正しいであらう。

總じて民衆生活の發展なきところ、そこに文學の飛躍はあり得ない。それと同時に經濟的伸張なきところ、そこに民衆生活の進展はあり得ない。もつと適切にいふと、平和生活のなきところ、文學は伸びぬ。ところが、元祿期の上方は、以上の諸條件——文學の偉觀を形造るべき必要の條件を具合よく備へてゐた。

元來、上方は新開の江戸とちがつて、文化的に早くから恵まれてゐた。京都は久しい間、日本文化の中心點で、平安時代、室町時代の文化は京都によつて代表せられた。鎌倉時代でさへも、やはり、文化的には京都の勢力が相當に強かつた。伏見桃山時代とても同様である。それに近い大阪は、古來、九州四國と京都との間を繋ぐ海陸交通上の要衝に當り、始終、京都文化の影響と刺戟とを受けた。即ち文化の水準上、大阪は常に京都に追隨したのである。

二 京阪文學の勃興

以上の如き地位にあつた大阪が元祿文學に多大の寄與をしたのは、江戸幕府の勢力が確立して、平和時代が續き、武士中心の世が、おのづから、町人（商人）中心の世となつたところが多いためである。戰國時代に於ける大阪は、一時悲惨、寂寞の趣を呈したが、豊臣秀吉の時に及び、大阪復興に力を盡して、堺の富民を大阪に移し、市街を設けて、商業都市として繁昌すべき第一歩を作つたのである。次いで元和元年に至り、松平下總守忠明が、この地に封ぜられると、更に發展の第二歩を辿るやうになつた。

が、その著しい飛躍は平和の基礎が十分に固められ、江戸幕府の直轄地として、自由都市の面目を示した頃に胚胎する。當時、新しい商法を創始して、經濟上、無比の勢力を占めるやうになつた大阪の活動は、目ざましかつた。問屋を設けて、貨物の運轉を迅速にしたのも大阪であれば、十人兩替を置いて、手形の流通をよくしたのも大阪である。延賣買の法、金銀相場立の制を作つたのも亦大阪だつた。かくして寛文頃には、商業上、著しい發達を爲し、大阪の町人は相當整備した商業組織により、居ながら天下の金權を略ほ左右するに至つた。

茲に至ると、大阪の町人は、階級上、武士、農民、工人らの下に置かれても、事實、それらを踏み越えて、經濟上では、日本六十餘州、三百諸侯を支配したのである。彼等の間に於ける有力者は、その富の力にまかせて

豪華を恣にした。その代表者として淀屋辰五郎などがある。紀國屋文左衛門の如きも上方の出身だ。京都の難波屋十衛門も淀屋に次ぐ驕奢振を示した。が、それは唯表面に現はれた丈で、當時、大阪に於ける小淀屋、小難波屋、小紀文の徒は決して少くなかつたにちがひない。

それら経済的勢力によつて、大阪市民が或程度迄解放せられ、遊樂の天地において、自由に羽をのばし、閑暇を利用して、文學、美術、演劇などを享樂するに至つたことがわかる。當時の江戸は武家の都として明暦の大火災後に於ける新市街の發展につれ、經濟上相當の進展をしたけれども、大阪の如く、諸侯の國産——主として米——を一手に販賣し、或は諸侯に向つて、銀行相當の役目をしたのではなく、生産的であるよりも、より多く消費的だつたから、經濟上、一時、大阪の下位にあつたのは止むを得ない。

その上、大阪の文化は江戸にくらべると、もつと進歩してゐた。當時の京都は學問上、尙ほ權威的地位を占め、有力な學者がゐた。國文學者として有名な僧契沖を始め、荷田春滿、北村季吟、下河邊長流、賀茂真淵らは皆上方出身である。漢學方面では、伊藤仁齋、中江藤樹、熊澤蕃山、貝原益軒、山崎闇齋らも上方の人だつた。右の如く、京阪は文化的に早く恵まれ、文藝復興の土臺が出来てゐたことが、大近松、西鶴らを生み、芭蕉を出す有力な所縁となつたのである。

當時の江戸はまだそこ迄の地ならしが出来てはゐなかつた。經濟上では、流石に政治の都でもあつたから、大阪に次ぐほどの勢を示したが、學問、藝術の如く傳統の上に生きてゆく仕事は、一朝にして飛躍の道程を辿るわけにゆかない。その地ならしは寶曆、明和の頃に漸く出来たのであるから、江戸文學の主體が元祿の舞臺に登場しなかつたのは止むを得ない。

それに京阪市民と江戸市民とは、その自由さにおいて、おのづから差異があつた。政治の都、武家の都では、市民は勢ひ幕府の威力に壓倒せらるる傾きが多い。既に經濟中心の時代になつたとしても、武士の勢力はまだまだ江戸において著しいものがあつた。それ丈に市民は小さくならざるを得ぬ。武家中心の時代に比べてこそ、彼等の自由は増したが、教養において京阪市民に及ばぬのみか、兎角武家の支配下にあつて自由を束縛せらるることが、京阪よりも厳しかつた。その上、粗剛、殺伐の氣は、尙ほ士民の間に漂うてゐたので、勢ひ純文學を生産する機縁には乏しいところがあつた。かくして文化上、京阪が青壯年だとすると、江戸はまだ少年だつたといふやうな事情が、自然に純粹の江戸文學を生産せしめることを遅延させたのである。

江戸市民にくらべると、元祿期の京阪市民はより多く幸福だつた。彼等は資力においても、教養においても、自由においても、境遇においても、江戸市民より立優つてゐた。それ故、彼等は、その獨自の天地ともいふべき狭斜、遊里において、手足をのばし、また彼等の趣味にふさはしい文學、美術、演劇等を要求し生産した。元祿期以前にも、民衆文藝はいくらかあつたが、それは概ね幼稚低調のもので、主位を占めてゐたのは貴族的文學であつた。

貴族文學にも、特徴、美點はあるが、町人にとつて、それは縁遠いものだ。京阪市民はそこに不満を感じて、彼等の生活を描き、また彼等の感情を寫し、その趣味、好尚などを表現した文藝を求めた。それは唯彼等の生活を裝飾するものとしてではなく、彼等には抑へ難い内心の要求だつた。彼等は、彼等と共に泣き、彼等と共に笑ひ、彼等と共に享樂すべき藝術を熱心に求めたのである。その切實な要求に應じて、大近松、西鶴、芭蕉などが京阪方面に出現した。

かうして眞の平民文學時代は、元祿期に及んで、はじめて開幕を見た。江戸幕府の成立と共に、學問は次第に町人の手に移り始めたといはれたが、茲に至つて、文藝も亦平民の手に移つた。その作者のうちには、士流の家に生れたものもあるが、大體において、町人的傾向を帯びると同時に、町人の間から有力な作家が出た。井原西鶴の如きはその先驅者であり、また代表者でもある。

平民文學の勃興と確立！ それは元祿期の誇るべき特徴である。大近松の歌ふところ、西鶴の描くところ、芭蕉の詠むところ、いづれも平民の生活であり、平民の道德であり、彼等の戀、彼等の感情を反映して居らぬものは一つだつてない。在來、文學の主要な題材となつた貴族は著しく閑却せられ、町人が主位を占め、武士、農民がそれに次ぐやうになつた。當時の町人は、そこに自己の姿を見出し、自己の聲を聞いたのである。またそこに自己の悩み、自己の悲み、自己の苦みを見出したのであつた。現代的にいへば、彼等は、かくしてブルジョアを代表し反映する藝術を得たのである。

三 江戸に於ける民衆の勢力伸張

以上は純粹の江戸文學が完成されるに先立つて、活躍を示した上方文學の成立過程を概観したのであるが、その餘勢はひいて、寶曆、明和の頃迄及んだ。即ち大近松、西鶴を中心とした時代は、上方文學の全盛期で、元祿を彩つた花であるが、降つてそれ以後になると、大近松、西鶴の作風に追隨するもの、乃至上田秋成、江島其積その他二三の作家を出すに留つてゐた。

そのあとを受けたのが江戸生粹の文學である。それ故、順序として、京阪文學の感化、影響を或程度まで受けぬものは、殆どないと云つてもよからう。殊にそれが小説において、一層著しい。即ち化政期の小説はその素材に於て、修辭に於て、着眼に於て、構成に於て、半ば上方文學に教へられ、半ば自耕自發したのであつた。

が、それらの事は茲に省略し、化政期の文學を展開せしめる原因を爲した、江戸市民の勢力が元祿頃にくらべて、遙かに増大したことを先づ指摘したい。江戸民間に於ける商業の發達は、大阪のそれと自ら事情を異にしてゐた。大阪は諸侯に對して、國產一手販賣を擔當し、銀行同様の仕事にも當つて、商業上の巨利を得たが、江戸では諸侯、國老以下の消費階級を相手とし、小賣制度の上で異常の發達をしたのである。或は土木工事の旺んなのにつけて、巨利を得たものもあつた。それは政治都市として發達した江戸の特質とも

いふべきもので、この間から富商を生じたのである。

かくして江戸の繁華と共に、生活の程度は次第に上昇したが、一般武士の収入は、それに伴つて増加しない爲めに、旗本、家人らの如き直参の人々は経済的に苦み出した。かの札差といふ營業を生じたのは、その爲めだと云つてもよい。札差は江戸旗本の扶持米受取のこと、販賣のことを請負ひ、それによつて少からぬ利益を得た。札差營業をするものは、大岡越前守の時に百九人と定めたが、それらの人々が經濟上に占めた勢力は大きかつた。彼等は町人階級に伍しつゝ、經濟上、旗本の死活を制したのである。

この一事を以てしても、江戸に於ける町人の勢力が著しく伸びたことがわかる。江戸の芝居、旗亭、花街などに於ける札差の威勢は、すばらしく、かうした天地に於ては、諸侯を凌ぐ豪華を示した。札差は經濟上の民力伸張を代表したが、更に狹的精神を以て、町人のために氣を吐いた町奴の群が現はれ、男達を競ふに及んで、これ又民衆の勢力を増す一機縁を作つた。いづれにしても、町人は年を追うて、物質的に向上し、教養に於ても、趣味に於ても、武士に劣らぬものが續出したのである。

化政時代は右の如き過程を経た後に出現した。それらの日に於ける江戸は正に町人の天下に近いと云つてよかつた。政治上、彼等は全く無力であり、地位も亦低かつたが、劇場、花街、旗亭などにゆくと、或程度迄、彼等の手足を自由に伸ばすことが出来た。更らに學問、藝術に於ても、彼等は武士に劣らぬ丈の修養を作ること出来た。少くとも、江戸市民の中堅を形造るものは、左様した境遇にゐた。

彼等の大部分は政治圏外にあつて、一意専心、經濟的發展に精力を集中し、平生、一定の俸祿によつて束縛せられないから、生活上、寧ろ餘裕を存した。彼等はその日、その日を如何に愉快に暮さうかといふことに執心した。これ正に町人の天國である。そこに時勢に伴うて生ずる政治上の苦悶も、經濟上の煩悶もなく、武士のやうに體面や、禮儀や、規律などに制せらるる窮屈さもなかつた。それ故、彼等は自由にその文藝を享樂し、それを思ふ儘に發展せしめることが出来た。爲政者の干渉を受けない範圍内に於て――。

かく町人の勢力が江戸の一半を支配するに及び、武士は次第に町人化し、その生活も趣味も、往々、町人に追隨するものを生ずるに至つた。江戸時代の前半は、町人がいくらか武士化した傾向を見たが、後半に於ては武士がいくらか町人化した傾向を招致した。そこに武士と町人との間に、おのづから勢力の消長があつたことを明示してゐる。

それを以て、一概に武士の墮落といふことは出来ない。つまり、町人の經濟的發展に伴うて、趣味生活がおのづから洗練され、次第に向上したので、武士のうちにも、それを羨望し、次第に共鳴するものを生じたのである。それ故に、化政期の江戸は、大體に於て町人の天下であつた。ブルジョアの世界であつた。左様したのんびりした生活のもとにあつた町人は、享樂と奢侈のうちに、彼等のために代辯し、彼等の讀書生活を賑はす純粹の江戸文學を發育せしめたのである。

右の如く述べてくると、化政期の文學は悉く民衆の力に依て興起したやうであるが、一面において、その

趨勢を助長した爲政者の存在を無視するわけにはゆかない。蓋し化政期の文學は、悉く江戸趣味を基礎としてゐるが、その頃、江戸ッ兒のブライドが一般にひろがり、江戸趣味も略ぼ完成した事が独自の文學を形造る上に與つて力があつた。江戸初期から元祿前後に至る迄は、江戸趣味の芽が徐ろに伸び出したが、いづれかと云ふと、上方趣味が遙かに強い力を以て江戸を支配した。勿論、初期に於けるが如き上方崇拜は漸次影をなくしたが、それでも、文學、學藝、典禮等は、上方の影響下に興つたのである。

四 江戸文化の開花期

かうした境地を半ば抜け出して、江戸趣味の發育を速ならしめたのは、明和、安永の頃である。この時代に執政の職にあつた田沼意次は、種々の非難を受けたが、江戸市民の生活に向つては、吉宗時代の如き干渉をしなかつた。従つて市民は何の屈托もなく、彼等の趣味に即して、その生活を展開することが出来た。勿論、それには多少の弊害をも伴つたけれども、享樂機關の整頓と擴張とは、この時代に實現せられ、衣食住の上に於ても、江戸独自の風趣を帯びるやうになつて來た。また文學に於ても、學術に於ても、上方の模倣に墮せず、江戸らしい一つの色彩を帯びるに至つた。例へば、文學方面では、洒落本、黄表紙などが現はれ始め、川柳、狂歌の類が生れたのである。

茲に至ると、勢ひ江戸ッ兒の成立が豫想せられる。云ひ換へると、江戸民衆獨特の風格とブライドとを持

つた人々の多くなりゆくことが意識に上つてくる。洒落本は兎も角、黄表紙、川柳などは、江戸ッ兒の創造した文學で、彼等の好笑癖、皮肉癖、諷刺諧謔癖をそこに反映した。この傾向が一層押進められ、江戸が平和と繁榮との頂上に輝く時、化政期の文化満開となつたのである。蓋し田沼の失政について、寛政の改革が行はれ、一旦、江戸市民は風紀刷新の目的で強く頭を抑へられたのが、また解放せられたので、春風春水一時に到つて百花がばつと咲くやうに、江戸文化はその最盛を示したのである。

茲に至ると江戸ッ兒は十分洗練を積み、江戸趣味は深く土中に根を下して了つた。當時の江戸ッ兒は、江戸文化を最上のものと思惟し、上方の「粹」に對して、「通」といふ言葉を發明した。また華美に對して、滋味を尊重した。當時、江戸ッ兒を以て任じたものは、「通」「滋味」を以て理想とし、義俠、清廉、淡泊、瀟灑、輕快などを以て、彼等の特質とした。彼等は最早、上方文化の追隨者ではなく、寧ろ上方文化を輕んじ、上方人を贅六と呼んだのである。それほどに彼等のブライドは強かつた。

かかるアトマスフィアのうちに生産した化政期の文學は、結局、江戸ッ兒禮讚の文學であり、江戸趣味謳歌の藝術であるのに、何の不思議もない。そこに長所もあれば、短所もあるが、かくしてこの江戸人の文學、江戸人の藝術が始めて完成せられたと云へる。私が以下、述べようとするのは、この種の文學、殊に小説である。その序幕として、次に文化文政時代の世相を語らうと思ふ。

第二章 文化文政時代の世相

一 十八大通の出現

純粹な江戸文學を産出した文化文政時代については、一方から多少の非難があり、到底、否定しかねる缺陷が世相の上にあつたけれども、江戸市民を本位とした文化が最高頂に達した時期であつたことは一般に認めるところである。雜駁な頭を持つた史家は、頻りに當時に於ける武士の墮落を擧げて、化政時代を悲觀するのであるが、それは古い見方の一つであるに過ぎない。

勿論、江戸市民の文化が絶頂に達した事が、必ずしも、文化の理想を圓滿に具體化したといふのではない。いづれかといへば、化政期の文化には、いろいろの缺陷があつた。輕薄なところ、弱々しいところ、不真面目なところ、暗いところもあつた。武斷専制主義の重壓が、依然江戸市民の頭上に降りかかり、政治的にひどく拘束され、保守、退嬰の傾向に支配されて自棄的になつてゐた以上、江戸文化が素より健全であるべき筈はない。勢ひそこに病的な色合を帯び、輕佻な様相をも呈した一面が確かにある。

が、いづれにもせよ、江戸市民が武家を壓倒して、文化の中心勢力として動いた點に意義があつた。たと

ひ、その調子が低いものであるにもせよ、奥行が淺いものであるにもせよ、江戸特有の「アトマスフィア」を漂はせたところに、上方文化に對立して、恥ぢぬ特殊性を具備してゐた。即ち政治の都、武家の都の民衆化を示すと同時に、その文化の様相が、元祿期などと異つた進展をしたことを象徴したのである。

民衆を中心とした江戸文化の進歩と開展とは、期せずして、劇場及び花街に於て示され、そこに一つの大きい焦點が置かれた。この點は、元祿期の京阪と同じ方向を執つたが、唯その特色の上に江戸独自のカラーを現はしたのである。一體、當時の江戸文化即ち化政期の文化は元祿文化のその如く、荒削りな點、線の太い點はなく、萬事整頓せられて線が細くなつたが、眞摯、剛健、潤達、奔放なところが見え、輕快、纖細、巧緻、溫和なところがあつた。また創造、突進的ではなく、守成、尙古的で、鬱勃たる活氣、霸氣に乏しく、人爲、技巧がすぎて、自然味に缺けた趣があつた。

それが江戸末期に近づくにつれ、一層、生氣を失ひ、頹唐の色合を加へて、病的な調子、不真面目な色合を伴うた。それは神經過敏式であり、暗くてじめじめしたところさへもあつた。茲に至ると、最早、文化の行詰りで、それを一氣に打破し去らねば、光明に接することが出来ぬ状態になつた。が、文化文政期を中心とした頃は、まだそれ程でもなく、前述の如き特殊性を把持し、それを背景とした新しい文學が花やかに誕生したのである。

以上の如き文化を土臺とする花街及び劇場の發達は、どうであつたか。花街の發達は町人の經濟力伸張

と相俟つて、元祿期にくらべると、一段も二段も注目すべき點があつた。勿論、元祿に於ける紀文、奈良茂の如き豪快振は最早跡を絶つたが、その代りに、江戸市民は元祿期よりも、一般的に耽溺するものが多く、武士も町人化して、花街に出入することが度重るやうになつた。それは風紀の上から見て、多少撃感すべき點もあるが、必要上、茲に有の儘の事實を述べる。

元來、江戸の遊廓は早くから町人の天國として樂園として憧憬的となつてゐたが、安永、天明以前迄は、流石に遊廓に遊ぶことを公然得意としたものは少かつた。「通」譯しり「粹」など呼ばれることは遊廓内に於て、一つの誇りとなつたが、對社會的には、決して誇りとせられなかつた。ところが、安永、天明頃になると、この傾向が一變して、通人粹客と呼ばれるものは對社會的にも幅が利くやうになつた。それは何故であるか。

この種の傾向を招致する上に與つて力があつたのは、所謂十八大通の徒である。かうした名稱を生じたのは、當時「通」といふことを尊重した爲めであるが、彼等が果して嚴密な意味で「通」の典型だつたかどうかは、それは疑問である。が、遊客の間には重きを置かれ、彼等の云爲を模する輕巧の青少年が少くなかつた。

十八大通については、當時、風來山人の『蛇蛻青大通』、戀川春町の『十八大通無頼通説』、田螺金魚の『十八大通百手枕』などに於て、或はこれを謳歌し、或はこれを諷してゐるが、それらによつて、文士の間特に

注目せられてゐたことがわかる。山東京傳の如きは、別に十八大通について著述しないけれども、その謳歌者、心酔者の一人であつた。かく彼等は有名であつたが、その人名に至つては、存外、不正確で、『殘菜袋』及び『碁太平記白石噺』通人舞の條に徴しても明瞭でない。それらのうち、正確に知られてゐるのは、大和屋文魚、大口屋曉翁などである。國文、和歌を以て知られた村田春海も亦その一人だつたといはれる。

文魚、曉翁などは、十八大通の先達であつたらしい。曉翁は本名を治兵衛といひ、はじめ曉雨と稱したが、後、曉翁といつた。彼れの事は往々、花川戸助六と混同して傳へられるが、それは訛傳である。一つは、助六そのものの正體が闡明せられない爲めで、京傳の『近世奇跡考』によると、唯「淺草山谷の俠者で、別段、目立つた行跡もない。」としてゐる。それが戯曲化せられて、上方的趣味を帯びた萬屋助六と愛妓揚卷の心中劇をつきませ、茲に俠客劇『花屋形愛護櫻』が出来上つたものと思はれる。

が、曉翁が二代目團十郎（柏筵）の藝風に共鳴して、その扮するところの遊俠者助六の扮装を模し、「御藏前の助六」と云はれたことは、三升屋二三治の『十八大通』に記述せられ、事實に近いかの如く思はしめる特に「御藏前」の三字を冠したのは、十八大通の多くが、藏前の札差で、曉翁も亦その一人だつたからである。その伊達を街つた様子、花街の歓迎を受けた有様は、『十八大通』に左の如く記されてゐる。

葛飾の馬文耕が著したる草紙には、大黒の紋を付けたるは、札差伊勢屋宗四郎を今助六と書いたるは誤にして、大黒を真向に、色さしの加賀紋を染めさせ、替紋に付けしは大口屋治兵衛曉翁といふ人の事なり

吉原通ひの小袖の紋に、大黒の色さしは助六の出立にして、二代目柏筵の時、ぎよやう牡丹を色さしにして付けしを學びて付けし事と思ふ。曉翁吉原へ来る時は、黒小袖小口の紋付を着流し、鮫鞘の一腰、一つ印籠、下駄はきて大門を這入ると、仲の町兩側の茶屋の女房出て、曉翁が大黒の紋を見れば、そりやこそ福神様の御出とわやくいふ故、いつしか此姿を今助六といふ。云々。

この記事を読むと、曉翁が助六と混同されたわけが略ぼ分明する。曉翁は遊俠者助六の意氣に同感したのであつたらう。

が、吉原土堤で道心坊主を納得させて、名刀「濡衣」の切れ味を試めしたとか、町家に喧嘩を吹掛けた勇力の鳶の者を懲したとか、彼れに無禮の振舞あつた米搗男を杵で打殺さうとしたとか傳へらるるのは眞實であらうか。『十八大通』には、曉翁の大力であつたことを記してゐるが、恐らく手荒いことはしなかつたらうと思ふ。唯鳶の者の腕を捻ぢあけると、そつと金を握らせて、屈伏を餘義なくせしめたやうな行動は俠を以て任する彼れの日常に時折見られたことかも知れぬ。「通」を以て自ら負ふ彼れは、決して手荒なことをしなかつたであらう。

曉翁が花街に豪遊したことは、福の神と云はれたことでも明瞭であるが、一方、風流の道についても相當熱心であつた。その俳句と傳へらるものが二三あるのを見ると、優雅な趣味によつて、洒落、滑脱の旨を得ようとしたことがわかる。

二 大口屋曉雨と併立した大和屋文魚

大和屋文魚（太郎次）も亦一風變つた人物であつた。京山の隨筆『蜘蛛の絲卷』と『十八大通』とを對照して見ると、略ぼ彼れの風骨を想ひやることが出来る。彼れは日本橋西河岸の材木商で、『十八大通』には「江戸中の大通といはるる人は、皆々此文魚に隨うて、親分兄弟などと頼み……各々文魚より文の一字を貰うて子分となり、大通の内に入る。」と記してゐる。

彼れは常に風采に心を用ゐる、その頭髮を本田くづしにする時には、その子分、文蝶と呼ぶ髮結のみを用ゐる、「文蝶が結うたのでなければ本格でない。」と云つた。彼はその遊び振にも風流を旨とし、洒落を極めた。或時は富士山上で鼠花火を揚げて、人の意外に出で、また或時は七夕に際して、花街に立てられた小笹を買収し、遊女が色紙に記した筆蹟を集めなどした。

文魚は放蕩のため、晩年、その資産を失つたが、而も彼れの大盡的氣分は容易に消え失せなかつた。『蜘蛛の絲卷』によると、ある貴族階級の隠居が、文魚の河東節に長じてゐることを知り、或時、彼れを召出して、その美聲を聞いた。文魚が語り終ると、隠居は別席に招いて、酒食を饗したが、文魚が昔、大盡であつたのにちなみ目錄は多く與へず、八丈縞五反を與へた。それと共に、文魚が伴ひ來つた三味線引二人には目錄を多く與へた。

その折、文魚は依然、昔の鷹揚振を示し、「今日は御苦勞」と云つて、三味線引の一人に八丈縞三反を、他の一人に二反を贈り、自分は物ほしさうな風を少しも見せなかつた。それは一種の虚榮みやげでもあつたが、そこに文魚の風骨があつたとも云へる。山東京傳は、彼れの全盛時代に彼れに従つて、吉原に遊び、その洒落本しやれほんの材料を得たのである。

十八大通のことは、大體以上でその一半を察することが出来よう。彼等は日夕、吉原、深川などに遊び、妓樓に劇場にその通を發揮して、當世一流の藝人をその取巻とした。その關係から俳優、音楽家のベトロンともなり、思ひ切つて金を撒きちらした。彼等はその教養のために、俳諧の道に悠遊し、江戸趣味發揚の心から、江戸節——半太夫節ともいふ——及び河東節の意氣を尙び、風俗は「藏前風」なる一派を開いた。

藏前風とは、意氣の象徴で、その頭は刷毛先で細く、です入らずの本田くづしとし、水髪にさつと結はせ、月代は剃り立てを嫌つて、額を三分ほど抜きあげ、中剃をぐつと大きくしたのを好んだ。衣服は小袖の綿を薄くし、意氣な三枚重ねを纏ひ、その袖口を細く、ゆきを長くしたのである。その紋は細輪に小さくし、南京がけ黒仕立を通とした。この本田頭に結つたものは、必ず銀煙管を手にすることに定められたが、大口屋金翠（八兵衛）の如きは特に純金の煙管を始終手にした。また曉翁は銀のはり金を以て元結に變へ、人目を惹いた。

人によつては、この十八大通の人々を一概に痴漢とけなして了ふものもある。いかにも彼等が妓女の美

に耽り、藝人、幫間らを愛して、金錢を湯水のやうに費した點は同感し難い。けれども彼等の云爲にも取るべきところがないではなかつた。例へば、彼等の一人、全吏（四郎左衛門）が或顔見世芝居を見物に出かけた時、座主が金に詰つて、半日ほど客を待たせ、尙ほ幕をあけぬので、一般見物がひどく迷惑して騒いでゐると、彼は忽ち百兩の金を投出した。それによつて、顔見世を縁起よく開幕したと傳へらるる如きは、一種の俠的行爲と見ることが出来る。

それに彼等が文學に演劇に音樂にすべて江戸情調を本位としたものを推奨し、上方趣味から獨立しようとしたことも、化政度の文化を進める上に寄與するところがあつたと云へよう。唯當時の不良少年や不良青年が十八大通の豪奢振を傳聞して、これを快とし、無闇に彼等に共鳴したり、憧憬したりしたことが、結果として、花街謳歌の度を強めた。その責任の一半は、十八大通にあるが、他の一半は青少年の徒にあるといはねばならぬ。

三 花街の繁昌

併し、公平に考へると、安永天明以後に於ける江戸人が、花街讚美の空氣に取巻かれるに至つたのは避け難い勢であつた。演劇に於ける享樂は美の鑑賞を主とし、實感から遊離する場合が多いけれども、花街に於ける享樂は人間の本能及び戀愛に根ざし、實感を主とするから、勢ひその方へ、より多く引付けられ易かつ

た。のみならず、いついかなる時にも、江戸人の鬱氣を散ずるところは、旅行以外、花街を除いて他にないといふのが當時の實況だった。農民ほど苦しくはなくとも、武斷專制主義が、ともすると、彼等を脅かし易く、不安憂惧の氣が絶えない當時にあつては、勢ひ利那的享樂主義に走るのには、制し難いことであつたらう。

かくして江戸は花街のための江戸、遊廓のための江戸となつた觀を呈し、その方面に於ける言語風尙が直ちに社交界に反映せられ、文士はこれを謳歌するに忙はしく、畫家はこれを主題として技倆を揮ふことに力め、音樂家はまた花街風景を歌ふことに専念した。それは健康な江戸を腐蝕する一主因となつたが、大勢の向ふところ、誰もこれを矯正することが出来なかつた。

當時の遊び振は元祿の豪快振にくらべると、すつと輪廓が小さくなつてゐた。漫然大盡振を發揮するところは、通人を以てをる人々の潔しとせぬところで、勢ひ四疊半式の遊びが流行するに至つた。その餘勢が大川に於ける屋根舟で妓と對酌して微吟すると云つたやうな風尙を導き出したのである。

蓋し當時、通を氣取るものは、在來の定型を追うて、艶麗な襦袢姿で客に媚びる遊女よりも、寧ろ變り小紋に唐繻子の帶と云つたやうな小意氣を旨とする町藝者に心を寄せた。茲にも時代の變轉がある。この時代の通客は歌妓と共に猪牙舟で水邊の旗亭に赴き、四疊半裡に淺酌するのを可とした。或は向島に、或は深川に、或は柳橋に――。

以上の結果、おのづから船宿の勃興を見たのである。船宿は今の待合茶屋の形で、そこに人情の小唄が演奏せられ、戀の行進曲が唄はれた。中にも、深川は右の如き關係から、全盛を極め、その歌妓を「異の羽織」と呼んで、意氣な女性の象徴の如く見た。爲永春水の戀愛小説（人情本）が、主として材を深川に採つてゐるのは、這般の事情からも來てゐる。かの十八大通の徒は、吉原のみならず、深川にも、豪奢振を示して、その江戸ッ兒的氣象を杯盤の間に發揮した。深川の歌妓中に、いくらか俠的な心持があるのは、それらに訓練されたからだつた。

以上によると、遊女中心の時代が漸く去つて、町藝者中心の時代が來り、それにつれて猪牙（船）の發達、船宿の發展があり、水邊旗亭に於ける會席料理の進歩を招來したことが略ぼ察知せられる。それは一面、當時の遊女が昔のやうな教養を缺き、次第に品質を低下したことに原因し、それに伴うて、廓内にも、藝妓の發生を見るに至つた。安政年間、吉原に於ける町藝者は二百四十人を越えたといふ。

左様した新傾向に併行して起つたのは、小遊廓ともいふべき岡場所（私娼地）の隆昌である。岡場所が一番多いのは、深川と本所とであつた。その他、赤坂、谷中、市ヶ谷、麻布、淺草などにも散在した。それは江戸幕府の風紀振肅の旨に違反した事象であるが、時代の大勢は江戸を腐蝕する娼婦の存在跋扈を制することが出来なかつた。江戸の不健全と不純とは、蓋しこの岡場所から放散する氣臭によることが決して少くなかつたのである。

それ等の方面に於ける遊客は町人のみならず、武士も亦多かつた。武士の町人化は、既に平和の基礎が確

立したと同時に起つたと云つてよかつた。彼等は戦時に於てこそ緊張するが、平和の時代には、閑暇がありすぎ、無爲、徒然のみに甘んじてゐるわけにはゆかなかつた。と云つて、彼等は第二の由井正雪たり、竹内式部たることを許されなかつたとすると、勢ひ享樂を求めたくなるのが常態で、事實、當時江戸に出た武士は日毎に享樂を夢みたのである。

幸田露伴氏はその長論文『一國の首都』中に化政期の武士が軟化したことに言及して、「甲州武士にも銀煙管を持たしめ、三河侍にも、薄綿の三枚小袖を被らしめ、『武鑑』を抛つて『細見』を手にせしめ、竹刀だこあるべき旗下八萬騎をして、或は指甲に絃路いとあらしめ、鎧櫃には祕戲の圖を藏し、腰刀には細身を擇ましまむるに至りたれば……」と嘆息した。剛健、質實なるべき武士が既に左様だとすれば、町人の耽溺は防ぎ切れるものではなかつた。

四 歌舞伎趣味の普及

花街の繁昌に對して、劇場の賑ひも亦目ざましかつた。蓋し人生が一大劇場であるとすれば、演劇は人生の小縮圖である。その縮圖に對して無關心なものは少いであらうと思はれる。殊に化政期前後においては、演劇が江戸市民の慰藉となり、彼等にいろいろの話題を與へると共に、劇場が一種の社交俱樂部の如くなつた以上、その賑ひが極度に達するのは、自然の勢であつたらう。

或意味において、化政期前後の江戸は演劇のための江戸、劇場と俳優のための江戸でもあつた。この期に上方趣味の演劇に向つて、江戸情調本位の演劇を完成したのは當然のことで、小説も繪畫も社交場裡の話題も、服装衣裳の好みも劇化したし、聲色に、似顔畫に茶番に劇趣味が横溢した。即ち江戸の觸目萬象が歌舞伎の世界であるかの如く見えたのである。

それ故、當時第一流の俳優は人氣の焦點に置かれた。彼等は表面「河原乞食」と呼ばれたが、その生活は豪奢を極め、市川海老藏（七代目團十郎）の如きは、度が過ぎるために、天保年間、追放に處せられたことがあつた。これを當時の文學者が概ね貧しかつたのにくらべると、そこに大分の隔りがあつた。彼等は演劇王國の寵兒で彼等の愛顧者は、その舞臺姿に憧憬するために、その要求に應じて、似顔畫その他劇畫の流行を見た。この趣は、現代の第一流映畫俳優に對する熱心なファンの關係に似てゐると思ふ。即ち化政期の演劇ファンが似顔畫勃興のスピードに鞭つたのである。

かく江戸を擧げて、演劇ファンに満ちた以上、畫家の多くも亦そのファンであつたにちがひなかつた。嘗に畫家のみならず、文士の大半も亦ファンの尖端に起つたにちがひなかつた。勿論、葛飾北齋、曲亭馬琴の如きは、見識上、ファン圏外にあつたが、それでさへも不知不識、歌舞伎趣味を無意識的に發露した。『八犬傳』に於ける馬琴自筆の下繪は歌舞伎的であり、北齋が讀本に描いたところは、人形芝居の臭味が漂うてゐたのである。

勿論、劇畫の發生は化政期前後にあるのではなく、江戸幕府の成立後、間もなく見られたことである。即ち岡清兵衛が作った金平本の出現に伴ひ、もう芽を吹き出して、その挿畫は、當時行はれた劇の荒事（金平趣味）と同じであつた。この劇的空氣のうちから生れたのが菱川師宣の芝居繪で、當時、俳優小兵衛の似顔を描いたのが一枚現存してゐる。彼れについて芝居繪の一派を創成した烏居清信が現はれ、所謂丹繪によつて、劇の荒事などを描いた。その繼承者清倍、二代清信、三代清信及び清満らによつて、烏居流の特色は更に發揮された。

かうして芝居繪は次第に進歩し、漆繪、紅繪などが發明せられて一段の面白味を加へたが、鈴木春信が錦繪を創始するに及び、勝川春章が出て、芝居繪に新生面を開いた。それは安永天明の頃である。それに次いで寫樂が現はれ、在來、類型的に行詰つてゐた似顔畫の上にはつきりとした個性を印象付けた。彼れのカルケチュアは彼れの天才の産物だと云つてよいほど生動してゐた。

爾後、初代豊國が現はれ、その傳統を追うた國貞が出て、迫眞の妙技を似顔畫の上に揮つたので、文化文政前後の浮世繪界に輝かしい生色を添へた。殊に國貞の五渡亭時代に於ける作品は優れたものが多かつた。茲に至つて、似顔畫の美は、その頂上に達したと云つてよい。

化政期前後の錦繪に現はれた似顔畫には、全身、半身及び顔面を主として描いた「大首」と呼ぶのがあつた。當時、評判の美女や華魁などが「大首」に描かれないで、ひとり、俳優のみが「大首」に描かれたのは、

當時の江戸市民が、俳優の技藝そのものよりも、俳優の顔といふ上に重きを置いた爲めでもあつたらう。彼等のうちには、名優の技藝を是非する丈の鑑識眼を持つたものがあつたらうけれども、その多くは今日の映畫ファン程度の人々で、ファンが映畫俳優の寫眞を珍重する如く、似顔畫の大首を喜んだのであつたらう。

當時、似顔繪の流行は、やがて地口行燈や團扇などにも、それを描くに至らしめた。その頃の團扇は八寸と云つて、長の詰つた横に平たい型であつたので、大首を描くに適してゐた。この方面に伎倆を揮つたのは豊國門下の國政である。國政はまた稻荷行燈などにも大首を描いた。更にそれらの團扇に贅をしたものに、式亭三馬がある。勿論、三馬は頼まれて止むなく、時々左様したことをしたに過ぎぬのであらう。

その贅といふのは、先づ俳優の名を記し、次ぎに短文で推稱の辭を述べ、それから狂歌を一首添へたと云つたやうな具合、形式であつた。その狂歌は何の面白味もない平凡なものであるが、ファンには喜ばれたにちがひなかつた。例へば三馬の手になつたのを舉げると、阪東三津五郎の白酒賣に題しては、「うまみある江戸狂言のやまとやは、おもしろ酒のやはらかでよし」と贅し、岩井半四郎の女髮結お露については、「お露とは名もよく通る岩井櫛、すく人おほき女髮結」と云つたやうな調子である。

三馬の『式亭雜記』によると、彼れが依頼を受けた贅のことを記してゐるが、文化八年四月二日には、初代豊國描くところの澤村源之助（油屋清兵衛）、七代目團十郎（助六）、岩井半四郎（三浦屋總角）らの似顔畫に贅をした。同月八日には更に松本幸四郎（鳶頭五郎兵衛）、阪東三津五郎（素顔）、岩井半四郎（女髮結お

露)の贄を、同月九日には、瀬川路考(素顔)、澤村源之助(素顔)、岩井半四郎(素顔)の贄を、同月十一日には、尾上松助(素顔)、阪東三津五郎(助六狂言、白酒賣)の贄をしてゐる。

かうして演劇趣味が旺んであつたと共に、士民のうちには、聲色の専門家ともいふべき人々が出た。勿論彼等は俳優の聲色を真似て生活したのではなく、旦那藝としてこれを演じたのだが、迫真の妙を得たものが少くなかつた。蓋し化政期以前から、聲色は次第に流行しはじめ、『賤の小田巻』などによると、旗本御家人の二男、三男が白猿の聲色を模したことが記されてある。

が、その技巧が非常に進んで、堂に入るやうな具合になつたのは化政期で、『三芝屋役者聲色早合點』を見ると、第一流の名人十二名を擧げてゐる。二流、三流以下に至つては數ふるに違がないほどであつたらしい。この勢につれて、芝居の物真似ともいふべき茶番狂言が士民の間に行はれ、相當身分あるもの迄がそれを嗜んだらしい。柳亭種彦の如きは、その一人で、平生、阪東三津五郎(秀佳)の藝風を愛するの餘り、素人狂言や茶番などの席上で、その聲色を模し、「秀佳その儘だ。」と云はれたほどである。

五 新興江戸音楽

演劇の繁昌と共に逸してはならぬのは江戸音楽の新興である。江戸において、最初、勢力があつたのは、上方から輸入せられた音楽で、江戸創始期には、泉州堺の出身、薩摩淨雲が創造した段淨瑠璃が行はれ、『曾

我物語』、『酒吞童子』のやうな豪壯、活潑を旨としたものを操人形につれて語つた。その門下四天王の一人、櫻井丹波掾は岡本清兵衛の作つた歌曲によつて、金平節を始め、その武張つたところが當時殺伐な空氣がまだ消え去らぬ江戸の人氣に投じた。それが演劇に影響して、初代市川團十郎の荒事を生むに至つたのであつて、音楽は早くから演劇に結びついた。

金平節に次いで行はれた外記節や大薩摩主膳太夫によつて始められた大薩摩節なども、趣の上に於ては豪快であり勇壯であつた。が、江戸士民が久しく平和に馴れるにつれて、音楽に對する趣味も、おのづから變り、漸次、柔か味ある歌曲を望むやうになつた。この機會に乗じて起つたのは肥前節である。それは杉山丹後掾の弟子、江戸肥前掾の語るところであつたが、在來のにくらべると、人情味を加へ、殺伐味がなくなつてゐた。その肥前掾の門下から江戸半太夫が出て、説經節と肥前節とを調和し、半太夫節を作つた。茲に至ると、江戸音楽は外記節、大薩摩節が出来た當時とは大分趣を異にして來たのである。

そのあとを受けて現はれた河東節に至ると、江戸趣味が漸く鮮明に現はれ來つたことが思はれる。それは金平節、外記節などと異つた洗練味ある江戸情調の一表現だつた。十八大通の一人、文魚は河東節の名人であり、その讚美者、保護者でもあつたが、この曲節を始めたのは、半太夫の弟子、十寸見河東だつた。河東節は半太夫節へ在來の各派の長所を採り入れた江戸趣味本位の音楽で、助六の狂言に用ゐられた『由縁江戸櫻』は、その長所を代表した一曲といはれる。

かうして江戸本位の新音楽が起りかけて来たところへ、更に上方趣味の音楽が輸入せられ、それが一時、非常な勢で江戸を風靡した。それは義太夫節及び豊後節である。義太夫節は竹本義太夫の創作したところであつて、巧みに變化自在の曲節を作り、文豪近松巢林子及び人形遣ひの名手、吉田三郎兵衛、辰松八郎兵衛らと提携して、到頭、世人をして「義太夫節は淨瑠璃中の王者だ。」と推奨せしめるに至つた。それを江戸に傳へたのは、辰松八郎兵衛で、大阪から義太夫節の名人を呼寄せて普及を計り、すばらしい勢であつた。それは享保年間のことである。

それと前後して、都太夫一中の弟子、國太夫半中が大阪から江戸へ来て、宮古路豊後と名乗り、豊後節を普及した。その内容は近松情調の一部ともいふべき心中、道行などを主とし、且つ多少、煽情的に出来てゐたので、花街、劇場の趣味が旺んにひろがつてゐる時代の人心に投じ、風教を害するといふ名目の下に、元文四年、禁止せられたほどであつた。それから、義太夫は天明頃迄旺んであつたが、化政期に至ると、江戸市民の趣味がおのづから一變したので、次第に衰へたのである。

以上は少しく岐路に走つた嫌ひがあるけれども、化政期前後の江戸音楽を概叙するについて、順序上、一言したのである。かくして文化文政前後の江戸士民が喜んだ音楽は何であつたらうか。長唄、常磐津、清元、新内、富士松、富本などであつたと思はれる。他に一中節があるが、本来、上方から来たのであつて、江戸では、その上品な點が一時、旗本などに喜ばれたに過ぎぬ。

長唄は上方から来たと思つてゐる人もあるが、事實、江戸の産物だつた。それは寛永十年、杵屋喜三郎が猿若座で歌舞伎の囃子に三味線を加味して歌ひ始めたといはれる。長唄は最初から劇場と關係が深く、杵屋一門によつて、江戸趣味的に發育した。それは歌詞の上に見るべきものが少いが、上品で清楚なところが江戸士民の嗜好になつたのである。文化文政前後の作には、『汐汲』（櫻田治助作）、『老松』（杵屋六三郎）、『勸進帳』（同上）、『吾妻八景』（同上）、『蜘蛛拍子舞』（杵屋佐吉）、『娘道成寺』（杵屋彌三郎）などがあり、その初期の作品は享保年間に始まり、寶曆、明和以後、新曲が多く製作せられ、文化文政に及んで隆昌を極めた。

次に常磐津は常磐津文字太夫の創始するところで、義太夫を骨子として、それへ豊後節、一中節の味を加へた江戸情調本位のものであつた。滋味と粹とを調和して、艶麗の趣致ある語口の上に江戸士民の心持にぴたりとはまつた點があつた。それが完成の域に入つたのは化政期である。これ又演劇と關係が深く、所作を演ずる場合に多く用ゐられた。

常磐津に對して當然思ひ出されるのは、富本節である。それは常磐津文字太夫の弟子、宮本豊前掾が始めたもので、その巧緻な曲節においては、常磐津と同一であるが、歌詞の上に留意して、上品ならんことを力めた。この點から上流社會の共鳴を得て、一時常磐津を凌ぐほどの勢を示したのである。それには二代目豊前掾の天才が一世を動かしたにもよるのである。

それから富士松薩摩掾によつて創始せられた富士松節、その弟子鶴賀新内によつて始められた新内節は

いづれも江戸士民に多くの共鳴者を得た。その感傷的なメロデーは、下町方面の江戸ッ兒に強い感銘を與へないで措かなかつた。その聲調上に於ける工夫、按配が可なりに巧緻を極めてゐるので、そこに独自の旋律を編み出し、『明烏』、『蘭蝶』などの代表的なものに於て民衆の嘆賞を得た。

以上は皆江戸情調の豊かなものであるが、それらの最終幕に現はれたのが清元だつた。それは文化文政時代の産物で、本来、富本節から分離して、別に一派を爲したのである。その始祖、清元延壽太夫は最初、富本を學んで、齋宮太夫と云ひ、劇場でその美聲を賞讃せられたが、或事情で家元と衝突するに及び、文化九年、一時廢業したが、徳川家の連枝清水家の後援を得て、清元節の名稱のもとに、その得意の咽喉を市村座の觀衆に聞かせた。その清艶な曲節、巧みな歌調は、忽ち江戸の人気に投じ、見事にその独自の地歩を占めた。それは「粹」とか「通」とかいふことを直ちに象徴するかのような微妙さを具現し、江戸ッ兒を恍惚たらしめるところがあつた。これも亦演劇と少からぬ關係を有し、『北州』、『權八』、『かさね』、『神田祭』、『善玉惡玉』、『喜仙』、『吉原雀』、『十六夜清心』など江戸民衆に親みあるものが多い。茲に至つて江戸の音楽は、そのロオカル・カラアを確保したのである。

六 大名武士の經濟的窮迫

如上、狹斜の江戸、歌舞伎の江戸、音楽の江戸を鳥瞰した以上、進んで士民の日常生活にも言及しなければ

ならぬ。當時の幕府は所謂大御所時代で、家齊が政局を指導したが、その極盛と見らるる裏面には没落の暗影が漂うてゐた。その暗影の最大なるものは、幕府財政の行詰りである。

それは家齊の奢侈にもよつたが、もつと根本的な致命傷は、一般大名及び武士の經濟的行詰りである。幕府の財政が紊亂して、未だ立直されぬうちに、經濟上から、幕府を支持すべき大名、武士が疲勞し、困憊し出したのである。この經濟不安が、幕府、大名、武士に取つて最大の癌であつた。勿論、大名のうちにも、富強な地位にゐるものもあるが、それは寧ろ少數だつた。

蓋し士道と經濟とは兩立し難いのみならず、封建制度の自足自給主義のうちにも、やはり、經濟的逼迫を來たすべき要素を含んでゐた。平和と共に經濟中心の時代が來て、都會では、ともすると、武士に向つてさへも、貨幣價值の上から人物價值をも評價しやすい傾向があつたので、武士はその體面上から、生活上、物價騰貴に伴ふ經濟上の增收を必要とした。ところが、封建制度においては、最初から大名、武士が經濟上の伸縮宜しきを得るやうに配慮按配した點がなく、時代の推移如何に關らず、また物價の騰貴、生活費の膨脹があるに關らず、昔の儘の一定した俸米によつて必然生活すべく、規定されてゐたのである。

元來、大名の俸祿は最初から増俸されるよりも減俸せられ易く、また減收を招き易い事情のもとに置かれた。幕府の定めたところに従ふと、はじめは四六六民の規則で、五萬石の大名は實收二萬石(四割)といふこととなる。後、税法が五公五民となつた場合にも、その實收は二萬五千石で、五萬石の半ばに過ぎぬ。更に

その俸米は粃穀が付いた儘であるから、それを取去ると、一萬石乃至一萬二三千石に減るのである。而も大名はその實收によつて、臣下を扶持し、參覲交代の役目にも當らねばならなかつた。

のみならず、幕府は成るべく外様大名の權力を減ぐことに力め、餘裕ある大名に向つては、容赦なく加役を命じて、財力を減少せしめることを何とも思つてゐなかつた。その上、大名に落度があつたり、政治向に不取締の點があると、俸祿を沒收し、或は減俸を命ずるについて、斟酌することが少かつた。茲に大名の經濟的逼迫を告ぐべき根本の事情があつた。その上、時代の進歩につれて、物價は高く、生活費は膨脹してゆくのみであつたから、大名の大半は勢ひ經濟上の痛に悩んだのである。

大名が既に左様だとすれば、その下にゐる武士が一齊に經濟的逼迫に陥るのは當然の歸結である。武士が傳統を固守して、半兵半農主義の生活を支持するならば、經濟上の苦痛は比較的少なく、體面維持も亦地方へ留ることによつて、略ほこれを全うし得たかも知れぬ。が、時勢は、すべての武士を田舎に定着せしめては置かぬ。徳川幕府の命令によつて、各藩は參覲交代の役を勤め、留守居を江戸に置くと共に、日本經濟の中心——大阪（若くは江戸）に藏屋敷などを置くとなると、武士は勢ひ都會の空氣に接することとなる。武士が一度、都會の華美、贅澤な生活に觸れると、勢ひ素朴、剛健の氣を銷磨し易かつた。

のみならず、武士が如何に昔ながらの禁慾生活を維持しようとしても、時勢に超然としてゐることは出来なかつた。武力中心の時代が去つた以上は、やはり、武士も亦經濟力の支配するところとなるを免れぬ。周

圍のすべてが經濟中心に動く以上、武士のみその例外例を守るわけにゆかぬ。それに武士とても木石でないから、或程度の享樂、或程度の贅澤はしたいといふのが、偽りなき人情である。とすれば、いつ迄も禁慾主義に終始することが出来ぬ。茲に一つの大きい難點があつた。

それに武士の俸祿が固定的になつてゐて、物價が騰貴しても、それに伴ふ丈の俸祿が給與されぬのである。それも江戸時代の前半は、未だ堪へ易かつたが、後半になると、世の中が一體に贅澤になり、生活費が膨脹するのみで、それを抑制するには並々ならぬ苦心を要したから、武士は經濟的に自滅しなければならぬ破目に置かれた。この傾向は殊に江戸にゐる旗本、御家人及び役儀上江戸に留つてゐる各藩士において、一層甚だしきものがあつた。彼等は日夜、自分よりも階級的に低い地位にゐる町人の贅澤、奢侈を眼前に見てゐるので、勢ひその空氣に感染するのを免れぬ。而もその収入は固定的で減ずるとも殖えなかつた爲めに、經濟上の苦痛が多かつた。この難境にあつて、彼等は何處迄も、武士の面目、體面を汚さぬやう腐心しなければならぬ地位に置かれたのである。

彼等のうちには、この難境に打克つたものもある。が、それは寧ろ小數にちかく、その多くは苦悶のうちにをり、力なくて敗北するものは、經濟力の前へ兜をぬいだ。それが即ち武士の町人化である。この傾向は化政度前後に及んで殊に甚だしかつた。勿論、左様した傾向を極力防ぐために、知足主義、節儉主義及び米價調攝論などが、學者の間に高唱せられたが、餘りに消極的であり、月並式であるがために、その効果は弱小

であつた。また幕府は受動的に武士の貧乏を救ふに力め、町人の奢侈を戒めたり、富豪抑壓策を執つたりしたが、これ又利き目が薄かつた。武士の大半は依然として貧乏であり、依然として窮屈であつた。それ故意志弱く抵抗力少きものは、勢ひ町人化しないわけにゆかなかつた。それが彼等に取つて、唯一の逃げ道だつたと思はれる。その實例は餘りに多いので、茲にあげぬが、曩きに引用した露伴氏の言葉を思ひ浮べ、且つ化政期前後に御家人の株が賣買されて、天下直參を誇る江戸の武士が貨幣價值へ換算された一事を指摘すればそれで事が足りよう。

七 町人階級の生活向上

化政期の江戸に於ける武士階級の受難が深酷であつたのに引きかへ、町人階級は寧ろ得意で生の享樂を謳歌した。彼等は政治上、公民としての権利がなく、その營業の上にも、生活の上にも、不自然な壓迫を幕府から加へられたが、一方において、彼等の抜け道があつた。それは彼等の享樂生活である。若くは衣食住の上に於ける贅澤である。

蓋し彼等は武士階級の如く、一定の俸給に縛られず、不自然な禁慾主義に抑へ付けられず、もつと自由であり、氣樂であつた。それに物質上の進歩に伴つて、収入の増加を計り、心がけ一つで、富裕の身となることが出来たので、その實力を養ふ上に支障がなかつた。即ち多年の平和に伴ふ經濟中心の時代は、より多く彼等に幸ひしたのみならず、今日の如き勞資の争闘がなく、富者とプロレタリアとの睨み合ひがなく、大資本主義から來る不快な壓迫もなく、思想上の複雑な葛藤から來る苦悶もなかつたが故に、大體において、のびのびしてゐた。勿論江戸末期になると、時勢の大動搖から、暗い影が民衆の上にもさして來たけれども、文化文政期には、まだそこ迄ゆかなかつた。少くとも、それほど行詰らないのである。

以上の結果、彼等は經濟上の餘裕を有したものが多く、それにつれて生活の向上、進歩を生じた。彼等は花街に、劇場に、妾宅に、寄席に、旗亭にその享樂慾を満足させた。また彼等は、その衣服や持物や住居などに「滋味」とか「通」とかいふことを尙んで、出來る限りの贅を盡した。左様した傾向を強めたのは、既に述べたやうに、藏前の札差らであるが、ひとり、札差のみならず、相當に富むものは、何れも如上の風潮を追うた。喜多村香城の『五月雨草紙』を見ると、「文化の頃は世上が太平の極度に達し、戸を鎖さないで眠り、鼓腹して太平を歌ふ有様で、管絃の宴、書畫の會が日夜絶えなかつた。」といふ旨を記してゐる。それによつても、當時の風潮が知られる。

當時、衣服の好みは一般に進み、奢侈が旺んだつたといはれた田沼時代にくらべても、格段の相違がある。田沼時代には、飯田町に住居する町人のうちで、小紋染の羽織を持つものが唯一人に過ぎなかつた。それも近所の人々に彼是噂されるのを氣にして、外出の際、羽織を懐中し、大分遠くへ行つてから、始めて羽織を着用した。ところが、化政時代になると、表通りに住む町人は悉く小紋染やそれに相應した羽織を、公然着用

するに至つた。唯文化頃から、長羽織が廢れて長たけが短くなつた丈だつた。

當時、市民の間で通人とも云はれた若い紳士の風俗は、爲永春水の『春告鳥』に記されてゐるが、それには、「上着は媚茶の三舛格好の極こまかき南部縮緬、下着は琉球紬、一ツ羽織は唐棧のおとなしきこまがら縞、帯は筑前の紺博多、しかも一本どつこなり。その外持もの懐中もの、これに準じて好風なることと知るべし。」とある。更に相應に凝つたといはれる人妻の風俗について、春水は「茶みぢんの艶なし上田紬、下着は絹縮緬の媚茶の小辨慶を二つ重ね、もつとも花色羽二重の裾まはしをつけ、御納戸しほりの長縞絆、淺黄縮緬の湯具、黒縞子の帯をしだらなく結び、紬を御納戸と媚茶と鼠色の染分にせし五分ほどの手綱染の前垂、紐は松葉色の五呂服絲の端を立落せしを幅を狭くして付けたり。」と記してゐる。

かの化政期の通人として知られた酒井抱一——姫路の城主酒井雅樂頭の次男、畫家兼俳人——の服装は、無地淡葡萄酒色の羽二重に同地質白色の下着を重ね、牡丹に蝶のとも色模様もようの信玄羽織を古代紫の長紐で結び、焦茶色の金絲で波紋を織出した帯を占めてゐたといはれる。それは「通」を喜んだ當時の紳士風俗を代表する一つであらう。

女子は服装を氣にする丈に、この方面に於ける進歩が著しかつた。元祿期には婦人の帯幅が二つ折の五六寸、袖丈は八寸であつたが、文化文政期には、帯幅が七八寸、袖丈が一尺二寸に延びた。その表面、質素に見えるやうで、その實、贅澤をしてゐたことは、春水が「白地の湯衣の京染は銀四十目餘の本真岡で、木綿といへども、縮緬に優る。」と云つたのでわかる。半衿の趣味も若き女性の間まに餘程發達したと見え、同じく春水は「白天鷲へ銀絲で三津五郎縞の縫をした半衿」と記した。

總じて若き男女を通じて、その衣服の色合は鼠色、媚茶などを主とし、少しく派手な心持を加味した場合は藤紫色ぐらゐに留めた。一體に原色の花やかなのを避け、相當にくすんだ複雑な色彩を好んだ。が、若き女性が年増の服装を爲し、年増が娘らしい風をするやうな、幾分、變態的な現象を呈したのは、一概に粹いきを喜ぶ意味合ばかりではなかつたであらう。春水が十六七歳の娘の年増風を装うたのを記述してゐるのを見ると、「上着は御納戸中形の太織、下着は藤鼠の氷梅の中形縮緬へ廻りへ付けた縹々の胴ぬき紫中形の裏へ板々縮緬の付いた半衿をかけた縞絆、袖口は淺黄の山まゆ縮緬、帯は黒縞子へ緋鹿子の割を入れてある。」といふ風に描き出してゐる。

殊に藝妓の服装は、その筋の禁令に背くことを意としないで、贅澤を盡した。そのため、江戸市中の藝妓二十餘人が引致せられ、處罰を受けたことがある。その申渡書によると、羅紗、吳縞服連、天鷲絨の帯、更紗その他高價な衣服、帯などを用ゐたのである。また文政十年、町奉行筒井伊賀守の手で、奢侈の噂ある數十人の女子を捕へ、押込の罰を與へたことがあつたが、それはかの女らが、紫羅紗の帯、唐縞子の帯、本鼈甲の筭などを用ゐた爲めであつた。

八種々の贅澤

それから江戸人の持物も亦中々凝つたもので、織巧の妙を盡したものが少くなかつた。が、それも一見、簡單、質實であるかの如く、人の眼に映つたが、仔細に見ると、その込み入つた技巧や品質の優秀なことがわかる種類のものだつた。當時、富めるものは煙草入の細工、金具などに凝り、火鉢、屏風の類に金をかけた。中には、唐眞鍮の煙管で、中に金で三十六人ばかりの支那人が行列してゐる姿を象眼し、紫の煙を吹くと、煙の中に支那人が現はれるやうな仕掛をしたものを持つた。

下駄は男女共に十分に金をかけ、現代人が想像しかねるほどの結構を盡した。一足一兩の價ある桐の下駄や、印天皮の雪駄などは、男たちの間で賞用せられた。雪駄も特に意を用ゐたものは、表を籐組、廻りを赤銅で縁を取り、裏音金に眞鍮で象眼を入れた織巧なものがあつた。その象眼を牡丹とか龜とかにして、所有者がわかるやうにしてあつた。藝妓のうちには、駒下駄の上を鼈甲とし、周圍をすべて惣蒔繪にして臺のうちへ湯を入れ、冬季には自然、暖まる仕掛にしたのをゐるた洒落者もゐた。時には女下駄の臺に奇巧を凝らし、これへ引出を付けて、白縮緬の切を入れ、足が汚れたとき、すぐこれで拭ふ用意したのもあつた。それに白糸の間から、ちらと赤珊瑚の珠が見えるやう鼻緒が付けてあつたと傳へられる。

飲食も亦この時代には特別の進歩を示した。在來の料理は『豆腐百珍』や『甘蔗百珍』などを最上とし

て珍重したが、文政時代には、この方面の通客が可なりに出來た結果、八百善の『料理通』といふ本が出版され、通客を喜ばせた。それと共に、旨い物屋として在來あつた深川の竹市、升屋、大紋屋、二軒茶屋、向島の大黒屋、武藏屋などのほかに八百善、平清、田川屋、大七などが繁昌し、茶飯とかくやの香の物で一兩二分を取ると云つたやうな具合で、輕淡、清酒な料理が通客の味覺に満足を與へるやうになつた。

鮓の趣味が一般にひろがつたのは文化年間のことである。この機運につれて、深川六間堀の松の鮓が、特製美味の鮓を作ると、鮓の風を一變した。それから當時、名があつたのは堺町の金竹輪鮓、大橋安宅の松鮓、兩國の與兵衛鮓などであつた。

酒も質がよくなつたのは無論のことである。この頃、愛用せられたのは、和泉町四方の「瀧水」、鎌倉河岸の豊島屋の「劍菱」などで、共に醇酒として代表的なものと云はれた。それらの酒味は純粹で、鍋の中へ入れて沸かす時、火が偶々、その中へ這入ると、忽ち燃えた位である。當時の世態を直寫した小説中に何彼につけて酒を飲むことが出てゐるのを見ると、男女共に酒を飲むものが比較的多かつたかと思はれる。式亭三馬がこの方面のアラを滑稽本の上に指摘したのは、彼れの機敏による。

菓子も亦化政期に於て著しく發達した。在來は鈴木羊羹、鳥飼の饅餅などに満足したが、一度新風味を標榜した菓子が作り出されると、勢ひその方へ引付けられた。深川船橋屋のは特に通客の喜ぶところとなつたが、それは始終工夫を重ねて新菓を賣出したからである。

當時、食通を氣取るものは、一個金一步の餅、一個金三匁五分の鹿の子餅、一個金一匁五分の牡丹餅を快喫して、江戸ッ見たることを誇つたといはれる。それは彼等のすべてが法外の價値で初齋を求め、舌鼓打つて賞美した心意氣と相通するところがある。價高きは、その間ふところでなく、その品質の美を欲し、新鮮を愛したのであつた。と云ふよりも、それを通がつたのである。『江戸名物傳』を見ると、深川櫓下の「金麩羅」について、「金麩羅の名は海邊に響く、會席料理品最も鮮、揚出し或は五藻屑卷、初めて知る意氣深川にあることを。」と吟じ、同深川熊井町の「翁蕎麥」についての末句に「一碗喰ひ得て急に通となる」と云ふのを見ると、飲食の上でも亦通がり意氣がつたことがわかる。

衣服、持物、飲食については以上の如くであるが、住居も亦贅澤になつた。當時、寮と云つて別莊を作ることが流行し、向島、根岸など閑靜の地に別莊が續々出來た。時の執政、水野忠成を始め、中野石翁、伊勢屋嘉兵衛、長岡儀兵衛などの別莊は、皆意匠を凝らし、好みを恣にした。松屋佐吉の邸内には能舞臺を設け、觀世太夫らに亂舞させ、或は純金の鈴を作つて、三番叟を踊らせたといはれる。

九 享樂の世界

當時に於ける享樂機關は略ぼ整備してゐた。その享樂の中樞は云ふ迄もなく、花街にあつたが、それらの日に於ける狹斜情調はどうであつたらうか。文化文政期に至つてから、大體市中到る處、町藝者中心となつ

た爲めに、吉原よりも深川が繁昌し、狹斜情調の上からは、深川が最も喜ばれた。式亭三馬の日記『式亭雜記』によると（文化八年五月）いくらか吉原がさびれたことを述べ、「此節吉原は甚だ不景氣也……三馬想ふに、四五年前に比し、遊女の數も少く、名妓といふべきものは半ば減じたり。」と云つてゐる。それは主として深川が繁昌し、町藝者が勢を得たために他ならぬ。

爲永春水は好んで深川のロオカル・カラアを描き、辰巳藝妓を描いた。深川では、主として大新地と土橋仲町などに藝妓がをり、大湊樓、五明樓、百歩樓などの揚屋があつた。彼の女らが縮緬の前垂をして仲居女と共に、屋根船に乗つて、船宿まで客を迎へに行つたり、或は客を送つて、舟中睦じく小酌しながら水上をゆく姿は清艶であつたらう。彼の女らは、春夏の頃は兩國あたりへ屋根船で出て、觀櫻や納涼や花火に打興じた。それから客が藝妓を迎へて遊ぶ料理屋では、平清が第一流で、『江戸名物詩』には、「會席風流辰巳に誇る、座敷近く對す水の涯、尾花梅本山本の客、馴染連れ來つて此の地に奢る。」と吟じてゐる。山本にゐる老妓助八は當時の通人津國屋の龍池が最も最辰にした一人だつた。

深川は吉原と對比されて、度々、通客の話題に上つた。『狂訓彙軌本紀』の作者島田金谷は吉原憧憬者で、深川を遙かにその下位に置き、「十五歳で深川に遊び……吉原の遊びに轉じて、深川の夷狄なるを知り得たり。」と云つてゐるが、かうした優劣の問題については、夢中山人、寐言先生作『辰巳之園』（明和七年公刊）の自序中に、「此の土地（深川）に樂む遊民は北國（吉原）の面白きを知らず。美國の吉原にくらぶれば、九牛

の一毛とやいわむ。さり乍ら、餅好、酒の酔ひ事をそねみ、酒好は餅の風味を惡む。吉原の位あつて靜なる遊びを知らずして、此所の素人らしき娘風を悦び、又この土地のわつさりとしたる樂を吉原好は知らずと。深川好は北國をにくむ。吉原客は深川は下卑なりと笑ふ。いかで争ふ時は水掛論とやいわむ。」と公平にそれぞれの特徴を認めてゐる。

深川については、春水の小説のほかには式亭三馬の三部作『辰巳婦言』、『船頭深話』、『船頭部屋』があり、蓬萊山人歸橋の『通人枕言葉』、『美地の蠅殻』、『愚人贅澤借金』があり、山手馬鹿人(蜀山人)の『深川新話』があり、山東京傳の『仕掛文庫』などがある。元來、深川を辰巳といふのは、江戸の東南(巽)に當るからで、その藝妓を「巽の羽織」と呼んだのもそのためだ。深川の背景としての水邊風景は、客の興味を呼んだらしく、深川へ行く通客はすべて船、殊に快速な猪牙によつたので、「猪牙でゆくの深川通ひ」と唄はれた。寺門靜軒の『江戸繁昌記』には猪牙のことに及んで、「足無うして行くもの、輿こしにあらざれば舟なり。然れども館やど舫、屋船やねぶねは並に水遊の具、行くことは則ち行けども、飛ぶには非る也。韻頰うた(四手駕輿に對し)して齊しく飛ぶものは猪牙これ也。……猪牙とは何ぞ。蓋し形を以てこれに名づけて、而もその歩は則ち鬼兒おにこの波を走るに也似たり。兩國を右にして深川に絶り……」云々と述べてゐる。

その猪牙に乗つた遊客は深川の船宿——一種の待合——に船を着け、氣の利いた女將に出迎へられて、所謂巽の羽織を呼び、淺酌低唱した。船宿には、いつも屋根船、猪牙などを數艘置き、朝夕、客の送迎をしたといはれる。かくして深川では、船宿が可なり發達し、水邊情調を漂はせたのである。それらの光景を穿つた作品には松風亭如琴の『風俗通』(寛政十二年)及び山旭亭の『五臟眼』(寛政版)などがある。

深川の花街は大體において、町人の天地であつた。吉原は武士、町人など混合してゐたが、深川方面は武士が極少かつた。『不粹照明房情記』(寛政版)中に深川の妓が吉原で「こつちへ來た時、こあめ町のよし岡から來る店衆に貰つた唐さんを着てゐたら、木綿着物だとして、皆が笑はアな。」と述懐してゐるのに徴し、深川に於ける遊客が殊に通、滋味を重んじたことが推察される。

新興の勢ある深川に對して、吉原は稍振はなかつたが、矢張、花街の中心は茲にあるとせられた。寺門靜軒は『江戸繁昌記』中に「吉原」について語り、「吉原の日本に於けるや昇平樂國中の一大樂天、慾界仙都内の最上仙閣と謂ひつべし。」と禮讚し、「蓋し此の境の盛衰は以て江戸の盛衰を候ふべし。」とも云つた。當時、元祿期ほどの豪華は見られず、時雨庵主人の『風流仙婦傳』(安永九年刊行)にある通り、「客も昔は、人が千金を遣へば、萬金を遣うて張り合ふを全盛の大盡と申し侍るを、今は是をこけと名付け、金遣はぬ事を第一の通とし侍る故、三會目の床花の時より客の方から泣事を云うて、五兩やるべき所を三兩にねぎる。」と云ふ風に墮して了つた。

が、それは客のみでなく、遊女も亦昔にくらべると、氣品が落ちたのである。元祿期前後に見るやうな「張」と「意氣地」とが殆どなくなり、藝の素養も亦乏しくなつて、唯客を操ることのみ心を注ぐ妓女が多

くなつた。かうしてその實質は低下したが、吉原の外面に於ける賑かさは以前に増して、目を惹いた。三月の観櫻、七月の燈籠、八月の俄狂言などが催されて、多くの遊客を引寄せた。寺門靜軒は「三月、花を栽ゑ、七月燈を放ち、八月舞を陳ぬ。これを三大盛事とす」と云ひ、七月の燈籠のことに及んで「若しそれ暮靄柳を抹し、黄昏燈火を上すや、各樓の銀燭星の如く、鼓聲人を聳す。」と云つた。

聊かさびれたと云はれても、吉原の繁昌は流石に目ざましいものがあつた。が、山東京傳が紹介した松葉屋の瀬川のやうな遊女はもう容易に見られなくなりつつあつた。かの女は書を能くし、茶道に通じ、歌學の一斑をも心得て、而も愛敬深く、松葉屋の名物と云はれたのである。

その他、化政期に於ては、水陸交通の發達を始め都會に於ける寄席の勃興、女義太夫の流行、書畫會の殷盛、相撲の繁昌、山王祭、神田祭、深川の八幡祭の賑ひなどがあつた。また射倅心や投機心が旺んになるにつれて、米相場以外、富籤が著しく行はれたことなどもあるが、それらは特に詳しく述べる必要があるまい。

唯茲に一言して置きたいのは、町人階級の武士階級に對する反抗心である。曾ては町奴の形を通して、その一端を發露したが、化政期に於ては、その經濟力を以て、武士階級に打克たうとする傾向がほのめかされてゐた。町人階級は表立つて、その反抗の意志を示さなかつたけれども、物質的享樂において、いろいろの娛樂において、彼等は武士階級に爲し得ぬところの我儘をした。「自分らは階級的に劣等の地位に置かれたが、經濟的には確かに武士階級に打克つた。」といふ意識の上に、いくらかの自慰的光明を認めた。彼等の享

樂と奢侈の裏面には、左様した反抗意識が自覺的に或は無自覺的に動いてゐたことを見逃せない。

一〇 勞農階級の生活

如上、化政期の社會相は大體に於て華かで、のんびりしたところがあつたが、他面、暗い影が次第にさしかかつて來てゐた。當時に於けるブルジョアの發展と進歩とが、必然、武士階級の崩壞を促すことは免れ難い現象であり、その結果が、やがて江戸幕府の倒壞に終るべきは、これまた論を俟たぬ。心ある武士は、必ずこの點に想到してゐるにちがひなかつた。

それに西力東漸の勢に伴ふ外交問題が漸く國民全體の頭の上のしかかつて來て、江戸、京都の政治家の間に、開鎖の論がやかましくなりつつあつたことも亦時代に投ぜられた一つの暗影だつた。國を開いて、歐米と交易するか、國を鎖して、封建制を固執するか、歐米の科學的軍隊と科學的武器の前にあつては、この問題を決するのが容易でない丈、それ丈、大きい關心事であらねばならなかつた。

のみならず、江戸文化は化政期に於て、もう發達する丈、發達しつくしたので、これ以上、新しい展開を爲し得ぬ實情にあつた。固定した階級制度、固定した恒常的平和、固定した經濟的組織、それらと共に固定した文化があつた。かうした情勢の前に、人心は次第に頹廢し、強い反撥力がなくなつて、末梢的變化、末梢的刺戟により、一日を糊塗してゆくよりほかなき調子になつて了つた。従つて、ブルジョアの經濟的發達が、

武士階級の崩壊を促さずにも、文化的に内部からも崩壊しなくてはならなかつた。江戸文化の進歩が頂點に達して、略ぼ完成形態を具現したとき、もう江戸文化没落の潮が不知不識の間にひたひたと押し寄せてゐたのである。

かうした社會相の前に於て、依然、悲慘なのは、農民階級であつた。當時の文學が、ブルジョア文學として殆ど農民を閑却してゐたことは、正に農民の悲慘を暗示するものである。この時代に於ける農業は、大分進歩したが、米作が主位を占めた爲め、小經營のもとに置かれたので、目さましい發展をしなかつた。且つ土地財産の私有とその偏頗的傾向が現はれてゐたから、農民の大部分は、プロレタリア階級に屬した。所謂「水呑百姓」が少くなかつたのだ。

彼等は社會階級上、武士の次位に置かれたが、官憲から衣食住について、種々の不當な干渉を受け、衣服は木綿に限り、佩刀は許されず、乗物を用ゐることも出来ぬのであつた。魚肉を喫すること、煙草を呑むことも禁ぜられた時代さへあつたほどで、唯租稅徵收の目的物として生存するといふ有様だつた。けれども當時の大小名は、重農主義の實現に力めるものが少く、始終、苛稅を課したので、農民は不作とか饑饉とかの場合には非常に困つた。その結果が、いつも一揆として現はれたのである。文政六年に於ける和歌山一揆は、十數萬の農民が暴動化し、二百人ばかりの浪人がこれを指揮して、その鎮撫には、城中から三百餘人の交渉委員を出したといはれる。

その他、化政期に起つた一揆は、享和元年に於ける羽州山形領の一揆、寛政八年に於ける勢州津の一揆、文政五年に於ける丹後宮津の一揆、文政十三年に於ける丹波一揆などで、天保年間に及ぶと、それが到るところに頻發した。一つは江戸幕府を始め、諸藩の紀綱がゆるんだ爲めによるが、又一つは、農民の社會意識が漸次、目ざめて來たにもよる。

農民に比較すると、工業に従事するものは、いくらか樂であつた。太宰春臺が「百工は國の寶也、古より國家を經營する人は百工を招來するを務とす。」(『經濟錄』)と云つたやうな考へを一般識者が持つてゐた。それに當時の工業者は、ヨオロッパに於けるギルド式のもとに團結し、自由競争の度が左迄烈しいところ迄ゆかないので、生活上の不安が存外少かつた。その多くは手工業であつたところから、工人は熟練を積むべく専心して、物質生活の發達からくる諸般の要求に應ずべく、精巧を極めた物品を産出した。勿論、西力東漸に伴ひ、ヨオロッパに於ける工業の影響を少しは受けたが、未だ近代的に目ざめなかつた。

かくして當時の工人は、織物、陶磁器、銅器、漆器、製紙、木版業、建築などの上に江戸文化爛熟の特相を發揮し、工藝美の日本を形造つた。畢竟、彼等は農民よりも困窮の程度が少く、また諸藩の保護などを受けることが出來たによる。江戸の職人階級は所謂江戸ッ兒肌のもものが割合に多く、「宵越の錢を使はぬ」といふのが、彼等のプライドの一つであり、質を置いて、初經を膳に上すといふのが彼等の意氣であつた。この點に於て、彼等は當時の商人階級と自ら肌合を異にしたのである。

その他、當時の下級労働者として、日傭人及び人足の類ひがあり、仲間、小者(武家奉公)、雇人、奉公人(町家奉公)などがあつた。その一半は、プロレタリア階級に属するものといへる。彼等は主従、親方乾兒の關係によつて、規制せられてゐた。尙ほ「雲助」と呼ばれた交通労働者があつて、往々、旅客を威嚇し、或は不法の要求を爲したが、それらは官憲に於て、度々、制令を發し、禁壓に力めたのである。

如上、貧農階級の或部分を除くと、彼等民衆は皆太平を謳歌し、各自の分に安んじて、各個に相應する享樂を爲した。表面から見た化政時代ほど、民衆に取つてのんびりした時代はなかつたのである。それらを土臺とした純粹江戸文學が目ざましく勃興し、完成期に到達したのは當然の歸結だつた。

第三章 文化文政時代の精神生活 (上)

一 寛政の改革と思想界

思想は時代と共に推移し進行する。元祿期前後は儒學が中心で、鬱勃たる新興の勢を示したが、その思想的色彩に於ては、比較的單調であつて、武士道學の成立が儒學以外に異彩を放つた位のものであつた。のみならず、それ等の學問は概ね貴族、武士の手中にあつて、町人階級とは交渉が薄かつた。が、伊藤仁齋、荻生徂徠、山鹿素行、中江藤樹、熊澤蕃山、新井白石など特に傑出した人々が現はれて、目ざましい業績を示したので、思想界は、それが爲めに活氣付き、未曾有の精彩を放つたのである。

ところが、文化文政前後の思想界は、必ずしも儒學中心ではなかつた。化政期の前驅たる明和、安永、天明などの頃には、寧ろ儒學に對する反抗すら生じた。『甲子夜話』によると、儒者中村蘭林(深藏)が愚弄せられたことに及び、「中村深藏、寶曆の頃、奥儒者たりしとき、誰一人敬禮するものなく、當直に出れば、若き小納戸衆など、孔子の奥方は御容儀は美なりしや、醜なりしやなど問うて嘲弄しけるとぞ。」と述べてゐる。

それから同じ書に明和、安永の頃、相當の武士が、孔子のことさへ、はつきり知らなかつた様子を指摘し、

「明安の頃、節儉の政令厳刻なりしとき、その旨を希ひし作事奉行より、昌平の聖堂は第一無用の長物なれば取崩し然るべしと建言せしを、國用掌れる水野羽州聞届けて、既に高聽に達せむとて御用取次衆へ申しけるに、取次衆、聖堂と云ふもの何なるを知らず。奥右筆組頭大前孫兵衛に、聖堂に安置あるは神か佛かと尋ねしかば、大前、たしか本尊は孔子とかいふことにて候と答へければ、取次衆、その孔子といふは何なりやと、大前、論語とか申す書物に出候と承り候と答へける。」云々と述べてゐる。

幕府が家康以來、儒學を獎勵し來つたに關らず、奥儒者を弄び、孔子及び『論語』の何たるかを知らぬといふことは、明かに時代の推移を示してゐる。元祿期には、將軍綱吉が極度に孔子を尊崇し、これを聖堂に祭つて、その常費に宛つるため、祠田千石を寄付したのであるが、それから五十年後の時代に綱吉の精神を冒瀆するかの如き無學の武士が出來て、孔子をも輕侮しようとは、誰も豫期せぬところであつたらうと思ふ。蓋し以上の如き傾向を示したのは、人心が舊に飽いて、新に就かうとする風があるにより、また平和無事の日が久しく續くと、精神的に緊張を缺いて、輕浮、不眞面目になる傾きもあつたによらう。儒教が勃興してから五十年、その間、學說上、特に新奇、大膽な説を唱へたものが少く、それが次第に固定してくると、勢ひ倦怠を感じ易い。その上、儒者のいふところは、概ね固陋、空疎の弊があるとすると、儒教が振はなくなるのは當然であらねばならなかつた。

殊に平和、無異に馴れた人々は、何等か新奇の感じを求めてやまなかつたので、おのづから儒教から解放せられようとするに傾いたのである。かうした際、人心の輕浮に乗じて狂文、狂歌、狂詩などが現はれ、孔子を茶化し、『四書』を翻弄するやうな口吻さへ洩すに至つた。それは、ひとり、江戸民衆のみならず、武士のうちにも左様した考へを抱くものがあり、中には、儒學に通じたものが自ら儒學を愚にし、或は孔子を始め、老子、釋迦をも茶化すやうな書物を出した。作者未詳の『聖遊廓』、『列仙傳』唐來三和の『通人孔釋三教色』などが、それであつた。

孔子、老子、釋迦の三大人物を取扱つた『聖遊廓』は寶曆七年の出版で、この三聖が日本へ來て、遊女屋に入り、孔子は大道太夫、老子は大空太夫、釋迦は假世太夫を相手に遊ぶといふのである。『列仙傳』は、その續篇で、孔子の高弟子路が、その命を奉じて來朝し、花街を見物したことを描いてゐる。三和の『三教色』は、『聖遊廓』に模した作品で、頭から孔子を翻弄してかかり、「つらく、浮世を思ひ給ふに、今は昔と違つて物事滑稽たる世の中に、息勢はつて仁義禮智信のしかつべらしき道に縛られんよりは、時々、巧言令色をやつて見ん。」云々と茶化してゐる。この書は天明三年の出版だつた。

それらは、儒教に通じてゐる人々の手に成つてゐるところから推察すると、當時、行詰つた儒教に對して不満を抱いてゐることがわかると同時に、輕佻、不眞面目の人心に投じて、喝采を得ようとした心持の存することがわかる。以上によると、聖賢の説を新代に適するやう、新解釋を加へようとはしないで、唯一概に「古い」とか「時代遅れ」とかいふ風に解釋し、滑稽、洒落のうちに、新しがり、通がらうとした様子が明かに

浮び出てる。

かうして儒學は一時、不振に陥つたが、それに大きい不満を感じて振興に力めた先驅者の一人は松平定信（樂翁）である。彼れは年少時代から朱子學派の哲學に親み、殊に朱子の學說に傾倒して、彼れの目ざす「正心修身、治國安民」は、そこから十分に學び取ることが出来ると思つた。ところが、明和安永時代に於ける様子は、彼れの旨とするところと異つて、或は儒學を利用して、名聲、私利を得ようとし、或は先賢の說を嘲つて、自ら新奇の說を出さうとする傾向があつた。定信はこれに憚らなかつた。即ち「今の學者、程朱の藩籬をも窺はずして、妄りに程朱の道を誦り、博聞多識、徂徠、仁齋に絶えて及ばずして、早や此の二子をも譏る、輕薄の風察すべし。」と憤つたのである。

それ故、彼れが天明六年、將軍家齊の下に執政として起つと、田沼意次の執政時代に於ける弊風を一掃せんと心がけ、（一）文武出精、（二）苞苴禁絶、（三）儉約の三要綱を一般に嚴達すると同時に、學政を一新しようと計つた。それについて、彼れは朱子學を以て、思想界を統一し、他派の存在を許さぬやうにするならば輕佻、浮薄、徒らに新奇を喜ぶの風は跡を絶つであらうと考へた。

當時、朱子學派に屬する學者として、重きを爲したのは、大阪の懷徳書院を根據とする中井竹山兄弟を始め、讃岐の柴野栗山、伊豫の尾藤二洲、肥前の古賀精里らであつた。松平定信は先づ才氣非凡の栗山を高松から呼寄せて、昌平黌——幕府が建てた學校——の教官に任用し、續いて寛政元年、山崎闇齋の學派に屬す

る岡田寒泉をも教官とした。この二人と林錦峯（大學頭）とを學政顧問として、昌平黌の科目を改定し、日毎に講筵を開いて、民間のものにも自由聽講を許した。その聽講者中には、曲亭馬琴もゐるのである。

その後、錦峯が世を去り、寒泉が代官となつてからは、林述齋、尾藤二洲を以て、これに代へ、更に古賀精里を擢用して、愈々朱子學のみを普及するに力め、異學排斥——寛政二年、異學の禁を發す——について峻嚴な態度を執つた。即ち朱子學を奉じないものは、官仕することを許さぬといふのである。左様した拘束に對して、大きい不満を抱いたものが決して少くなく、朱子學派とそれに對抗する他派との論争が絶えなかつた。江戸では、龜田鵬齋、山本北山らが異學派として氣を吐き、この派に味方した市川鳴鶴、戸崎淡園、伊東藍田、冢田大峯、豊島豊洲らは、「五鬼」の名を以て呼ばれた。が、大體において、朱子學派が優勢で、儒學界の大半を支配したのである。

二 平民道德教の勃興

上述の如く、朱子學派は異學を壓倒して勝利を占めたが、その意義は消極的であつて積極的ではなく、それによつて得たところは、唯儒學の民衆化といふことに過ぎなかつた。彼等官學を代表するところの尾藤二洲、柴野栗山は古賀精里と共に、寛政の三博士といはれて世に時めいたが、學說上、何等の創見がなく、唯朱子の哲學を普及する役目に當つた丈であつた。

彼等の説くところは、朱子の學說以外へ一步も出なかつた。唯忠實に平易に朱子の言説を註解する丈で、これに向つて、何等の批判を加へない。それ故、細心精緻にこれを分析し解剖した上、長短、是非を明かにするところ迄ゆかなかつた。唯昌平齋を開放して、民衆にも、聖人の道を聞くことを得しめ、興學の機運を促進すると同時に、朱子哲學の普及に資した點に意義があつた。

それにしても、本來、學問は官府の力を以て拘束し、その研究の自由を奪ふべきではない。朱子學派以外の陸王學にしても、仁齋、徂徠らの古學にしても、それには些の矯激な分子を含んでをらぬ。その何れを學んでも、聖人の道に到ることが出来るに關らず、左様した大所、高所に起つことを忘れて、時弊に激するの餘り、學問の自由を拘束したのは、正しい方法でなかつた。

右の學制統一運動にくらべて、今少しく意義があつたのは、石田梅巖、手島堵庵らの心學に於ける運動である。定信の意圖は彼れが寛政五年七月、執政の地位を去つてから間もなく、ゆるみ始め、文久二年、幕府が寛政の例に倣うて、三博士を選任した時、任用されたのは全く朱子學に反對し、或はこの學派に屬せぬ鹽谷宕陰、安井息軒、芳野金陵らであつたのは餘りに皮肉である。ところが、心學は時代の趨勢に應じて、難解の講義をせず、孔孟の道を民衆化して、佛老及び神道をも加味し、茶香み話のその如く、平易に具體的に説いた爲め、深く一部の人心を動かすことが出来た。

蓋し文化文政前後は、最早、民衆の時代である。文藝も民衆本位となつた以上、學問も亦民衆中心のもの

とならねばならなかつた。けれども當時の學者は、この點に於て自覺するところが少く、いづれかといへば、學問を貴族、武士のためのものと考へた氣味があつた。尾藤二洲、柴野栗山の如きも、輕佻の風俗を嘆くについては、人後に落ちなかつたが、進んでこれを一般的に矯正するために、朱子哲學を具體的に説き、日常の實例にひき當てて、直ぐに何の素養もなき民衆の心耳に徹するやうに爲すべきことを力めなかつた。云ひ換へると、彼等は尙ほ書齋的臭味から脱却し切らないで、街頭に道を説く用意を缺いてゐた。これは、ひとり、二洲、栗山の短所、缺點ではなく、當時、自ら矜持する學者の通弊であつた。

石田梅巖は、朱子哲學に共鳴し、孔孟の道を深く尊信したが、彼れには學者的な氣臭がなく、學問の民衆化について深く考ふところがあつた。即ち何等學的素養なきものにも、直ぐに諒解出来るやう、人倫、道德の要點を説きあかす必要があると信じたのである。彼れは四十歳頃迄、商人として生活し、傍ら神道、儒教などに親んだ。その經歷が示す如く、彼れは始めから儒者を氣取らず、唯人倫道德の大本を自ら知り、合せて人にも傳へようとしたのである。即ちその出發點が、著しく民衆的であつた。

心學の名は、心を修めるといふところにもとづいてゐると思はれるが、その主眼とするところは、性善——心の無私、心の純一を悟得して、一切萬事の上これを具現するといふにあつた。即ち性善を自覺する點に於て、性善の意義を行實化する點に於て、禪家的修養の必要と工夫の道を指示した。心學の要領は、そこにあるが、これを起點として、人情、世事の上から具體的説法を試み、四書（大學、中庸、論語、孟子）を中心

に、佛教、儒教、神道、老子の教などを時宜に應じて參酌し、少しも澁滞しないのが、独自の行き方である。これを寛政時代に於ける朱子學派が自派以外を異端として排斥したのにくらべると、遙かに自由であり宏量でもある。

心學が最初、輕視せられてゐたに關らず、非常の勢で民間に普及し、後には士大夫の地位にゐる人々迄が、往々、これに心を寄せたのは、時代の新傾向と合致した爲めであつた。かくして、梅巖から堵庵へ、堵庵から中澤道二に傳へられて、江戸末期に至る迄、勢力を民間に及ぼしたのは偶然でない。

梅巖が始めてこの講演を京都の明倫舎に開いたのは、享保十四年、彼れの四十五歳の時であつた。その當時、彼れが聽衆に對して、如何なる感銘を與へたかは、彼れの門弟慈音尼の記すところによつて明白である。慈音尼は近江の出身で、十六歳の時、佛門に入り、後、梅巖に師事したのである。彼の女は、それについて左の如く述べた。

堺町六角通下る所に、石田勲平と申す儒者あり。世上稀人にて、無縁の講釋し、人を正道に導き給ふ人なりといふ。我これによつて、まゝり見れば、朝講は、論語等、夜講には、山姥の謠の講釋、至つて有難き意味合、中々窺ひがたき所あり。……折入つて行跡を窺ひ見れば、いかなる大聖、賢人も此上は、あるまいと存じ、此人にたより、教により、修行し見れども、我等不束にして中々これぞと落着し難し。

我思ふに、是程徳の備りたる仁、何國にあるべきや。此所にて取得すんば、一生自性を得る事、あるまじ

く思ひ……二疊半の座敷に取籠り、食を斷ち、はんぎりに水を含ませ、晝夜、水を浴び、工夫いたし、心を盡し候處、身も疲れ、茫然として居たる時、そよくと吹來る風に、思はず我身を驚す所にて、古今變滅にあづからず、全體この儘なる事を、ほうほう（鬚髯）と知る所あり。有難き事も、面白き事も、此上なき事決定せり。(下略)

一心の門を開けば、法界の草木國土、佛といふも面白く、柳はみどり、花は紅、おのれくが法を説く、實に面白き天の氣色かな。(下略) ——『道得問答』——

以上によると、梅巖が門下に對する態度、様子がわかる。その工夫三昧の上に禪家の修養法に類したところがあるのは、支那宋代の哲學と傾向を同じうしてゐるが、かうした境地に於ける體驗、味得を語るあたりに、心學の特色があつた。梅巖には、『都鄙問答』四卷、『齊家論』二卷、『商家童問答』一卷、『要訓』一卷があるが、その代表的なものは、『都鄙問答』で、全部、問答體に據り、「佛法を信仰するは、心を悟るためなり。佛法を以て得る心と、儒道を以て得たる心と、心に二品の替あらんや。何れの道にて心を得るとも、其心を以て仁政を行ひ、天下、國家を治め給ふに、何を以て害あらん。」といひ、「堯舜の道は、孝悌のみ……人は孝悌忠信此外、子細なきことを會得して、二十年來の疑を解く。」といつてゐるのを見ると、梅巖の主張するところが略ほわかる。

三 江戸に於ける心學

梅巖の講演は約十五年間續けられた。その間に得た弟子の中で、能く彼れの旨を得たのは手島堵庵及び慈音尼である。堵庵は大體に於て、梅巖の説を祖述し、神儒佛などによつて、心性の修養を説いたが、何れかと云ふと、日本人の立場から神道に重きを置き、次ぎに儒教、この次ぎに佛教を置く傾向が見えてゐる。『日本倫理思想の系統』(補永茂助氏著)中に堵庵を特に三教(神儒佛)一致論者としてあるのは心得難い。廣い意味からすれば、心學一派は皆それである。

堵庵の講説は、梅巖にくらべると、一層具體的になり、且つ興味をも増してゐる。それは梅巖がまだ加味しなかつた小説的風致を巧みに寓した爲めに、こちたき理窟に墮せず、直ぐ讀者、聽者の感情に訴へることが出來た。茲に一つの進歩がある。殊に彼れは、經濟と道德との調和に留意し、儉約主義を鼓吹するについても、儒者の抽象的、月竝的な弊害に囚はれなかつた一特色を示した。彼れが周防由房と共に著はした『身體柱立』二卷のうち、上卷は由房の執筆にかかるが、恐らく、共述の際、堵庵も内容について協定したと思はれると同時に、そこに述べられた儉約説は日常經濟の微細な點に迄注意して、計數的に正確にちかひものである。それに於て先づ勤勞を勧め、貯蓄の祕訣を示し、子供養育の費用、人間一生に於けるうち、特に四十年間に費す化粧料、酒煙草料を見積つて、人々を戒諭してゐる具合は、勤儉の具體的表示で、腐儒の經濟談と全く異つてゐる。

彼れは梅巖の後を受けて、心學の土臺を固める上に最も功勞が多かつた。その講演の仕方にも亦彼れに至つて、一新機軸を出し、彼れの門下は皆彼れの爲すところを學んだ。彼れの著書數種あるうち、その理論的方面を見るには、『爲學玉箒』があり、具體的(説話的)方面を見るには、『有べかかり』がある。虛白齋は彼れの別號だと云はれるが明瞭でない。

梅巖及び堵庵は京都を中心として心學の普及を計つたが、これを江戸に弘めたのは、前に慈音尼があり、後に堵庵の高弟、中澤道二がある。道二は久しく堵庵のもとにゐて、講説に力め、その爽かな辯舌は深く聽者を魅した。依て師命により、安永八年、五十五歳の時、江戸に上り、參前舎を開いて、二十餘年間、心學を講じ、その洒脫、快活の辯は江戸士民の共鳴を得た。茲に至つて、心學は江戸に深き根を据ゑ、道二の門下から植松自謙、出雲屋和助などが出た。彼の山東京傳の如きは、心學に興味を感じた一人である。

如上、心學の成立發達上、その根幹を作つたのは、梅巖、堵庵、道二の三人で、梅巖は、祖師として最も重く見られた。堵庵の門下としては、道二が第一人者であるが、他に脇坂義堂、布施松翁、柴田鳩翁などがある。『心學道の話』を公にした奥田頼杖も、道二の系統に屬する一人で、鳩翁と頼杖とは、共に講述の妙を以て知られた。『鳩翁道話』にしても、『心學道の話』にしても、小話の連續で、先づ人の耳に入り易い種々の逸話、挿話を提出し、情景を再現するやうに説いた後、心學的解釋を簡潔に下すといふ行き方である。殊に道歌若

くは普通の短歌、俳句などを話の中に入れて、相手の感動を深めるところは、無類の技と云つてよく、俗談平話を詩化することに役立つた。鳩翁は中年、盲目となつたが、彼れの心眼は愈々冴え、その講説は一層充實したのである。

以上を總観すると、心學の特徴は(第一)學者臭味を脱して、民衆的に儒學を説いて町人道を確立した事、(第二)經濟と道德との調和を計つた事、(第三)その講述を裏付けるに自家の體驗を以てした事、(第四)儒學殊に朱子學を中心として佛教、神道、老莊哲學などの普及に間接的な働きをした事(第五)不知不識、日本的精神を表出した事などにある。これを學説として見れば、そこに創見がなく、組織がなく、新味もないけれども、以上五つの特色が、十分、心學の價値を證明してゐる。

私は曾て拙著『日本思想十六講』のうちにおいて、「心學は町人道を説く通俗道話だ。」と云つたことがあつた。かく町人道に限定するのは、少しく妥當を缺く嫌ひがあるけれども、彼等は概ね實業によつて生活し、普通儒者の如く、大名から受取る俸給によつて生活しなかつた故に、勢ひ町人を主なる聽講者と爲したのは當然であつた。即ち正しい町人道を説くために、朱子哲學に立脚し、『四書』及びその他の經書を講じたのである。

勿論、後には、貴族、武士の一部も亦、これに共鳴するに至つたが、本來の趣旨は町人道の確立にあつた。武士道については、既に山鹿素行その他によつて、立派な著書が出来たけれども、町人道については、その確

立に力めたものが殆どない。而も化政前後は町人の世の中と云つてよい時代であるから、勢ひ町人道を説教すべき必要があつた。石門心學の創唱者石田梅巖は、茲に考ふところがあつたものと思はれる。

それ故、彼等は素行の『武教小學』が武士の日常を規定したと同じ意味で、町人の日常を規定すべき修身訓、經濟訓、立身訓の類を各自、一つ二つは必ず書き、正直、勤勉、儉約、柔和、從順、報德、感恩、謙讓、忠孝の諸徳を鼓吹してゐる。勿論、心學出現前にも、町人道を説いた書がないとは云へぬが、彼等の如く熱心に、彼等の如く懇切に、これを具體化して、いくらか組織的に説いたものは先づないと云つて宜かつた。

心學一派が經濟と道德との調和を力説したのも、一面、町人道のためであつた。當時の町人は經濟的知識において、武士に優つたが、唯彼等は教養に乏しいので、或は享樂のため、或は奢侈のため、或は致富のため、人倫、道德を輕視し易く、經濟の倫理化が如何に必要であるかを知らなかつた。心學一派は深くこの缺陷を痛嘆し、事毎に、道德と經濟との調和が必然的になされねばならぬ所以を教へた。茲に心學に於ける一つの新意義があつたと思ふ。

それに心學は本來、朱子哲學の祖述ともいふべきに關らず、一面において日本的な心持が不知不識表現せられてゐる。『鳩翁道話』の如きは、殊にこの傾向が鮮明で、日本人の特有とも云ふべき人情中心主義を例話のうちに發露した。勘當されんとした若き無頼漢が母の至情に動かされて懺悔した話、他人の邪魔して非人情の下に利を得た男が健康を害ねた話など、いづれも日本の精神によるところが多い。茲にも一つの新

意義を含んでゐると思ふ。

四 日本學の新興

茲に當時の新思想として、最も注目すべきは、國學者によつて高唱せられた日本中心主義の勃興である。日本文化史を大觀すると、海外文化崇拜時代が相當永く續いた後には、日本文化高調時代が必ず現はれてゐる。平安時代の前半は支那文化崇拜時代であつたが、遣唐使中止前後から日本中心主義が起つて、後半の時代を支配し、鎌倉時代に入ると、強い日本的自覺のもとに、その文化は概ね日本の色彩を深めた。

室町時代も大體に於て、日本文化の色合が著しかつたが、一時、支那文化を崇拜した時期もあつた。江戸時代に入ると、幕府の儒教獎勵により、前半期は支那學崇拜の傾向が強く、學問といへば、支那學に限られたかの如く思惟せられたが、中頃から學者のうちに、支那崇拜の弊に目ざめて日本的自覺を高唱し、純日本文化創造主義を鼓吹するに至つた。即ち賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の新思想運動がそれであつて、農政學の第一人者、佐藤信淵も篤胤の影響を深く受け、日本中心主義に立脚したのである。

それらの新思想運動は素より俄然として現はれたのではない。當時の人々は、これを國學の名を以て呼び、多くの學徒が群り立つて、國學に隨喜するに至つたが、その最初の種子は、徳川家康時代に蒔かれたと云つて宜い。家康は文教主義の政治を行ふ爲めに、儒學を獎勵したが、それに次いで國學を尊重した。家康が

重用した藤原惺窩、林羅山の二人は朱子學派ではあつたが、一面、日本神道を研究し、一家見を抱いた。惺窩の『千代モトクサ』中には、神道を尙び、そこに正直、慈悲の二大原理の存することを肯定してゐる。更に羅山には『本朝神社考』、『神道秘訣』、『神道傳授抄』などの専門的著述があつて、日本の神々を尊崇し、理觀の上では、神道と儒道とが一に歸する旨を説いてゐる。

儒學を日本化するについて神道と調和せしめようとした思想は、江戸初期以來、久しく當時の儒學者を支配し、徳川光圀、雨森芳洲、山鹿素行、中江藤樹、熊澤蕃山、貝原益軒、三輪執齋、淺見綱齋など、何れもこの點に思ひを潜め、貢獻するところがあつた。その他、神道家として神道の新組織に力めた度會延佳、吉川惟足を始め、以上二人の教へを受けて垂加神道を創唱した山崎闇齋などは日本精神を高調したが、概ね尙ほ儒教的色彩を帯びた點があつた。が、闇齋及びその高弟、淺見綱齋、竹内式部、三宅觀瀾、栗山潜峰、若林強齋などは、一面において、祖國主義の上に立脚し、支那崇拜を非としたのである。

以上の如き思想の存在と併行して、國學勃興の一機縁を作つたのは、日本古典の研究に努力した僧契沖及び下河邊長流などで、その脈を惹いた人々が、日本精神の喚起に少なからぬ寄與をした。時代は元祿に遡ることとなるが、それらの日に、早くも日本的自覺の上に立脚した先驅者があつた。それは徳川光圀で、彼れは國史の不備を補ふために『大日本史』の編纂を思ひ起ち、編輯所彰考館を江戸小石川に設けたが、更に古代文學の寶典、『萬葉集』註釋の必要を痛感し、これを大阪にゐる長流、契沖の二人に委嘱した。

當時、國文學は一般に閑却せられ、僅かに貴族、學徒の間に少數の理解者、鑑賞者があつた位に留つてゐた。『萬葉集』などは、殆どこれを解するものがなく、一種の謎語視せられたのである。光圀は深くこれを遺憾とし、禮を厚うして、長流、契沖に註釋事業を依頼した。最初、この難事に當つたのは長流であるが、長流の歿後は、契沖がその完成に銳意し、最善を盡して、『萬葉集代匠記』二十卷及び總釋二卷を纏め上げた。その特色は飽迄原意を重んじ、難解の語を懇切に註釋して、久しく埋もれてゐた古代文學の寶玉を新しい光の下に持ち來つた點にある。

かうした意義ある事業と共に、忘れることが出來ぬのは、何人にも先立つて、荒れはてた國文學の領土を耕した北村季吟の存在である。彼れは松永貞徳の門人で、久しく民間にゐる國文學研究に没頭し、『源氏物語湖月抄』、『枕草紙春曙抄』、『萬葉集拾穂抄』等を著はした。後、元祿二年、六十六歳の時、江戸に招かれて、幕府の歌學所に出仕し、法印となり、國學博士の稱を得た。季吟の國文學に於ける貢獻は、長流、契沖らの事業と相列んで記憶せられるべきである。

以上は京阪出身の學者に就て述べたのであるが、江戸方面では、國文學の自由討究を始めた戸田茂睡が現はれた。彼れは契沖、長流、季吟らと略ほ同時代の人で、寛文五年、三十七歳の時、短歌革新の宣言書を公にし、歌詞自由を標榜した。次いで元祿十一年、『梨本集』五卷を現はし、更に宣言書の意味を布衍し、堂々たる論陣を張つたのである。その『百人一首雜談』の如きも、新しい態度のもとに一首々々を解説し、正に一頭

地を抜いてゐた。

かうして國文學研究の端緒が徐ろに開かれたのであるが、それらの日、時代の新潮の赴くところを透察して、契沖により高調せられた『萬葉』の趣致に深く傾倒し、新たに國學を興すべきことを唱へたのは荷田春滿（羽倉齋宮）である。彼れは山城稻荷神社の祠官だつたが、當時の學者が概ね儒學に傾倒して無闇に支那文化を崇拜し、常に日本文化を輕視するの弊あるを慨いてゐた。その心持は、「ふみわけよ、倭にはあらぬ漢鳥の跡を見るのみ人の道かは」の歌に現はれてゐる。

春滿は契沖、長流、季吟、茂睡らの事業を尊重したが、今一步進んで、古代日本文化の真相を闡明し、日本國體を明かにすべき必要を感じた。即ちこれを學的に研究するために日本學を創建すべきであるとし、それを國學又は國家の學と呼んだ。彼れが京都に國學校を建てようとしたのは、その爲めであつた。その設立趣意書に於て、彼れは「日夜寢食を忘れて、異端の徒（支那崇拜者）を排撃し、古道、古學を復興しなければ斷じてやまぬ。」といふ精神を表明した。

彼れの學者としての業績は、左程目に立つほどではなかつたが、その氣概において、意氣において、後進を勵ます上に強い力があつた。彼れの嗣子、在滿及びその高弟、賀茂真淵（縣居翁）は、彼れの正しい指導によつて、國學新興の先鞭をつけた。在滿は『新古今集』を推奨した點に於て、國學者の反抗、辯難を招いたが、大體、その本意は日本學の建設にあつて、『萬葉』を尙び、古代文學を尊重したのである。

五 加茂真淵の日本精神高調

真淵は遠江の出身で、その師春滿に就て四年間學んだが、師の歿後、江戸へ出て、國文學者として起つた。それは元文三年のことで、彼れが四十二歳の時である。その頃、時代は漸く思想的に目ざめつつあつた。時は移り、勢は動く。真淵が江戸に出た際、もう極端な支那崇拜を以て知られた菰生徂徠（物茂卿）は數年前に歿してゐた。徂徠は學者中の豪傑であつたが、孔子の贊を書いた時、自ら「日本國夷人」と稱したほどで、支那崇拜が度を過ぎてゐた人だつた。この人の歿したのと前後して、本居宣長が生れたのは享保十四年で、真淵が江戸に入るに先立つこと九年ばかりである。

この時に當つて、儒學は元祿期に於けるが如き勢力なく、民衆の間には、寧ろ新興した心學に共鳴するものが多くなりつつあつた。時代は儒學の行詰りを後に見て、前途に新しい思想を求めようとしてゐた。この要求に應ずべきは何であつたか。外に求める心を内に向けて、支那崇拜を超越し、克服すると同時に日本それ自身の姿を新たに見出さうとする國學こそ時代の要求に適合したのである。

真淵はかうした時代に直面して、彼れの新しい第一歩を踏み出した。真淵が江戸で爲した仕事には兩方面があつた。その一つは、古代國文學の研究であり、今一つは儒佛二教を排撃して、日本精神を高唱することである。彼れの主要な貢獻は前者にあつたが、その思想界に新聲を齎して、日本學の興起を促す主因を作つたのは後者にあつた。

蓋し真淵が古代日本文學に主力を注いだ所以は、古代日本文化を闡明するためで、『祝詞考』、『歌意考』、『文意考』、『萬葉考』などの序を讀むと、古代人の眞摯、誠實を尙び、それらの人々によつて成つた文學がまた快活、朴實であり、純粹な神の道が古代生活の上に具體化せられてゐたことを讚美してゐる。彼れはかく深い憧憬の熱情を古代に寄せ、古代を一個のユウトピア視した。それと共に、支那崇拜によつて誤られ、不純化した當時の思想的傾向を非とするに至るのは當然の歸結であつた。

それ故、真淵は彼れの所信に立脚して、先づ當時尙ほ勢力が相應にあつた儒學の上に一撃を與へた。それは太宰春臺の『辯道書』を駁するために書いた『國意考』といふ小冊子においてしたのであるが、思想上、劃時代的のものだと云はれる。彼れが儒學に懺らぬ所以は、(一)支那には不善者多きため、それを教訓すべく儒教が出来た事、(二)儒教が大義名分を重んずるに關らず、支那では弑虐、篡奪が絶えぬ事、(三)儒教が日本に渡來してから日本人の眞摯、朴實の風を破り、小悞巧、小理窟の輩を多くした事、(四)儒教が聖人の道を説くに當つて偽り多き事などである。

蓋しその意は、儒教は美しい空文虚辭に満ちてゐて文飾に過ぎる爲めに、支那人はこれを實行せず、その結果、大義名分に背くやうな事が常に起り、堯舜のこととても虚偽の説によつて、これを美化したに過ぎぬ以上、儒教の權威は何處にあるか。その上、儒教には理窟が多いために、不言實行を主とした日本の美風を

害したではないかと云ふにあつた。眞淵はかく主張し、論難したのである。

次ぎに眞淵は太宰春臺が「日本に道なし」とした獨斷に答へるため、日本におのづから古道の存したことを説き、「わが國の古の道は天地のまに／＼丸く平かにして人の心、詞に言ひ盡し難ければ、後の人知り得難し。されば古の道絶えたるにやといふべけれど、天地の絶えぬ限りは、絶ゆることなし。」と云つた。では、その道とはどんなものかといふ事について、それは老子の無爲自然の大道の如くであると解釋し、「四時のわかちある如く、いつくしみも、いかりも理りもさとりも自らあること、四時のある限り絶えじ。」と述べた。既に自然に道があつて、人々は支那に於けるやうに教へられずとも、自ら道を實行する。従つて古來、國が能く治り、支那の如く戦亂が續かぬ。これを支那の人爲的な教へにくらべると格別の差がある。即ち日本には立派に道があるのだといふのが眞淵の見解であつた。眞淵の云ふところは、少しく不明瞭であるが、古來、おのづから日本に大道があつて、正直な日本人はそれを理論的に教へられずとも、不言實行してゐるとしたのは當時にあつて卓見であつた。それに「精神的に自然に素直に誠ある古代に還れ」と叫んだことも時宜に適してゐた。

が、眞淵の長所は思想家として論壇に戦ふといふ側にはなく、それよりも古代文學、殊に『萬葉集』の味を闡明し、自然の眞情を土臺とした萬葉調を鼓吹する上にあつた。勿論、それが古代日本精神を高調するに於いての有力な契機となつたのは云ふ迄もなきことだつた。

六 本居宣長の日本中心主義

眞淵の精神を繼承して、眞淵よりも一層力強く、また一層理論的に日本精神文化を明かにし、學界に一革新を齎したのは、本居宣長（鈴屋翁）である。彼れは伊勢の出身で、その三十四歳の時、眞淵の門に入つたのであるが、もうその時分、略ぼ古學の精神を會得し、歌學上にも、一家の見識を立ててゐた。

彼れは人並すぐれた健康を有し、無限の精力を持つてゐたと同時に、理性、感情の上にも亦非凡の發達を爲した人であつた。彼れは醫業に勵む傍ら、學者として空前の大著『古事記傳』を完成し、また思想家として、『直毘靈』、『玉勝間』、『葛花』などを書いて、日本精神を高調した。かくて七十二歳で卒去する迄、些の懈怠を見せなかつたのである。

思想家としての宣長を解釋して、直ぐに自然主義者とする人がある。例へば、長谷川如是閑氏の如きが、それだ。成程、彼れの思想を自然主義の四字に要約することは、甚だ簡單、明瞭でよい。が、私はこれに反對したい。勿論、宣長のみならず、眞淵にも自然主義らしい傾向、要素はあるけれども、それは少くとも宣長の全體ではない。卑見によると、宣長は寧ろ古代理想主義者の一人だつたと考へる。

一體、宣長の思想を評論するには、先づ彼れの眞意が何處にあつたか、思想家として彼れの論證せんとする畢竟目的は何であつたかを點檢するのが至當だ。彼れは太宰春臺らが「日本に道なし」と放言し、「日本

の神道とは支那の『書經』中にある神道だ。」と妄斷した如き弊風を一掃せんとするために、また荻生徂徠一派が支那に向つて東夷を以てをり、日本の地名、人名を支那化——服部南郭は服南郭、平野金華は平金華、木下蘭阜は木蘭阜、山縣周南は縣周南など、江戸を武昌、武陵、京都を洛陽、廣島を廣陵、長崎を瓊浦など云つた——し、尙ほ他の萬事をも、支那化せんとする不見識を矯正せんとするが爲めに起つたのである。

更に宣長は支那の見方を日本の國體、日本の道徳、日本の文化に加へんとする誤りを改めしめんがために起つたのである。彼れは日本の國體が支那と異なる所以、日本の道徳が支那と根本において相違せる所以、日本の文化が支那のそれと全く基調を異にする所以を明かにするため、論壇に獅子吼したのである。

以上の目的を達するのが宣長の一向専念したところで、その一方便として、自然主義的な物の云ひ方をしたが、『エミール』の著者ルソオの如く、自然主義を徹底的に主張したのではない。日本が古來、自然の人情を重んずるといふこと、そこから「道」がおのづから生じたことを明かにするため、自然主義的な物の云ひ方を或部分においてしたので、宣長は本來、古代理想主義者であつたのだ。

長谷川如是閑氏は、宣長を以て直ぐにルソオと同視し、「わが本居宣長は恰もその時期に於て、歴史の定例に従つて我國に現はれたのであつた。それは偶然にも、同じ意味の自然主義者たりしフランス革命の先驅者ルソオと時期を同じうしたのであつた。」と述べてゐるが、宣長もルソオと同視せられては却て迷惑であらう。

ルソオの自然主義は人爲を排し、繁文縟禮を去つて、フランスを原始的な野蠻状態に復歸せしめんとするのであつて、宣長が日本を理想的古代の文化状態の上に目ざめしめんとするのは、大分ちがふ。それにルソオは『民約論』の著者として、フランスを共和政へ導くべく、大革命を期待したのであるが、宣長は大義名分主義のもとに、王政復古を期待したのであつて、共和政の如きは、宣長の夢想だもしない點であつた。

以上は、そのテエゼに於ても、イデオロギイにおいても、ルソオと宣長が大分異つてゐることを明かにしたのである。それは、ルソオを是非せんがためではなく、宣長の眞意の存するところを明かにしようとした迄だ。即ち自然主義者としての宣長を考察するに當つては、ルソオとおのづから異なることを明かにせぬと、宣長の根本思想を正解することが出来ぬ結果となる。

如是閑氏の如きも、宣長を正解しない一人で、宣長が古代理想主義者だつたことを云はないで、頭から彼れを徹底自然主義者の如く解し、自家に都合のよい論理を編み出して、宣長の畢竟目的に一言も觸れぬのは眞に宣長に親切な態度とは云へない。兎角、新しがらうとすると、かうした結果を來たし易い。

宣長の自然主義は、ルソオのそれではなく、彼れ獨自のものであつて、それは又彼れの人情主義に結び付いてゐる。彼れの人情主義に味到しなくては、彼れの自然主義は正解せられぬ。日本は古來、非自然的、非人情的でなく、自然を尙ぶと同時に、人情を尙んだといふのが、彼れの見解で、「物のあはれ」の説も亦この人情主義にもとづいてゐる。この點またルソオと異なる所があつた。

それに宣長の自然主義は方法論上の自然主義で、目的論上の自然主義ではなかつた。目的論上においては、古代理想主義に立脚したのであつて、その傾向上、いくらか老子の無爲、自然を理想としたのと似てはるたが、彼れは老子的でないと言明した。かくして彼れの自然主義は、古代理想主義を高調するための方法論であつて、ルソオの自然主義を目的論上においたのと異つてゐる。日本独自の國家形態を保全しようとした宣長が、以上の如き態度に出たのは當然であると思ふ。

蓋し彼れの『ナホビノミタマ』(直毘靈)は主として當時の儒學者を相手として立言したのであつて、太宰春臺のみならず、多くの儒者が「日本には古來、道がなかつたのだ。」と妄信したのを特に説破しようとする上に重心を置いてゐた。この點について、曾て彼れの師、眞淵も説破に力めたが、尙ほ徹底せぬところがあるので、宣長はこれを補ふべく、彼れの理論を構成した。即ち彼れは儒學者が支那の聖人を云々し、先王の道を云々し、道といへば、支那特有のものだとする事の誤りであることを明かにするため、「日本の道は支那の道の如く巧みな言論によつて構成せられたのではなく、古來、無言無爲のうちに、道が存在した。」といふことを論證すべく、方法論上から自然主義的な物の云ひ方をしたのである。言ひ換へると、古代理想主義へ到達すべき過程として、自然主義的方法論を執つたのだ。この點を諒としなければ、宣長の眞意はわからぬ。

七 宣長が組織した日本哲學

宣長の『ナホビノミタマ』は三章から成つてゐる。第一章に於ては神道と儒教との差別を説き、第二章に於ては、神道の盛衰を論じ、第三章に於ては、神道の源流を明かにしてゐる。その第一章の始めに彼れは眞淵と同じく、古代理想主義者であり、日本特有の國家形態を尊重し、且つこれを保全することの當然な所以をかう述べてゐる。

皇大御國は、かけまくも畏き神御祖、天照大御神の御生まれませる大御國にして、大御神、大御手に天つ璽を捧げ持して「萬千秋の長秋に吾が御子の知らさむ國なり」と言因さし賜へりしまに／＼、天雲の向伏す限り、谷蟻のさ渡る極み、皇御孫命の大御食國と定まりて、天の下には、荒ぶる神も無く、まつろはぬ人も無く、千萬御世の御末の御代まで、天皇命はしも、大御神の御子とましく／＼、天つ神の御心を大御心として、神代も今も隔てなく、神ながら安國と平らけく知ろしめしける大御國になもありければ、古の大御世には「道」といふ言擧げも更に無かりき。そはたゞ物に行く道こそ有りけれ、物の理り有るべきすべ、萬の教へ事をしも何の道、くれの道といふことは異國の論なり。

茲に宣長が日本特有の國體を尊重すると共に、その古代文化に憧憬の熱情を寄せた趣がはつきり現はれてゐる。彼れの眼に映つた古代日本は「皇國の古は、さるこちたき教へ(儒學の事)も何もなかりしかど、

かの異國の名に習ひて言はゞ、これぞ上も無き優れたる大道にして、實は、道有るが故に「道」てふこと無く、「道」てふ言は無けれども道は有りしなり。」といふ姿であつて、それは彼れの理想した古代であり、その理想した古代の心、古代の美風を當時に實現しようといふのが宣長の希望で、この點において、彼れは眞淵と同じく、「もし上に古を好みて世の直からんことを思はず人出で來ん時は、十年二十年を過ぎずして、世は皆直かるべし。」と云ふ期待を抱いた。即ち宣長は眞淵とひとしく、古代理想主義者であつた。

が、その目的（古代理想主義）へ達するため、方法として自然主義的な物の云ひ方をしたのである。世に仁義が行はれぬ時、仁義の教が高調せられ、人が道を行はぬ時、道の理論が旺んに説かれる。それが支那の狀態だ。その古代の聖人なるものも、動亂が絶えぬ支那では、弑虐、篡奪の事實を蔽ふために天命を云々するものであつて、左様した聖人が作爲した法律、規則が所謂道である。以上が支那の真相で、それは唯抽象的觀念的であつて無生命に近く、儒學者の云ふ加き有難味は少しもない。萬事、虚偽と作爲で固め、巧言令色を主としてゐるのだ。宣長はかく古代支那を見たが、日本は始めから行實を主として、言擧げせず、おのづから、道（仁義、禮儀、孝悌、忠信）が行はれ、而も人々がそれが道だと意識せぬほどであるがために、道についての理論はなかつた。自然的、人情的に道が不知不識發達した。そこに支那式の虚偽もなく、作爲もない。即ち宣長は日本に「實は、道有るが故に「道」てふ言無く、「道」てふ言はなけれども、道は有りしなり。」と主張したのである。

そんなら自然に發達した日本の道とは何か。宣長は、これを原始的意義を失はぬ純正神道だとする。彼れは、それについて、「此の道は、いかなる道ぞと尋ぬるに、天地のおのづからなる道にもあらず、（老莊とは異なる意味）人の作れる道にもあらず、この道はしも、かしこきや、高御産巢日（タカミムスヒ）の神の御聖（ミタマ）によりて、神祖、伊邪那岐（イザナギ）の大神、伊邪那美（イザナミ）の大神の始め給ひて、天照大神の受け給ひ、保ち給ひ、傳へ給ふ道なり。故、こゝを以て神の道とは申すぞかし。」と述べた。それと共に、宣長は「神の道」を知るには、『古事記』、『日本書紀』、『萬葉集』などによらねばならぬことを注意したのである。尙ほそれには「汚き漢籍心を被ひ清めて、清々しき御國心もて、古典どもをよく學びてよ。」と教示することを忘れなかつた。

要するに、支那の所謂「道」は空虚なイデオロギイに過ぎず、そのテエゼも亦虚偽なもので、少しも行實に裏付けられず、具象化せられぬ無生命體である。ところが、日本の「道」は理論的に説かれてはるぬが、充實したイデオロギイの上につて、行實に裏付けられ、おのづから具象化した生命體である。茲に大なる相違がある。この生命體の前に起つて見ると、支那流に是非を云々し、人慾制壓方針を高調するのは不自然極まることで、是非、善惡の差別を超越するのが、眞の道であり、人間の本性を直覺し、人情の自然に出るのが眞の道だ。宣長はかく觀じ、かく信じたのである。勿論、宣長のいふところは、往々非科學的で、いくらか矛盾したり、或は意義の曖昧なところもある。精神科學なるものが、未だ存在しなかつた當時にあつては止むを得なかつた。

例へば、善悪を超克すべきことを云ひながら、善悪の差別を説くが如きは、一つの矛盾であつた。また支那文化の長所、美點を丸で指摘しないで、頭から辯難を加へ、少しく極端に走つたのは、妥當性を缺いてゐた。が、祖國愛に満ちて、創造日本の實現を將來に期待した彼れは、思はず、過激の言葉を用ゐたのである。

既に儒學者の謬見、妄斷を容赦なく破折した以上、古代理想主義者たる彼れは、「全日本人は純一な古代精神に歸れ。」といふことを叫ばざるを得なかつた。古代日本の精神は、あらゆる點に於て、生活の軌範、信條とすべきであると彼れは思惟した。そこに支那風を微塵も混入せぬ純粹日本があり、日本独自の眞善美が輝いてゐるとした。

彼れは祖國日本が文化的優越を保持する所以を『玉くしけ』その他に於て説き、(第一)上下悉く天皇の御心を仰ぎ奉つて、その大命を畏む事、(第二)祖先神を崇敬し、國民一同、その祖先を尊む事、(第三)心の垢を清めて爽朗の精神を維持する事、(第四)分相應に各自、自力を發揮して平和生活を愛好する事、(第五)人情の自然に従つて、同情同感の念深き事などを數へあげた。

祖國愛の立場から日本文化を考察するものは、大抵以上の如き特色を擧げるのを常とするが、ひとり、宣長が、日本人の特色として人情主義を擧げたのは特異とすべきである。勿論、これも眞淵が「歌の心」を推奨したにもとづくかも知れぬけれども、眞淵にくらべると、もつと明快に日本の人情主義を力説した。即ち宣長は「人の情のやうを見てそれに従ふをよしとす。これ物の哀れを知るといふ物なり。人の哀なる事を

見ては哀と思ひ、人のよろこぶをきゝては共によろこぶ。是すなはち人情にかなふ也。物の哀を知る也。」といひ、或は「いみじくめでたき櫻の盛に咲きたるを見て、めでたき花と見るは物の心をしる也。めでたき花といふ事をわきまへしりて、さてくめでたき花かなと思ふが感ずる也。これ物の哀也。」とも云つた。人情の自然を尙び、こちたき理窟ぬきに、純情を發露するところ、そこに日本人の一特性があるとしたのは、宣長の卓見である。

八 思想界の巨星平田篤胤

宣長の日本精神闡明は一代の注意を喚起し、多くの共鳴者、隨喜者を得た。その門下に集つたものうちに、特に傑出したのは平田篤胤(氣吹の舎)である。彼れは秋田出身で、安永五年の出生であつた。彼れの精神的活動は目ざましく、その師、宣長の主義、主張を積極的に宣傳したに止まらず、内容上に於ても、一段の深みを加へ、情熱と冥想との色合を添へた。彼れは宣長の後繼として、一番鮮明に輝いた巨星である。

篤胤は學者として、宣長に一步を譲るが、論壇の闘將として恰好の資格を備へ、またプロバガンヂストとしても、優れた資質を持つてゐた。それに物事を一段深く考へると云つたやうな哲學者的なところもあつたが、それは透徹した理性よりも寧ろより強い情熱に裏付けられてゐた。

彼れの日本の哲學は、その特有の宇宙觀及び死生觀から始まる。彼れは天地創造の事に思ひを馳せて、

「天地開闢の始めは太虚の如き姿であつたが、その中から先づアメノミナカヌシノカミ（天之御中主神）が現はれ、次ぎに男神タカミムスビノカミ（高御産巢日神）、女神カミムスビノカミ（神産巢日神）の二柱の神が現はれ、男神は外事（陽）を掌り、女神は内事（陰）を掌つた。この二柱の神の靈徳によつて、宇宙の萬象が形造られ、天成り、地生れ、ヨモツクニ（黄泉）即ち幽冥界が出来た。」と爲した。

蓋しアメノミナカヌシといふのは、宇宙の根本生命乃至絶對的久遠生命の象徴で、タカミムスビ、カミムスビの二神は陰陽二氣の象徴である。この陰陽の活動、合成によつて世界に於ける萬象が成立し、陽氣は浮んで天となり、陰氣は沈んで地となり、茲に人間を始め山川草木國土が出来たといふのである。次ぎに篤胤は當時、漸く芽を吹出しかけた西洋科學の片鱗を利用して、窮理的態度を執り、タカマノハラ（高天原）を太陽と見なし、ヨミノクニ（夜見國）を月球だとした。（『古史傳』、『靈能眞柱』、『玉禱』等参照）それらは篤胤が新解釋を加へようとした意圖を知ることが出来るが、何れかといへば、餘りに空想的であることを思はせる。

彼れの宇宙觀は右の如くであるが、その死生觀は本居宣長がまだ言及せぬ範圍に觸れたといふ意味で注目に價する。彼れの解釋によると、在來、幽冥界を暗黒、汚穢の世界としたことを否定し、「冥府は闇く、顯世のみ明きとのことにはあらず。なおもひ混へそよ。實は幽冥も各々、某々々、衣食住の道もそなはつて、この顯世の狀ぞかし。」と現世と同様に見るのである。次ぎに人が死んだら、その靈魂はどうなるかといふことについて、彼れは靈魂不滅説を把持し、「現身の世の人も、世に居るなどこそ、如此て在れども、死て幽冥に歸ぎては、その靈魂やがて神にて、その靈異なること、その量々に貴き賤き、善き惡き、剛き柔きの違こそあれ、中に卓越たるは、神代の神の、靈異なるにも、をさく劣らず功をなし……」云々と述べた。

彼れの云ふところは、獨斷的、感情的で、そこに精確な論證を缺いてゐるが、近代ヨオロッパでも、科學上、殊に心靈研究の上から靈魂不滅説を唱へてゐるものがある位で、必ずしもそれを非科學的だとはしてをらぬ。それ故、篤胤が何等精神科學の輸入なき當時に當つて、靈魂不滅説を提唱したことは、『古事記』、『日本書紀』の神々の活動から思ひ付いたものにもせよ、注目に價する。それに彼れが幽冥界を現世と同一視して明るい世界、快活な境としたことは、空想的であるにもせよ、日本人の生々光明主義から考へると、必ずしも妄想ではない。死を光明化するといふ上に於て、篤胤の見解は純正神道の極意に觸れたとしなければならぬ。この點、曾て宣長が觸れなかつた問題であるが、そこに篤胤の宗教的感情が宣長よりも一層熾烈であつたことが察せられる。

次ぎに篤胤は曾て宣長が「古道即ち神道だ。日本に於ける道とは、神の道以外にはない。」と肯定したあとを受けて、更にこれに積極的意義を附加した。彼れは『入學問答』のうちに於て、「古道と申候は、何の事もなく、古の道と申すことにて、其は天皇祖神のこの天地を御造りなされ候を始め、上代の事實の上に備はり候眞の道を聊も外國風の説を混へず、純粹なる古意古言を以つて、すなほに説明し、その事實の上にて、天

皇命の天下を治め給ふ御政の本をも、人道の本をも知り候學問故、古學と申し、その道をさして古道とは申候事に候。」といふのである。

以上によると、日本の道は神道で、その神道は『古事記』その他の古典に理論を混ぜずに自然に具體的に示されてゐるのであつて、それは後世の支那的、印度的な見方を加味せぬ純粹の根本道徳だ。その内容には政治上の基本とすべきもの、人倫の土臺とすべき生命が盛られてゐる。即ちこれを大きくしては治國濟民の道、これを小さくしては、一身一家を治め、整へる道が、指示せられてゐる。篤胤はかう解釋した。

が、それは儒學の如く哲理的に難解なことを云はず、佛教の如く煩瑣な理論を構成せず、簡易、直截、明快な道だといふことを明かにするため、篤胤は特に注意し、『古道大意』のうちで、「眞の道と云ふものはいかうむつかしいことかと云ふに、一向無造作なもので、彼の心法や悟道や、聖賢のまねなどのやうに出来にくいものではなく、大手を振つて歩行れるやうに、誰しの人にも、心安く出来ることで、皆が知らず／＼其道を歩いてゐる。」と云つた。この點、確かに時弊を鋭く穿つと共に、神道の民衆化に資するところがあつた。宣長も既に儒教の智巧的、作爲的な缺點を指摘して、自然隨順的な長所が日本の古道即ち純正神道にあることを述べたが、篤胤の解釋によつて、旨意が一層はつきりして來たのである。

第四章 文化文政時代の精神生活 (下)

一 日本文化優越論

篤胤はそれから一步進めて、神から授けられた人間の性質が、當然、善であらねばならぬことを述べ、その性善を基本として、日本人は何人も神道の旨を一身に體現出來るとした。神道の旨とは、(一)純潔清淨、(二)人倫實行、(三)發展膨脹を意味するものとして、篤胤は『玉禱』に於て、「皇神の道の趣きは、清淨を本として汚穢をきらひ、君親には忠孝に事へ、妻子を恵みて、子孫を多く生殖し、親族を睦び和し、朋友には信を専らとし、奴婢を憐れみ、家の榮えむ事を思ふぞ、神ながら御傳へ坐せる眞の道なる。」と述べた。以上、神の道を具體化したのが日本である。

彼れの日本觀は、宣長と略ほ同一であるが、その優越を高調した點に於て、一段の強味を加へた觀がある。彼れは宣長が『鉗狂人』中に「抑も皇國は四海萬國を照します、天照大御神の生ませる本つ御國にして、その皇御孫命の天より降りまし／＼と、天地と共に遠長くしろしめす御國なれば、萬國の元にして、萬國にすぐれたり。」と云つたのを押進めて、「それ皇國は神眞の本域、大易の始めて出づる所、國土の始めて立つ

所、固より大地の元首、而して萬法の根據たり。」と推讃した。即ち彼れは日本が歐米、支那、印度に優つて、世界の模範、指導たるべき國であるとしたと同時に、當時、最新の消息とも思惟せられたエンゲルベルト・ケンベル (Engelbert Kaempfer) の『日本史』(History of Japan) の日本讚美論の要旨を紹介し、「何と、はるかに西の極なる外國人のかほどまでに御國の實以て萬國に殊れて結構な國といふことを覺えてゐることぢやに、その國に生れて、その國の事を知らずにあるといふのは、口惜しいこととござる。のみならず、これほど結構な國に生れながら、外國どもをほめて、良い國ぢや、強い國ぢやなどと思つて、その外國の奴原などが御國近くの放れ島へでも生なまこしやくなことでもすると驚いて眉をひそめなんどする者がある。こりや一向はかない愚かなこととござる。」と述べた。

篤胤は當時の人として西洋文化のことをも相當に知り、日本對歐米の問題についても、一家見を持つてゐたのであるから、單なる御國自慢、單なる強がりとは聊か異つたところがあつた。唯ケンベルの日本觀は、元祿期の日本であつたから、化政期の日本に當てはめることが出来ぬ點もあつたが、日本人の勇武、日本が地理的に恵まれてゐることは、化政期に於ても變りはなかつた。何れにしても日本主義者として、歐人の日本讚美論を紹介したのは篤胤を以て始めとする。

以上は彼れの日本論の要點であるが、彼れは尙ほ文明史上、日本が世界の先覺であることを學術の方面から説明しなくてはやまなかつた。蓋し彼れは支那を文明上の先進國と爲した當時の學者らの考へに慊らず、日本こそ支那に對して先進國であるといふことを主張しようと思つて、この擧に出たのであらうと察する。

彼れは古代支那の文明を發達せしめたのは日本人であつたといふことを論證するために『三五本國考』、『赤縣太古傳』、『春秋命歷序考』、『大扶桑國考』などを著はした。その趣旨とするところは、支那古代の三皇五帝——伏羲氏、神農氏、軒轅氏及び少昊金天氏、顓頊高陽氏、帝嚳高辛氏、帝堯陶唐氏、帝舜有虞氏——は日本に生れて、支那に渡り、彼の地の士民を教化したといふのである。それから醫學、易學も日本に起つて、支那に傳はつたといふことを、『醫道大意』、『太皇古易傳』で主張した。のみならず、漢字渡來前に日本古代文字の存在したことを肯定すべく、『古史徵』で考證し、所謂「和字」なるものは「神世の字」だとした。

それらによつて、篤胤が文明上、日本を以て支那指導者と爲し、精神的に支那を克服しようとした意氣の壯なるを知ることが出来るが、その説に至つては、尙ほ再考すべき餘地が多く、時には牽強附會に流れてゐた點もあつた。が、學術上、篤胤が一つの新しい問題を提供して、學界を刺戟した點より見れば、彼れの努力は必ずしも無意義でない。

如上、主として篤胤の建設的方面を擧げたが、それらの要領は大體、『古道大意』に於て、順序よく説かれてゐる。それから彼れの破壊的方面は、殊に彼れの論壇に於ける鬪將にふさはしいことを示してゐた。破壊的方面とは、眞淵、宣長以來、排撃した佛教、儒教などの折伏事業である。眞淵、宣長の二人は主としてその攻

撃の焦點を儒學に置いたが、篤胤は儒學と略ほ同様の程度に佛教を非難し、心學、蘭學さへも、多少これを辯難した。尙ほその上、純粹神道でないと思ふ神儒一致的、乃至神儒調和的な神道説をも容赦なく痛撃し、俗神道と嘲つた。精悍な彼れは、始終その烈しい戰鬪的態度を繼續して、一步も假借しなかつたのである。

篤胤は純正神道以外の諸派、殊に儒佛二教に向つては、旺んに熱罵を浴びせかけ、冷嘲をも加へた。その用意のために、彼れは相應に儒佛二教を研究したらしいが、何れかと云ふと、學理的にこれを非難するよりも、それから生じた弊害などのみを見て、感情的に非難するの風があつた。勿論、學的にも、時々その缺點を鋭く指摘したが、大體の調子は感情に偏してゐた。感情的といふことは必ずしも悪いばかりではなく、時には、時人が痛感する不満の念——佛教、儒教への——を痛快に云ひ現はしてゐる節もあつた。

二 儒佛兩教に對する辯難攻撃

本來、精悍な彼れとても、好んで儒佛二教に熱罵冷嘲を加へようとしたのではない。佛教を攻撃するについては、大分躊躇したことさへあつた。が、純正神道の立場から、日本主義の精神から、到底、黙してをられぬと知つたために、佛教にも辯難の鋒先を向けたのである。儒教に對する彼れの難點は、大體、宣長と同一であるが、『伊吹於呂志』に於て儒學者の研究方針を非難したのは當を得て痛快であつた。彼れは、「學問は何のためにする事と心得たるか。すべて學問の道は外國の事を學ぶにいたせ、その學ぶ主意は、その善事を

取つて、この御國の御用にせんとて學ぶことぢやによつて、先づ御國の事を本として學んで、さて外國の學びに及ぶが順道でござる。しかるを世の漢學者流を見渡すに、我國の事を問はれても知らずと言つて恥ぢと思はず、我國の事を問へば知らぬ事まで知つた顔に申すでござる。かの卑しき口すさびにも『虎の鳴く聲を聞かれて儒者困り』、また『魯の國の僉議する間に腰かゞみ』とも申したは儒者のこの癖を詰つたものでござる。さる輩の若し君命を蒙り、戎人と應對することあつて、かれより皇國の事を問うた時、吾はこの國の事は知らず、その方の國のみ學んでゐると申すだらうか。」と日本の自覺が飽迄、必要なことを力説した。この點、今日の西洋崇拜者にも當てはまることと思ふ。

篤胤は更にその鋭い鋒先を儒學者に向け、その自國を法外に卑下するの愚を嘲つて、「さやうの輩に何ぞ吾が皇國の事を學ばぬのだと尋ねれば、假名文のみが多いから俗ぢやなどと申すが、これが却つて俗意でござる。すべて戎籍のみ讀むものは、黃口乳臭の小兒輩に至るまで、我が皇國の御書を読み、我が皇國の書を學ぶなどを俗ぢやと申すが、さういふ心を察するに、御國文は兒女輩も目に馴れて珍らしけなく、漢文の男文字、見ぬ諸越の物語は愚夫兒女子の耳を驚かすを喜ぶ俗意に根ざして、露ばかりも眞の道を探ねんなどの志なきやう、字伊のみを言つて讀むこと能はず……孔子もし皇國の人に生れたらば、世の儒輩がする如く、この國の學びをせず、魯の國、齊の國の穿鑿する間に腰のかゞむやうな迂遠なることにのみ生涯を送りませうや。時勢にあづかる所の御國の學を本として、外國の事は羽翼に學び申すべきは、いふ迄もない。」と切に

彼等の目ざめを促した。

他國文化を認識することは、先づ自國文化を認識することであり、他國を尊敬することは、先づ自國を尊敬することである。又あらねばならぬ。篤胤の旨意は、これ以外に出ない。そこに妥當性があつた。が、佛教各派に對する非難は概ね的外れてゐた。けれども佛教批判が十分に行はれなかつた。當時にあつて、縦横に直言した彼れの自信と勇氣とは尊敬せられて宜かつた。殊に佛教が出世間的に傾いて、厭世、悲觀に人を導く缺點を指摘したことは、それが小乗教の範圍に於ては、必ずしも不當でなかつた。

また彼れが佛教化的神道、儒學化的神道に一撃を加へて、これを「俗神道」と罵り、神官の墮落を指摘して、佛僧の所爲に追隨するものあるを笑ひ、進んで教義上から非難の矢を放つて、「折ふし國常立尊などと神の御名を申し出るばかり、それもうべくしげに聞ゆることどもは皆世の神道學者等が赤縣（支那）の説を附會して言うたる陰陽五行の取り添へ、又は氣化、心化、造化などいふなまさかしらに、心法の説で作つたる高天の原といふは則ち胸三寸のことで心の異名ぢや位のことを取り、すべて屁の如き説。」と云つたのは一面、その不純を適切に指摘してゐる。

その他、蘭學者が蘭語を誇り氣に亂用し、國語の尊重を忘れたことを非難したことも、多少首肯される。國語を重んずることは、宣長も、『漢字三音考』その他に於て教示したところで、篤胤はその旨を擴充したのである。「外國の語は、言葉の體用本來を誤つて、言靈の妙用になはず。」といふのは少くし過激であるが、

「我語の字音ことばが入り交つて以來、御國の語が大きに悪くなつて……」と云つたことは、當時の蘭學者に對しては、よき戒めであり、儒學者には反省の資料となつたらうと思ふ。

三 國學者と儒學者の論争

以上の如く、宣長、篤胤らが論壇に起つて儒學者らを相手に論争したことは、當時の偉觀であつた。元來、宣長は温厚の人で、自ら進んで論戦しようとしなかつたが、時代は彼れをして謙虛のみに安住せしめなかつた。彼れは儒學者、市川匡鷹が『末智能比禮』に於て、彼れの説を難じた文章を読み、また國學者のうちにも、時に異論あるのを聞いたので、止むなく、これに應戰するために『葛花』を書いた。

市川匡鷹は宣長の説を難じて、「古道なるものは神代の儘だといふが、神代に於ける神も實は人で、その傳へたところも、人間が爲し置き、設け置いたものだ。人間が道を立て法を設けてこそ、國が治まるわけだ。それ故、この時代から前に遡つた頃のこととは茫としてわかる筈がない。」といふのである。宣長はそれにして各方面から答ふると同時に、難者の謬見を打破らうと力めた。その意味に於て、『葛花』は中々、充實した論文だつたといふことが出來よう。

當時、宣長の日本主義に向つて挑戦したものに、上田秋成があり村田春海があり、富士谷御杖などがあつた。秋成は皮肉な物の云ひ方をして、本居氏が日本を尊重するが如く、他國人も亦その自己の國を尊重し

て云ひ争ふならば、議論はいつ迄も盡きまい。氏の説は要するに、國內の儒學者のみに讀ませる爲めになされたのであらう。」と『清風瑣言』に於て難じた。それに對して、宣長は『呵刈葭』一篇を挿して、答ふところがあつた。また宣長は藤井貞幹が『衡口發』に於て、日本の皇族は吳の泰伯の後で、韓國を経て、わが國に入つたと考證したのを不當とし、『鉗狂人』を書いて、その妄を指摘した。温厚な宣長も勢の赴くところ相當に論戰を重ねたのである。

折柄、儒學派では、林述齋の門人、沼田順義が市川匡磨に應援して『科長戸風』で宣長の説を駁し、『國意考辯妄』で眞淵の主張を論難した。それと見て、平田篤胤の門下、新庄道雄が起つて、これに應戰し、原田重枝がこれに加勢するといふ有様だつた。かうして國學者と儒學者は對立抗爭し、その間は容易に融和し難く見えたのである。

これ迄に問題を惹起した太宰春臺の最初の論旨はどうであつたか、一應振返つて見たい。春臺は荻生徂徠門下の傑物で、殊に經濟學者として卓越してゐた。彼れは『辯道書』において、日本には元來、道といふこと無之候。近き頃、神道を説く者いかめしく我國の道とて高妙なるやう申候へ共、皆後世に言ひ出したる虛談妄説にて候。日本に道といふことなき證據、仁義禮樂孝悌の字に和訓なく候。凡そ日本に元來ある事は、必ず和訓有之候。和訓なきは日本に元來此の事なき故にて候。」と先づ神道者に向つて一矢を射た。

次に春臺は古來、日本に禮文なしとし、神道が到底、儒教の高妙なるに及ばぬ理由に言及して、「禮義と

いふことなかりし故に、神代より人皇四十代のころまでは、兄弟叔姪、夫婦になり給ひ候。その間、異國と通路して、中華の聖人の道、此の國に行はれて、天下の萬事、皆中華を學び候。それより此の國の人、禮義を知り、人倫の道を覺悟して禽獸の行ひを爲さず……日本の神道は小さき道にて政を助くること能はず候。畢竟、諸子百家も、佛道も、神道も、堯舜の道を戴かざれば、世に立つこと能はず候。」と述べた。

春臺の云ふところは、必ずしも全部不當であるとは云へぬにしても、『古事記』、『日本書紀』等の古典を正當に研究せぬために、その立論の根據が薄弱で、獨斷に近いところが往々ある。古代日本に於ては、古代支那の如く、道德、政治に關することが理論的に發達してゐなかつたが、『古事記』などの示すところを見ると、支那よりも却て道德上の實行に見るべきものがあつた。それ故、支那に學んで、日本人が人倫、禮儀を始めて知つたといふのは妥當でない。また神道を小なる道だとして、儒教ほどに政治上、役立たぬとしたことも、古來の祭政一致主義を正當に認識せぬところから來てゐたと云はねばならぬ。それ等に對して、眞淵、宣長らが大なる不滿を抱いたのは當然であるが、眞淵、宣長にも聊か云ひ過ぎた氣味があつたのも事實だ。

以上の論争について、儒學派の會澤正志齋が下した批評は、儒者として比較的穩當の旨を得てゐた。彼れは「聖人の道は仁と誠とにあり。智巧賈物を以て目するは非なり……本居の學、天朝を尊び、皇統正しきを論ずるは實に千古に卓越したる確論偉識なれども……聖人を誹譏するに湯武を指して聖人と云ふのみにして堯舜孔子を知らず。」と述べた。堯舜の事蹟は史學上頗る疑問とせられ、その禪讓については否定的傾

向が強けれども、孔子を眞の聖人とする點は正當である。

茲に一つ、興味ある現象は、朱子學派の人々が最も異端視した老子哲學について、眞淵、宣長、篤胤らが心中、共鳴したことである。現今、老子は印度人か、支那人か。彼れの思想は印度の影響のもとにあつたかどうかと云ふことが尙ほ大きい問題となつてゐる。左様した問題の人、孔子の正系を尙ぶ人々の間に寧ろ異端視せられた老子が、國學者の間に重視せられ、共鳴、傾倒するところとなつたのは、一奇としなければならぬ。

勿論、宣長は表面、老子を排斥したかの如き口吻を示したが、その方法論上の自然主義的傾向に於ては、眞淵と同様、餘程、老子に似た一面があつた。篤胤は露骨に老子に共鳴する旨を述べ、「誰か云ふ、老子を道の異端なりと。其は信而好古とは云へど、唐虞以下を祖述して其以前を取らず。文武が所行を憲章して之を文質彬々と稱する儒法よりは然も謂ふべし。我が皇國の大道よりは、然しも云ひ腐すべき道に非ず。」と云ひ、老子の道はその實、「我が皇神たちの、早く此處（支那）に授與ひし道」と解し、老子の旨と神道の旨と共通するところあることを『赤縣太古傳』で言明した。大分、獨斷的で首肯し難いけれども、彼れが老子哲學に對する態度は、これによつて明かだと思ふ。

如上、國學者の思想上に於ける新運動は、種々是非の評を伴うたが、時代思潮の上に大きい影響を與へたことは肯定してよい。蓋し當時の儒學者が抽象觀念に囚はれて、漸く時代の新傾向に遠ざかり、空論、虛辭

を以て、日を送りつつあつた無自覺的弊害こそ、やがて國學者の蹶起を促す主因となつたのである。それ故假りに眞淵が現はれずとしても、矢張、彼れに似た思想家が出現しなければならなくなつてゐたのだ。時代は思想、學術の改革を促してゐたのだ。その要求にびつたりと答へたのが、國學者の運動だつたのである。

四 日本、主義哲學の影響

今日、公平に國學者の運動について考へると、その態度が少しく過激に流れ、理論上、精密を缺く點が往々ある。けれども思想、學術の上で、日本が創造的獨自の面目を發露せねばならぬことを明かにし、日本文明が行實の文明であり、日本の國風が自然の人情を重んじた點をも明かにしたのは、確かに彼等の長所であつた。殊に行詰つた政治局面を打開して、明治維新を出現すべき或基礎工事の一半を彼等が爲したことは、見逃がし得ぬ重要點であつた。それは何か。勤王精神の鼓吹である。

當時、江戸幕府の政治は、もう行詰つてゐた。たとひ、松平定信の寛政改革があるにもせよ、又ないにもせよ、それらは餘り關係がなかつた。幕府はこの制度の上からも、經濟的行詰りの上からも、内部的に崩壞の道を辿りつつあつた。國學者の一群が果してそれを意識したかどうか。假りに意識したとしても、彼等には發言權がなかつた。若し強ひて發言しようとするれば、彼等は叛逆者として取扱はれねばならなかつた。それ故、宣長の如きも、江戸幕府の忌憚に觸れるやうな言葉を發しなかつたが、何等か新しい時代が、早晚來

るであらうことは、聰明な宣長の意識に、多分上つたにちがひあるまい。殊に篤胤に至つては、尙更のことだつた。

彼等は倒幕といふやうなことを夢にも思はなかつたらうが、おのづから言論の上から、新時代の到來すべきことを第一に告げた豫言者であり、先驅者でもあつた。彼等は表面に於て、これを公示しなかつたけれども、勤王精神の勃興を促す上に於て、當時の知識階級に少からぬ影響を與へた。それは日本的自覺を高調したことから導き出された自然の結果であつたが、そこから江戸幕府顛覆の烽火があがるであらうことは、流石に彼等の明識を以てしても、或は透察し得なかつたことであつたらう。

彼の平田篤胤が『天朝無窮曆』を著はしたために、司天臺(天文臺)の役人に忌まれ、天保十二年、江戸退去を命ぜられたのは、唯右の著述の故のみではなく、平生、燃ゆるやうな情熱を以て説く彼れの日本學が、自然江戸幕府の存立に不安を與へたがためであつたらう。篤胤の著書を読むものは、勢ひ日本中心主義となり、惹いて勤王精神の目ざめを來たすにちがひなかつた。それは彼れの日本學が一種の強い宗教的信念によつて裏付けられてゐるからである。

勿論、彼等の出現以前に當つて、或は彼等と略ほ同時代に勤王精神の勃興を促したものがなかつた。徳川光圀、山崎闇齋、若林強齋、山縣大貳及び水戸學派の如きがそれであつた。が、所謂『漢意』を混入しないで、醇正な意味で日本精神を高唱し、そこからして、勤王精神の誕生を促したのは、國學者の一群であり、その代表人物が眞淵、宣長、篤胤らであつた。彼等以後に出た學者、思想家、政治家は勿論、宣長、篤胤と同じ時代の空氣を呼吸した知識階級で、彼等の影響のもとに立たぬものは少い。

結局、彼等の努力は、思想上の改革から學術の改革を促し、更に間接に政治、經濟の改革を促す一所因を作つた。篤胤の如きは、常に宗教、哲學、文藝のみならず、醫學、考古學、天文學、言語學、史學などの上にも、日本的研究、日本的態度の確立を計らうとしたのであつた。言ひ換へれば、日本本位の宗教、哲學、文藝、醫學、考古學、天文學、言語學、史學などを創設しようとしたのである。

尙ほ彼等に關連して一言し置かねばならぬのは水戸學派の精神である。水戸學派として有力な人々は、徳川光圀を始め、安積澹泊、藤田幽谷、同東湖、會澤正志齋らで何れも勤王精神の振起に貢獻した。その間に於て、神儒一致説を唱へつつあるうちにも、神道を主とし、儒教を客として、宣長、篤胤らに近接した思想を有したのは藤田東湖であつた。東湖は文化三年、水戸に生れ、父幽谷から思想上の指導を受けた。

彼れの『弘道館記述義』によると、特に神道を尊敬して、「神道は天地の大經によつて天神の立ち給へる自然の道であるから、唯一であつて他岐の由るべなき正道」と爲し、支那の儒教などと區別するが爲めに、古道、神道などの名稱を生じたことを述べてゐる。かくて儒教は神道の根に培ふべく、客位に置かれるのが至當で、主位にあるのは、當然神道であらねばならぬと信じた。茲に國學の主張と、一脈相通するところがある。彼れの『文天祥正氣の歌に和す』の長詩は宣長、篤胤らの主張と全く一致し、至大の感化を士人に與へ

た。恐らく、その思想の本源は、國學一派の言説から來てゐるのであらうと思ふ。

五 新興經濟思潮

如上、述べ來つた國學者の精神運動に次いで新しい興味をそそられるのは、文化文政期に於ける新興政治經濟の思想である。それ等の方面に關係ある有力な學者は不思議にも、大體に於て、日本中心主義に立脚してゐることだ。當時、最大の農政學者といはれ、國家社會主義の先驅をした佐藤信淵は、平田篤胤の門下で、思想上、篤胤の影響を最も深く受けた。また經濟學の權威だつた海保青陵、本田利明、農民救済に全力を傾倒した二宮尊徳らは、いづれも日本中心主義に立脚したのである。そこにおのづから時代の推移が見られるではないか。

それらの日に於て、經濟學の最高權威に推さるべき一人、海保青陵は『萬屋談』中で、儒學者の迂遠を笑ひ、「凡そ儒者は青表紙にくらまされて、眼一向に見えぬ也、あほうばかり云て居る也。必々儒者の論に拘はるべからず。唯目のこ算用に、聖賢の言をぎしく推して見るべし。たとへどのようなる立派な論にても、今の世に用に立たぬ論は、畢竟むだ議論也。先王の禮樂刑政いうて見れば、見事なるばかりにて、今の世に用にたゝず、眞のひまつぶし也。」と罵倒した。それから彼れは一步を進めて左の如く嘲つてゐる。

儒者先生の禮樂を立派に説竝ぶれども、今の用に立たぬ故、政の談になれば、隅へひっこみ、目をばらば

ちして、黙して見て居る也。そこで身代直しのをやぢ出でて、眞の政をすること也。儒者は小供のまゝ、こ
と也と思ふべし。邪魔になるとも、助けには頼とならぬ。(下略)

○
鶴(青陵)國を經たること三十、儒者に逢ひたること數百人、博く書を見て覺えて居る人も澤山あり、字の音を覺えて居る人も澤山あり、腕の達者に文章をとりまはす人もあり。杓子定木でなき人は一人もなし、聖人の意を語る人も一人もなし、智慧に益を得たる人も一人もなし。云々。(養心談)

以上は化政期の空氣を呼吸し、且つ曾て松平定信の執政振をも知つた青陵が事實にもとづいての批判である。それによつて、當時の儒者が全く無氣力になり、文武周公の政治とか、堯舜孔子の徳とか云ひながら、平生、實務から遠のき、眼前必要な政治、經濟に關して殆ど何の用意も研究もしなかつたことがわかる。要するに儒者の多くは、字句、文章の末技に拘泥したのであつた。言ひ換へると、彼等は儒學に中毒して、支那崇拜病に罹り、獨自の見識を失つたのである。

かく見來ると、化政期に於ける政治、經濟思想に寄與した有力な學者が、儒學から解放せられた日本中心主義者の中から現はれたのは偶然ではない。彼等は國學運動即ち日本精神文化の新運動に一脈相通する立脚地に歩を入れ、日本的に、自主的に政治、經濟を考察したが故に、その新見を編み出し得たのである。即ち彼等は政治の上に、經濟の上に創造日本を建設しようとしたのだと云つて宜からう。茲にそれ等の思想を

紹介するに當つて、順序上、簡單に過去の徑路を振返つて見よう。

一體、江戸前半期に於ける政治經濟思想の歩みは概ね遲緩であつた。その多くは月並式思想でなければ、支那翻譯式の鴉片思想であつた。政治と云へば必ず徳治主義、經濟と云へば必ず節儉論、勤儉論乃至重農主義以外に出ない。それは抽象觀念の所産で、實際にうとく、潑刺たる生命に乏しいものであつた。その他、經濟上、賤財説によるもの、財の重んずべきことを説くもの、重商主義に立脚するもの、王道、霸道の得失について論ずるものもあつたが、それとて、多くは事實、實際に遠く、空疎なイデオロギイを有したに過ぎなかつたのである。

それ等のうちにあつて、異彩を放つ少數の學者がないではなかつた。新井白石、荻生徂徠、太宰春臺、三浦梅園などがそれである。それらの後を受けて、化政期前後に現はれた有力な學者は、既に擧げた信淵、青陵、利明、尊徳らであるが、尙ほ中井竹山、山片幡桃(芳秀)、畑中太沖、本居宣長らを數へる事が出来る。以上のうち於て、今日の時勢からも、學的方面からも、多大の興味を感じるものは、佐藤信淵の政治、經濟思想である。世上、往々、佐藤信淵の政治經濟觀を以て、空想的迂遠のものと思はす人がないではない。「文學に現はれる我が國民思想之研究」の著者津田左右吉氏の如きはその一人で、信淵の主張は立派だが、その態度は呑氣過ぎる。要するに机上の空論だとしてゐるが、誤解の甚だしきものだ。彼れが貧乏に堪へ乍ら、久しい間涙ぐましい努力を續けたのを知り、時代の大眾を經濟的苦惱から救出さうと焦燥したのを知ると、彼れを單

なる夢想者として笑ふことが出来ぬ。まして彼れの立場は何處迄も學者たるにあつて、必ずしも實行者たるべき義務がなかつたとすると、一概に彼れの言説を呑氣過ぎるなどとは云へない。現時の行詰つた政治經濟を思ふ時、多大の關心と興味とを信淵の學說の上に持たざるを得ない。

信淵は羽後國の出身で、明和六年に生れた。父祖以來の家學を繼いで、早く政治經濟の上に一見識を立てたが、一方では、思想的に本居宣長、平田篤胤の影響を多く受けた。その宇宙觀、人生觀は、餘程篤胤に似てゐる。且つ日本神道を信じ、性善説を固守して、人間の禍福吉凶を輪廻轉生の思想によつて解釋せるなど、普通の經濟學者と異つてゐるのみならず、彼れの經濟思想が、宣長、篤胤らの論敵、太宰春臺と正反對の側に立つてゐるのも興味多き現象で、暗示に富んだところがある。

春臺はその名著『經濟錄』により、封建的貴族に味方する立場にゐるたが、信淵は『復古法概言』、『垂統秘錄』などの有力な著作によつて、新時代民衆に味方する立場を守つた。前者は支那崇拜的精神を把持して、『經濟錄』の内容も『史記』中の八書——禮、樂、律、曆、天官、封禪、河渠、平準——及び『漢書』の十志——律曆、禮樂、食貨、郊祀、天文、溝洫、地理、刑法、五行、藝文——によるところが最も多かつた。ところが、信淵は多少、支那經濟書にも據つたが、宣長の『祕本玉くしけ』などに負ふところが少くなかつた。即ち春臺は、經濟學者として舊時代を代表する殿將となり、信淵は新時代を豫言する先驅者となつた。茲に學說上に於ける時代の推移がはつきりと反映せられる。

六 佐藤信淵の國家社會主義

概言すれば、信淵は大體に於て、國家社會主義的思想家である。彼れはプロレタリアの一人として、封建政治の缺陷を自覺すると共に、當時の支那式鵜呑本位の經濟策にも慚らず、彼れ獨自の政治經濟思想を組織した。その主眼とするところは、私的資本主義による富豪の横暴を制し、大衆の共存共榮を確保するにあつた。が、彼れは日本國體の熱心な維持者で、兼ねて又日本中心主義の使徒でもあつた。これ彼れが國家本位の社會主義者だつた所以である。

如上の思想、傾向は、これを『復古法概言』及び『垂統祕録』に見ることが出来る。當時農民の窮迫が甚だしく、一度饑饉が起ると大きい悲劇を出現するといふ有様で、いつも悲惨の狀態を續けてゐた。農民に多大の同情を寄せてゐた信淵は、これを黙過し得なかつたのである。當然、彼れは大多數の農民に味方して、も少し餘裕ある生活を送らしめたいと念願した。『復古法概言』、『垂統祕録』の著述は、かうしたところに所由を持つ。勿論、一面に於ては、江戸幕府及び諸大名の財政難、武士の生活苦、物價昂騰に伴ふ江戸士民の困難なども亦彼れの心を刺戟し、この點にも改革の手を伸ばさうとしたのである。

信淵の『復古法概言』は、水野越前守の下問に應じて執筆したが、水野はそれを手にする前に、關老の地位を去つたので、實現に及ばなかつたと云はれる。その内容は、(一) 商事の官營、(二) 物價の公定、(三) 士民の生活難救濟、(四) 勞資共濟、(五) 奸吏に對する制裁と處置、(六) 仁政の要及び府庫の充實などを説いてゐる。その全體を一貫するのは國家社會主義の思想だ。それは經濟上に於ける一大改革で、信淵は水野宛の上書中に「御一覽の上速かに御燒き捨て下さるべく候。」云々と附言した。

信淵が商事の官營を主張し、物價公定を必要としたのは、奸商が暴利を獨占することを制し、合せて貧富の懸隔を取り除いて、國民生活の安定を欲したからである。彼れが元祿時代の勘定奉行、萩原近江守を攻撃して、「己が利を得んと欲するよりして、商人どもに大金を贏けさせ、終に官庫の財用を傾け盡して、今に至る迄、御國用不足の禍を起して、天下の金銀は悉く商人の家に集る發端をなし、世上を貧富片落しなる態とせり。」と難じたのを見ても、信淵の意のあるところがわかる。

貧富片落即ち富めるものは益、富み、貧しいものは愈、貧乏する傾向が當時にあつたことは、本居宣長が夙に看破したところであつた。彼れは『祕本玉くしけ』に於て、「世間の困窮に付ては、富めるものはいよいよますます富を重ねて大かた世上の金銀財寶はうごきゆるぎに富商の手にあつまる。片ゆきは古今の常なれど、其内にも今の世は別して貧しき者はますます貧しく、富める者はますます富むことの甚し。」と慨嘆した。信淵はこれを讀んで、泌々、その弊を痛感し、彼れも亦この點に論及したことがある。彼れが商事一切の官營(國營)を主張し、物價公定を必要としたのは、如上、階級闘争を惹起す恐れのある弊所を一排せんとする爲めだつたと思はれる。

信淵は商人が猛烈に利益を追窮する弊を指摘して、「古來、商賈を監察するの法度の嚴明ならざるによつて商人の利に走る事畏るべし。常に奸慾私曲を働く役人に諛ひてその尻馬に乗り、法外なる大利を得……利を貪つて知らざるは商賈の性。」云々と難じ、結果は、「天下の貨財は大概豪商の家に輻輳して、世界偏重の形成を成し、官庫も之がために空虚し、諸侯も下々も之がために困窮し、既に如何ともすることなきに至れり。今に當つて、萬物の價值を中正にし、賣買の利を贏くことを穩當にして、その法度を定め置かずんば、後々將に四海一族、大困窮の極に至らんとす。畏れざるべけんや。」と豫言的に世界の運命を判斷するが如き口吻を洩した。信淵が如何に當時經濟界の病所を適切に診定したかがわかる。かくて彼れは、「天地の正理に従つて正當を定めざるを得ず。」と爲し、茲に暴富者流の抑制、物價公定の必要を明示したのである。

が、當時武士の間には賤財思想が尙ほ相當に根を張つて、産業國營の意味を正解しないものがあらうといふことに考へ及び、信淵は賤財思想を時勢遅れとして斥け、「商賈を榮るつかやせことを卑賤とするがために、武士も百姓もみな商賈に制せられ、貧に困しむこと甚しといへども、人主も亦空虚にして之を救ふ能はず。」と云つた。左様すると、大名も困り、武士も困り、農工人も困つてゐるのをどうするか。信淵は上下救濟の資を得るため、「三十分一税」なるものを考へ出した。即ち産業國營のもとに「萬種の産物を賣り捌きたる代金の總高三十分の一を刎ねて、奉行所に積み置き、之を弘濟の施し金となす。」と云ひ、それらの金は直ちに融通し、「宗室、御連枝を始め、諸大名、御家人等貧窮に困しむものあれば、即ち御合力金を多く賜りて之を潤澤し

……」と述べたが、漫然、合力金を與へず、その貧困の原因を究め、萬一、それが放埒、奢侈から來てゐるとすれば、先づ舊弊改革を先務とすべき所以を附言した。

左様した新社會政策、新經濟政策を執るところの政府はどんな形態を組織すべきであるか。彼れは即ち一つのユウトピアを胸に描いて、その空想圖に思ひ浮べた政府の組織について語り、これを六府とするを可とすべき旨に言及して、「六府とは本事府、關物府、製造府、融通府、陸軍府、水軍府これなり。……四民（士農工商）の制にては、政事之行届かざる所ありて、諸の産業に精粹を極め盡すこと能はず。これを以て、天地より賜りたる大利を遺すこと少なからず。故に事大の政事を施行ふには、凡そ萬姓の營爲する所となる。その事相似に近きものを類聚して世界の諸産業を八科に分てり。即ち草、樹、礦、匠、賈、傭、舟、漁の八民これなり。かくの如く萬民を八業に區別して之を六府に分配し、一民に一業を賜つて、おの／＼その事を勉勵せしめ、嚴しく他の業に手を出すことを禁ずるを法とす。」と述べた。

信淵の考へは、各人が一事に勵精して、競争することを防ぎ、一生を安全に一業に託せしむるとしたら、皆その業に精妙なるに至り、利益増大して國利を殖やすことが出來ると信じた。かくすれば、一人の失業者もなく、鬭争も起らず、社會の幸福と平和とは永く續くにちがひないと信淵は思惟したのである。それから彼れは特に教化の事に心を留め、教化臺、神祇臺、太政臺などを設けて、教育事業の進歩に資し、精神上的訓練、修養を少年少女その他に與へると共に、(一)廣濟館、(二)療病館、(三)慈育館、(四)遊兒廠、(五)教育所を創

設し、無産階級救済を主眼とすべきことをも主張した。即ち一切の救助機關は政府自らこれを掌り、國家社會政策の實現に力むべきことを望んだのである。

信淵の國家社會主義の要点は以上の如くであるが、本田利明にしても海保青陵にしても、その思想が信淵よりは遙かに實際的であるといふ點に相違はあつても、經濟上の行詰りを打開し、貧富の懸隔を防いで、大衆の生活を安全ならしめようとした點では歸趨を一にしてゐた。更に對外發展のことを通商上からも軍事上からも考慮したのは本田利明で、この點、信淵と略ほ傾向を同じうしたが、信淵は西洋が、クリスト教によつて他邦侵略を講じたのに對して、神道を以て歐米を教化し、靈的世界統一を夢みたのである。

七 農民道德と階級思想

利明、青陵の經濟思想を説くことは、興味あることだが、化政期の文學とは、交渉するところが少いので、これを省略する。また二宮尊徳の農民救済から出發した農民道德の實踐についても、唯彼れが農業の振興、地利の開發、農民教育に力めたといふ事を手短かに一言するに留める。

尊徳は相模の人で、天明七年の出生である。彼れは農民の目ざめを促し、その努力、緊張を望むところから、その體驗にもとづいて、農人の行くべき道を説いた。それに於て、彼れは四つの要素即ち(一)至誠、(二)勤勞、(三)分度、(四)推讓などの必要を教示した。彼れの至誠とは、天地の公道に隨順することである。勤

勞とは私慾を制して克己努力することである。分度法とは各自の分を知つて、これに安んじ、儉約を守ることである。推讓とは生活上の餘裕が出來た時、喜んで餘分のものを、人に施すことである。それ等を實行して、天地人の恩澤に酬い、經濟と道德との調和宜しきを得るといふのが、尊徳の説く農民道德であつた。而も尊徳はそれを抽象觀念として述べないで、具體的に事實に即して教へ、それへ潑刺たる新生命を盛つた。そこに彼れの特色が存在する。

それから當時の文學と交渉深き思想として茲に略説して置かねばならぬのは封建的階級思想のことである。江戸時代に士農工商の差別が嚴重に設けられ、その不自然的等差が、比較的長い間、維持されたのは何によるか。それは(一)古來、米を俸祿とし、且つ主要食物としたこと、(二)兵農一致主義の考へが武士階級の頭から去らなかつたこと、(三)儒學上から賤財思想が強調せられたこと、(四)財に淡い點で、武士、農民の間に共通した趣があつたことなどである。

江戸時代の武士は次第に都會化し、若くは町人化した爲めに、漸次、農民と離れてゆくやうになつたが、鎌倉時代においては、兵農一致で、武士が百姓を兼ねた。江戸時代に於ても、土佐の下士といはるる人々は晴耕雨讀の生活を續け、一面、農民に親み深いところがあつた。鹿兒島その他の郷士にも、左様した趣があつたらうと思ふ。農民が武士の次ぎへ置かれたのは左様した關係からも來てゐた。それに俸祿及び主要食糧——米の生産者たる地位からも重んぜられたのである。

ところが、商人が最下位に置かれたのは賤財思想にもとづくのであつて、武士本位の社會から見ると、商人が財利獲得を主眼とすることを蔑視した。以上の意味で、商人は階級上から最も低い位置に据ゑられたが、本來から云へば、非合理なことであつた。その上、江戸時代の經濟學者は、ともすると、商業を不生産的事業だと解釋し易い誤謬に陥つた。信淵と併立すべき經濟學の權威、海保青陵さへも、「商業は有無を交易して、物を化するものにあらず、物を生ずるものにもあらず。造作者にあらざれば空位なり。」と迄云つた。即ち生産の主位にあるものを農民とし、非生産の主位にあるものは商人だとした。そこに錯誤があつたが、この謬想に囚はれぬのは信淵その他數人に過ぎなかつた。彼の荻生徂徠の如き、經濟學の先覺すらも、「本を重んじ、末を押すといふこと、これ古聖人の法也。本とは農也、末とは工商也。」と云つた位である。

左様した時代に當つて、四民同位説を持ち出したのは、室鳩巢であつた。彼れは少くとも、農夫と工商とを軒輕しないのが至當だと信じた。即ち「主君、武士を養ふことは、農工商を警固し悪人を抑へ、不能を進めんが爲めなり。……農人は天地生植の財をつかさどる……工人は天地器用の材を掌る。(中略)商人は天地の偏倚をたすけ、有を省いて無を補ふ。」と云ひ、その間に輕重を付けなかつた。確かに當時にあつては卓見である。

が、鳩巢の説は中々行はれず、商人は社會の下級に置かれ、種々の制壓を受けねばならなかつた。そんなら農民は社會的に優遇せられ、生活上の安樂を得たかといふと、事實はこれを裏切つて、封建政治が爛熟すればするほど、窮迫を増し、農村は次第に疲弊したのである。「政語」の著者荻戸太華は「郷村の疲れ、心外の至り、驚入り……」云々と嗟嘆した。けれども事實、當時の農民は政治の局に當る大名、武士から一種の搾取機械視せられてゐたのであるから、その困窮は當然の歸結に他ならぬ。

江戸幕府の創業を助成した本多佐渡守(正信)は「一年の入用作食をつもらせ、其餘は年貢に收むべし。百姓は財の餘らぬ様に不足なきやう様に治むる事道なり。」(『本佐録』)と云つた。爾來、諸大名は多く如上の方針を執り、生活膨脹と共に搾取の度が過ぎたが、それは彼等の顧慮する所とならなかつた。本田利明の『西域物語』には、享保の頃、神尾若狹守が「胡麻の油と百姓は、絞れば絞るほど出る。」と云つたとある。それについて、藤森弘庵は『新政談』のうちで、「百姓は只年貢用金を取立候ためのものとのみ心得居候類多く……」云々と嘆いたが、百姓を唯一に近い搾取物としたことは當時の常識ともされた見え、人情本の作者爲永春水も『士農工商心得草』で「農は納なり、貢を納めるが專一の心得」云々と述べてゐる。要するに、農民は表面、武士の次位に置かれながら、事實、奴隸の如く見られたのであつた。

ところが、農民と反對に、商人は次第に擡頭して、事實上、武士をも凌ぐ物質的餘裕を得た。經濟中心の時代が來た以上は、商人が勢力を得て、羽翼を伴はずのは當然であるが、その勢が増大して、貧富偏倚の弊さへ生ずるに至つた。それ故、『柳子新論』を書いた山縣大貳は「今や貴賤賤穀、日々に錢幣を蓄へ、紅腐の米徒らに商賈の資となり……」と慷慨した。殊に大鹽平八郎は、檄文に於てこの點に向つて、滿腔の公憤を洩ら

し、大阪の金持共、年來諸大名へ貸付候利徳の金銀並持米を莫大に掠取り、未曾有の有福に暮し、町人の身を以て、大名の家へ用人格等に取用ゐられ、又は自己の田畑新田等を夥しく所持、何に不足なく暮し、此節の天災天罰を見ながら、畏れも致さず……」と云つた。

その得失利弊は暫く措き、當時の町人が經濟力を背景として、武士階級を壓倒する勢を作つたのは事實であつた。花街も劇場も料亭も船宿も、すべて彼等が一番よき得意客であつたことは争はれぬ。『病間長語』の著者が「農は苦、商は樂」と云ひ、「商は都下にあつて……働き次第にて身代を能くすれば、貴人との交も成り、制度の及ぶこと、武家ほどになれば、何をしても大罪なければ、恐るべきにあらず。」と云つたのは故なきことではない。

化政期の文學が主として町人を取扱ひ、町人を主人公としたのは、封建治下にあつて、種々の制壓があつた爲めにもよるが、どの方面にも町人が物質的に享樂的に進出したからであつた。農民階級が存外、當時の作品に現はれることの少かつた理由も、實狀に照らして見て、直ぐにうなづける事と思ふ。町人に次いで、武士が傳奇小説の方面に出て來て、時々、主役を勤めたのは、社會階級の上に於て、概ね優れた知識階級でもあり、また四民の上位にゐるたからでもある。

第五章 近松・西鶴以後の京阪文學と江戸

文學との交渉 (上)

一 西鶴歿後の好色本及び教訓小説

化政期に於ける江戸文學の發達を考察するには、勢ひ、大近松及び西鶴のあとを受けた京阪文學と江戸文學との交渉を一瞥しなくてはならぬ。蓋し江戸文學の完成は江戸文學者それ自身の創造と工夫とによつてのみ實現せられたのではなく、小説戯曲の形式に於ても、描寫に於ても、内容に於ても、京阪文學から暗示を得たことが少くなかつた。即ち江戸の文學者は、京阪文學者の手によつて一應開かれた耕地へ新しく鋤鍬を入れ、そこに別種の風味ある作品を生産したのであつた。

近松、西鶴以後の京阪文壇は、目に立つ巨匠が出なかつたけれども、一方の旗頭となるべき人材が相當に現はれた。小説方面では上田秋成、江島其磧、戯曲方面では、近松半二、竹田出雲などがそれぞれ傑出してゐたが、他に健筆を以て目すべき作家が少くなかつた。それらの人々は、或は大近松や西鶴のあとを追ひ、或は怪異小説に、事實小説に、教訓小説に、氣質物に、讀本式よみほんの作品に、各、特色を發揮しようといふのであ

る。

當時の京阪文化は尙ほ江戸にくらべて優越の地位を占めた。殊に大阪は年を追うて繁昌を加へ、同地の懷徳書院に據る中井整庵、三宅石庵、京の仁齋のあとを受けた伊藤東涯らが學界に雄視し、國文學方面は既に述べたやうに、荷田春滿父子その他が京都を地盤として學徒を率ゐた。左様した文運の興起に伴ひ、京阪に居を占めた文壇人が少くない爲め、相當の文學的活動を示したのである。それに對して江戸では新文學起らんとし、まだ起り得ぬ過渡期に彷徨してゐた。

京阪では西鶴の作品が一般に根深い影響を小説の上に與へた。西鶴以後の作家は勢ひ彼れの模倣と追隨とに忙はしく、その間、次第に新しい傾向を造り出さうと力めた跡がいくらか見えるが、特に目立つものになかつた。それ故、西鶴の系統を追うた作品が可なりに多く出た。貞享四年には『浮世榮華一代男』、寶永五年には『風流吳竹男』、同七年には『風流永代男』などが上梓された。その他、『榮華述懷男』、『榮華遊二代男』といふ風にそれが『二代男』まで出たのは、西鶴模倣として、餘りに智慧のない行き方である。それから『色道修行男』及びその『後日男』なども出たが、比較的に見るに足るのは『浮世榮華一代男』である。(此の書には西鶴の序文に擬したものが付けてあるが、西鶴の作でなく、作者不明。)

その趣向は江戸生れの若い男が淺草觀音の境内にある業平の祠に詣でて、色道の好運を祈ると、ある日の夢に業平が現はれ、彼れに金銀珠玉を鑲めた花笠を授け、色男となるべき心得を教へる。それで彼の男は隠

れ笠の忍之助と名乗り、諸國に於ける町家や武家の女の性慾生活を見て歩くといふのである。西鶴の『一代男』と異つて、遊里の方面に筆を着けてゐないのが特色で、戀を得ながら、それを遂げない傍觀的態度なども作者が新しく案出したのであらう。が、描寫が皮相的で卑猥にわたるところがあつて、その當時、評判されたほどのものではない。

右の如き好色本のみならず、教訓小説の部類も、やはり、西鶴の追隨者が少くなかつた。西鶴が教訓の意を寓した『日本永代藏』や『本朝二十不孝』などは、露骨な説法が少く、おのづから、人を教へてゆく方法を採つたが、彼れの模倣者は、西鶴のやうに手際よく事を運び、人を描くことが出来ないで、概ね修身訓めいたものになつた。

それらの作品の中、主要なものは、北條園水の『日本新永代藏』、『武道張合大鑑』、月尋堂の『子孫大黒柱』、『今様二十四孝』、青木鷺水の『古今勘忍記』、花洛隱士の『立身大福帳』などである。月尋堂は前記のほかに『兄弟善惡車』などを書いた。彼れは封建道德の讚美者、支持者であつた。その代表作は、『今様二十四孝』である。

月尋堂が『二十四孝』を書いたのは、淺井了意の『大和二十四孝』、西鶴の『本朝二十不孝』から暗示を得たからである。そこに收められた二十四種の短篇中には、概ね犠牲本位の孝道が描かれてある。勿論、孝の犠牲となることは、場合によつて正しく認識せられるが、月尋堂は寧ろ極端に失した事例を描いた。或はそ

れによつて、讀者を感動せしめようとしたかも知れぬが、常識を離れた物語が時々目に付く。例へば親の貧苦を救ひたい一心から他人の委託金を費消したり、火事場泥棒を働いたりすることが描かれてゐる。それらは後になつて、當事者が罪をわびることにしてあるが、事實、孝の眞意義に觸れたと云へぬ。

けれども月尋堂は孝道に關する説話の上に何等かの變化を求めたために、左様したのかも知れない。『今様二十四孝』中で、比較的素直に出來てゐるのは、戀を捨てて孝に殉ずるといふ『千世に一夜の神鳴』及び或富豪の庶子に生れた棒手振の男が養家の恩に感じて、百萬分限の相続を思ひ切ると云つたやうな説話である。月尋堂の文章は西鶴の口調を眞似てゐるが、何れかと云へば流暢平明で、素より西鶴の如き精彩は殆ど見られぬ。唯無難だと云へば足りよう。それと共に彼れの作は短篇であるから読み易く、同じ勸善懲惡主義でも、道德至上主義でも、馬琴の或出來の悪い作品を読むよりは氣樂に讀める。そして馬琴が能く用ゐる怪奇、靈異などが、矢張、月尋堂によつて既に用ゐられ、火の玉が飛び出て、讐敵のゐるところを孝子に教へるとか、突如、鶴が現はれて人を驚かすとかいふやうな小細工が時々見える。

北條團水は西鶴の崇拜者で、西鶴の歿後、七年間、その廬を守つたと云はれる。のみならず、西鶴の筆意を得ようと苦心した様子が歴々見えるけれども、作家としては凡庸に近い。その佳作だと云はれる『日本新永代藏』は、大分理窟ほくて、西鶴の『永代藏』を模倣し乍らも、その長所に觸れず、またそこに彼れの個性の閃きが殆どない。『立身大福帳』は教訓を主として、藝術味乏しく、讀者に倦怠を與へる。が、『大福帳』と同

系統に屬する『子孫大黒柱』は稍優れてゐる。それは町人が致富上、種々の智慧を絞つたことを描いてゐるが、これを多種多様な世態の上に求め、中には、捨て難い趣を留めたものもある。篇中、「商人と屏風は曲らねば立たず」とか、「積善の家に喜び來り、借錢の家には懸乞來る」とか彼れ一流の警句を挿入してゐる上に團水の才氣が窺はれる。

青木鷺水も亦團水と同じく、京都出身で西鶴の崇拜者で、團水とひとしく俳諧に通じてゐた。彼れの『古今勸忍記』は、淺井了意の『勸忍記』に模倣した修身談で、説話の上に讀者の感興を催さしめようとした苦心のあとに見える。例へば非常な短氣な主人が誤つて罪なき侍女を斬り、あとで事情を知つて狂死するか、ある男が熊に出逢つて、喰ひ殺されようとした刹那、熊の罌丸に噛み付いて、辛くも一命を取留めたといふやうな類である。が、その叙述は平板で、生彩に乏しい。

當時の教訓小説は、大體以上の如くで、これ又西鶴の教訓物以外に新しい世界を開いたとは見えぬ。文章も全く西鶴風の長所を没した形で、唯わかり易く、平凡になつたといふよりはかはない。要するに、西鶴よりも材料の範圍をひろげたといふ點が取るべきところであらうか。その後、教訓小説は、寶曆に及んで、再び勃興し、丹羽栲山、増穂殘口などの作家が現はれたが、月尋堂などよりも教訓が露骨になり、『今様二十四孝』ほどの作品も出なかつた。

二 事實小説の實現

以上の作品のほかに、これ又西鶴の影響下にありながら、何等か新しい境地を開かうとした事實小説及び怪異小説などがある。西鶴ほど非凡でない普通作家の空想や經驗、見聞にもとづく作品よりも、却て著名の事實として眼前に現はれ、或は作者の呼吸した時代に傳へられたものを一篇に纏める方が遙かに興味深いことがある。現時の文壇で、小説が行詰つてゐるに際し、事實小説が一時流行したのも左様した事情によるであらう。西鶴以後乃至同時代の作家が、西鶴の世界以外にいくらか新味を示さうとするには、勢ひ事實本位の小説を書かなければならぬのも、餘義なき事情であつたらう。

この方面に於て、活動した作家には、西澤一風（九左衛門）を始め、都の錦、錦文流などがある。西澤一風は、後に出了た西澤一鳳とまぎれ易く、また彼れの同業（書肆）たる正本屋九右衛門とも混同され易かつた。かうした瑣事は、どうしても宜いやうだが、序に一言して置く。一風は天保嘉永年間の作者で、通稱上、正本屋九右衛門と同視するものがあつた爲め、ともすると一風と混同され易かつた。が、これは別人である。また正本屋九右衛門は、一風と同様、大阪で書肆を開いてゐるが、彼れは京都の正本屋山本九兵衛の出店であつた。「左」と「右」の相違だが、九右衛門は、一風とは別人である。この事は、『上方文學と江戸文學』（藤村作氏著）に考證せられてゐる。

それから一風の作には、興志、朝義、集樂軒などの名を見るが、『達髮五人男』、『野傾友三味線』を除くのはかは、大體、一風の作と見て差支へないやうである。一風は書肆であると同時に作者でもあつた。この點、自笑、自積に似てゐるが、晩年は小説のほかに戯曲をも書いた。かく多能な彼れは事實本位の小説に想ひ到つて、『新色五卷書』、『傾城武道櫻』、『亂脛三本鎚』などを書いた。即ちその内容は心中物、仇討物、町人物に亘つてゐる。當時の事實小説は大體、この三つの範圍を出なかつた。

一風の心中物は『新色五卷書』の中で、三勝半七及びお吉、十右衛門のことを叙述してゐる。前者は『心中茜の染衣』と題したが、紀海音の『笠屋三勝二十五年忌』、竹本三郎兵衛の『艶姿女舞衣』、春草堂の『女舞劍紅楓』などに先驅して出た。『新色五卷書』は一風が一番はじめに發表した小説で、彼れが眞先に三勝半七に關する事實小説を書いたのは、彼れの機敏な性質によるのであらうと思ふ。が、作品としては多く云ふに足らなかつた。

一風の仇討物には、赤穂義士の復讐を書いた『傾城武道櫻』がある。それは義士を取扱つた小説として最も早く出た一つであるが、これを遊女に結び付けた爲め、餘りに遊戯氣分が多過ぎた。一體、左様した傾向は、ひとり、この作に留らぬ。同じく義士を題材とした『傾城播磨石』、『傾城傳授草子』なども、やはり、遊戯的だが、作者不詳の『播磨石』は割に眞面目に赤穂義士の復讐顛末を事實によつて描き、彼等の精神を傳へたが、文學的價値に乏しい。

それから一風以外、仇討物として、都の錦の『東海道敵討元祿會我物語』及び錦文流の『熊谷女編笠』などがある。都の錦と錦文流とは同一人だとする説があるらしいけれども、事實、別人だ。それは饗庭篁村氏が明治二十九年六月の『早稻田文學』に發表した都の錦の訴狀（寶永元年霜月（陰曆十一月）十八日、獄中から官府に差出した）によつて明白になつたのである。

それによると、都の錦は播州の出身で宍戸鐵舟と云ひ、二十一歳の時、京都に上り、伊藤仁齋の門に入つたとある。ところが、錦文流は大阪人で、座摩神社附近（現今、東區北久寶寺町附近）に住んだと傳へられるから、都の錦とは別人だ。都の錦は一風と列んで、西鶴から其磧へ移る過渡期を賑はした作家で、相當に國語、漢文の素養を有し、一風變つた人物だつた。壯年時代に放蕩のため悪事を働き入獄したが、作家として相應の腕を持つてゐた。

彼れの處女作『元祿會我物語』は伊勢龜山の仇討を描いた作品である。事實は濱松城主青山因幡守忠重の家來石井源藏、同半藏が、當時、板倉周防守重冬の家來、赤堀水之助を討つて、亡父宇右衛門及び亡兄三之丞の仇を復したといふのである。作者は大體、事實によつて、多少の想像を加味し、平明、流暢な筆で、相當讀めるやうに人と事とを表現した。彼の馬琴が何の感興もなしに書いた『復讐奇譚稚枝鳩』などよりも、面白く讀める。

次に近松巢林子が取扱つた女敵物、『堀川波の鼓』を小説化したのは錦文流の『熊谷女編笠』で、當時

同じ題材を扱つた作に、森本東鳥の『京縫鎖帷子』がある。錦文流の文章は、都の錦に能く似てゐて同一人の手になつたかと思はれるが、都の錦の方が、いくらか氣が利いたところがある。大體の出來榮えに於て『元祿會我物語』の次に置いてよからうが、文章全體に亘つて生氣に乏しい。

同じく近松の『槍權三重帷子』と同一の材料を取扱つたものに西澤一風の『亂脛二本鎧』を始め、作者未詳の『雲州松江鱸』、『女敵高麗茶碗』などがある。一風の作は戯作者風に軽い調子にすぎた點はあるけれども、巧みに情景を浮べ出してゐる。

それから町人物として、榮華生活及びその没落を主題としたものに、西澤一風の『風流今平家』、錦文流の『棠大門屋敷』などを始め、大黒屋宗善、梶屋久右衛門、茨木屋幸齋らの事を描いた作品が出來た。『風流今平家』は元祿頃、奢侈のため没落した富豪のことを平家衰亡史中の人物に比して描いたところに、作者の手前味噌があつた。『棠大門屋敷』は淀屋辰五郎のことを描き、近松の『淀鯉出世瀧徳』のあとを追うたとも云へるが、無論、錦文流の方は、事實を主として、近松の如く材料を詩化してをらぬ。

その他、一風は『熊坂今物語』に於て、熊坂三郎、同四郎兄弟のことを書き、同じく彼れの作物と見なされてゐる『達髮五人男』で、神島庄九郎、雁金文七、ほての市右衛門、庵の平兵衛、極印千右衛門など、所謂「浪華五人男」と呼ばれる俠客を描いた。また都の錦は『沖津白浪』で有名な盜賊の生涯を書いた。それらは作そのものよりも、内容となる事實が、先づ讀者の興味を惹く素因を持つてゐるのである。北條團水の『畫

夜用心記』は少しく毛色が變つてゐるが、支那の『杜騙新書』式に、詐譎、騙盜に關する實話二十六種を收めてゐるのも亦事實小説の一體として見ることが出来よう。その中にある「子を思へば晝の闇」の一章は萬治二年刊行の『私可多話』(中川喜雲作)卷三の小話を作り直したのであるが、興味多きところから、尾崎紅葉氏が『茶碗破』と題する新講談で、新たにそれを取扱つたことがあつた。

要するに、事實小説は、藝術味に乏しく、餘りに散文的になり過ぎたが、事の奇により、或は實感に裏付けられた生々しい事實によつて、一部の讀者に喝采せられた。けれどもそれは、新生命に乏しかつた。後來、江戸に於ける仇討文學は、茲に暗示を得たのであらうと推察される。

三 怪異小説と支那趣味

事實小説にくらべると、多少興味が深いのは怪異小説である。この種の作品は支那が本場で、材料をそこから採り來る便宜があつた。それ故、支那のロマンスとの交渉が相應にある。普通、江戸時代に於ける最初の怪異小説『伽婢子』も明代の文語體小説『剪燈新話』(瞿佑編著)から多く材料を仰いだ。のみならず、江戸初期に入るに先立つて出た『奇異雜談集』も亦やはり『剪燈新話』などから材料を得た。

かの『伽婢子』(寛文六年刊行)の編著に當つたのは、瓢水子松雲で、淺井了意と同一人だといはれる。了意には『むさしあぶみ』、『江戸名所記』、『堪忍記』など二十餘種の著述があるが、或は怪談物の瓢水子松雲と別人でなからうかと云ふ説もある。『江戸時代戯曲小説通志』(雙木園主人)の著者は、異名同人とし、淺井了意、別號を松雲又瓢水子と云ふ。と記した。藤井乙男、水谷不倒二氏も亦同説らしく、現在のところ、松雲を別人だと主張するものがない。唯柳亭種彦は淺井了意といふ同名の人物ありとし、一人は僧、一人は俗人だとしたが、意味明瞭を缺くために、その話を聞いた齋藤月岑(『武江年表』著者)は多分、僧の方の了意と専ら著述したのであらうと推測してゐる。

右の問題は特に解決せねばならぬわけではないから、茲には瓢水子松雲と了意とを同一人として置く。了意が『伽婢子』の主な材料を『剪燈新話』に仰いだのは、天文年間、中村豊前守の子息といはれる人の手になつた『奇異雜談集』に教へられたのでなからうか。同書には『剪燈新話』中の短篇三つを譯し、且つ『新渡に剪燈新話といふ書あり、奇異なる物語をあつめたる書なり。今二三ヶ條を取つて、こゝにのするなり。剪燈とは蠟燭の心をきるなり、夜ふくるまで語る心なり。新話とは舊剪燈夜話といふ書あり、事ふりたる故に、新しき事どもを語る故に新話といふなり。』と説明してゐる。その譯述するところは、左の三篇である。

金鳳釵記(剪燈新話)……姉の魂魄、妹の體をかり夫に契りし事(雜談集)

牡丹燈記(同上)……女人死後男を棺の内へ引込みころす事(同上)

申陽洞記(同上)……弓馬の徳によつて申陽洞に行き、三女をつれ歸り妻として榮花を致せし事(同上)

以上によると、『雜談集』が近世怪異小説の先驅を爲したことがわかる。蓋し『剪燈新話』は天文年間、

日本に渡來し、慶長活字版に翻刻されたから、了意もこれに眼を留めて愛讀したにちがひなかつた。彼れは國文の素養も相當あつた上、漢文にも通じ、博識能文であつたので、『剪燈新話』の翻案に當るには最も適合した資格を持つた。

彼れが支那怪異小説を十分咀嚼して、これを日本化し、地名、人名その他をすつかり日本にあてはめた手際は、當時のものとして最も鮮かだつた。『伽婢子』には「富貴發跡司志」、「鑑湖夜泛記」の二篇を除くと、『剪燈新話』の諸短篇が、すつかり翻案されてある。それが當時の讀者に清新、怪奇の快感を與へたことは、一般の歡迎が旺んであつたことでも知れる。彼れはそれにより、一躍して京阪文壇の花形となつた。爾後、久しくその模倣文學が頻出して、怪異小説の流行を來たしたのは當然のことであらう。

それに『伽婢子』は、後の作家に向つて、小説の材料を供給したり、或は影響を與へたりしたことも可なり程度に達したであらう。上田秋成の『雨月物語』も、茲に材料の一部を得たらしい。同書卷二に收められてゐる「淺茅が宿」は了意の「遊女宮木野」(愛郷傳)によつたらしく、同卷卷三の「佛法僧」は了意の「幽靈諸將を評す」(龍堂靈會錄)に暗示を得たやうだ。また同じ卷の「吉備津の釜」の後半は、「牡丹燈記」に似てゐるとすると、『伽婢子』の影響が相當にあつたと見なければならぬ。のみならず、了意の支那文學翻案は、やがて後に及んで、岡島冠山、岡白駒、近路行者らの如き、支那文學の紹介に努力する人々を出し、彼れが文化文政期の小説に餘程影響した。それは歐米文學が現代文學に至大の感化を及ぼしたのと同じ趣だつた。

右の如く、了意の『伽婢子』は創作ではないが、翻案として相當巧妙な技倆を示したので、天和三年には、それを摸した『新御伽婢子』(洛下寓居著)が出た。了意も亦興の湧く儘に『剪燈餘話』などから材料を得て『狗張子』を書いたが、それは彼れの歿後、即ち元祿四年、林文會堂——書肆兼作家——から出版された。西鶴が怪異小説に筆を染めたのも、この頃の事で、恐らく『伽婢子』の成功に刺戟されたからであつたらう。彼れは貞享二年に『諸國咄』(一名、『大下馬』)を、同四年に『懷硯』を公にした。

西鶴は、それらに於ても、彼れの際立つた個性を作品に裏付けたが、『奇異雜談集』その他、支那小説から翻案するところが多かつたのは了意らに異らぬ。『諸國咄』中の「残るものとて金の鍋」は、支那六朝時代の小説『讀齋諧記』(吳均著)中の怪談を翻案したのである。創意ある西鶴にしても、流石にこの方面の開拓には、材料を支那に仰いだのであるから、西鶴の下風に起つた人々も、怪異小説では自家の創造によるよりも、翻案的手段によつたのは當然で、文會堂の『玉櫛笥』、『玉簪木』なども、矢張、支那怪談の譯述乃至翻案に過ぎぬ。

それらのあとを受けて、「元祿十五年には、都の錦の『御前伽婢子』が現はれ、次いで青水鷺水の『御伽百物語』、『近代因果物語』が出で、更に北條團水の『一夜船』、『怪談諸國物語』などが出た。他に増田團水の『御伽人形』、落月庵操庵の『怪談乗合船』なども公にせられたが、以上何れも寶永、正徳年間のことである。

都の錦の『御前伽婢子』は了意の模倣であり換骨脱胎である。彼れは力めて表面を糊塗してゐるけれども、その痕跡歴々たるものがある。鷺水の『御伽百物語』は叙述平板で、潑刺味がないけれども、凡作と貶すべきほどのものではない。その中に收められた「繪の女人に契る、附たり江戸菱川の事」、「宿世の縁」は小泉八雲氏の『影』のうちに譯せられ、前者は『衝立の女』、後者は『辨天の同情』と題されてゐる。

その他の作品については云ふほどのことはない。唯林羅山（この書恐らく羅山ではなく、大通事林道榮の撰述でなからうか。彼れは支那小説を能く讀んだ）の作と傳へらるる『怪談全書』（元禄十一年）のみ多少異色あるものだと云はば云へよう。それは後に出る怪異小説の資料を供給した上に一つの意義があつた。

この書は正直に一々出典を示し、支那の『太平廣記』及び『古今説海』から多く材料を蒐集してゐる。その書き方は藝術味に乏しい代りに、些の嫌味なく、原作の梗概を略ぼ傳へてゐる。曲亭馬琴の如きは、本書から聊か暗示を得たと云はれる位で、『馬頭娘』から『八犬傳』の伏姫を思ひ付き、『淳于棼』から『南柯夢』に想ひ到つた。のみならず、上田秋成の『雨月物語』に於ける「夢想の鯉魚」は本書の『魚服』から、近路行者の『繁野話』の「白菊の方、猿掛の岸で怪骨を射る話」は「歐陽屹」から思ひ付いたらしい。以上はその一端であるが、『怪談全書』は尙ほ他の作家にも、相當材料を供給したであらうといふことが推想される。但し本書が林羅山の作となつてゐるのは著者の假託であらう。

右に擧げた『怪談全書』と共に尙ほ聊か異色を帯びてゐるのは、山岡元隣の『古今百物語評判』（貞享三年

刊行）である。それは怪異の現象について評論したもので、元隣とその子元想の共著であらうとも云はれる。元隣父子には、現代科學の如き學問の素養なく、心靈學と云つたやうなものも知らう筈がないので、支那流の陰陽五行説などによつて、出鱈目の評言を加へたところもあるが、時には自家の見識を發露して、考察の必ずしも凡庸に墮せぬ點を示した。例へば、「哲人は狐にばかされずと云はゞよし、哲人の前に狐化せずと云はゞよからず。これ眞人は火に入つて焼けずと云はゞよし。眞人の前に火燃えずと云はゞ、非なるが如し。燃えぬは眞人の徳、化くるは狐の術、ばかされぬは哲人の徳なり。」と云つてゐるなどが、それである。この書には、怪異に屬すべきものとして、怨靈、天狗、雪女、山姥、野衾、うぶめ、はた郎、貧乏神、釣瓶おろし、垢ねぶり、見越入道、こだまなどを擧げてゐる。

殊に興味があるのは、著者が脱線して、役者、僧侶、傾城迄も、人を誑す怪物だとしてゐることだ。左様した見方をすれば、世上怪ならざるはないと云ふことに迄延長されるであらう。尙ほ著者は「怪異は支那の如き遠い外國にあつて、日本には少い。」といふ風に考へてゐることも、呑氣過ぎてゐる。が、そこにのんびりとしたところがあつた。

それから正徳以後、寶曆頃迄の作としては、享保十九年に『御伽厚化粧』（天齊）、元文五年に『御伽空穂猿』（摩志田好話）、延享三年に『御伽夜話』（安勝子）、寛延三年に『怪談登志男』（靜觀坊）、寶曆元年に『古今百物語』（説山）、『當世百物語』（烏有庵）、寶曆七年に『諸國怪談帳』（作者不明）などが出た。以上のうち、『御伽厚

化粧』は主として動物に關する怪異を中心として十五種の奇談をあつめ、『御伽空穂猿』は主として猿に關した怪談十餘篇を収めたところに、讀者の好奇心をそそるに足るものがあつた。

それ以後に現はれた近路行者の『英草紙』(寛延二年)、『繁野話』(明和三年)、伊丹椿園の『唐錦』(安永九年)などは、別に秋成の『雨月物語』に言及する時に述べる事とする。要するに、怪異小説は支那文學の翻案によつて次第に展開し、流石の西鶴さへ想ひ及ばぬほどに流行したが、概して作者に人生的思索がなく科學的精神もなく、更に著しい主觀の投影もないために、ともすると、御伽話式になり、唯事柄の面白味によつて、人を喜ばせたに留つた。が、兎も角、當時の文壇を賑はすに足りたのである。

四 八文字屋物の作家、江島其磧

京阪文壇が以上の如き趨勢を辿つた時、新たに擡頭して、西鶴のあとを追ひながら、西鶴の流風にのみ固着せず、短篇小説の上に新生面を開いたのは、八文字屋物と呼ばれる江島其磧の作品であつた。西澤一風の如きも、好色本の範圍に留りながら、何等か新境地を開かうとして、『御前義經記』(元祿十三年)を書き、當時の新舊好色本の諸傾向を一つに取入れたり、歌舞伎趣味を添加したりしたが、矢張、小刀細工だらけの調子の低いものとなつた。左様した時代に、幾分でも、西鶴の小説外に、自己の領土を新たに作つたのは、其磧の文學的才能が、凡庸作家を抜いてゐた爲めであるが、八文字屋自笑との提携がまた彼れに幸ひしたにもよる。

自笑は八文字屋二代目の主人で、享保期に流行した浮世草子——當時の世相を描いた小説——を獨占的に出版することによつて、相應の成功をした。彼れは寛文初年の生れで、書肆として活躍し始めたのは、その二十二歳の頃であつた。當時、各書肆で役者評判記の類を發行してゐたが、その多くは内容、外形共に殆ど見るべきものがなかつた。自笑はこの方面に於て、新機軸を出さうと思ひ、最初出版する原稿を江島其磧に囑し、元祿十二年三月、『役者口三味線』と題して出版すると、内容、外形共に在來のものよりは、ずつと優れてゐるので忽ち成功した。爾來、正徳四年頃迄、續々この種のを毎年三冊以上、出版したのである。要するに、それは自笑、其磧の提携から出來た結果にほかならぬ。

元來、其磧は最初、小説家として起たうとしたのではなく、文才があるにまかせ、道樂半分に筆を執つたに過ぎぬ。文學好きで相當の教養があつた彼れは西鶴に心酔し、また松本治太夫の爲めに淨瑠璃を作つたが、この方面は彼れの長所でなく、これといふ收獲もなかつた。それで方向を一轉して、『役者口三味線』を書く、豫期以上に成功したので、次第にこの方へ心を傾けた。『口三味線』は彼れの三十三歳の執筆で、父祖以來、誓願寺門前で餅屋をして積んだ巨萬の富も、この時分、彼れの放蕩のため、大半を失つてゐたらしい。が、尙ほ家柄の上から遊戯三味の心持で、いつも自分の名を出さずに書いたのである。

ところが、元祿十三年、彼れの評判記物『萬年曆』を出すと、江湖の歡迎を得たので、事を見るに機敏な書

肆、正本屋九兵衛は、苦心を重ねて、その作者が其磧であるのを確め、『役者一挺鼓』を書いて貰つて公刊した。それと見た自笑は吃驚して、其磧を説き付け、正本屋の方は其磧の知人、圓水に執筆させ、其磧と八文字屋とは尙ほ固く提携を續けてゆくことにした。左様した情勢は其磧の創作熱を刺戟したらしく、始めて浮世草子『傾城色三味線』を元祿十四年に上梓した。それは行詰つた好色本の上に確かに一道の微光を投射したのである。

小説の外題に「傾城」の二字を冠したのは『色三味線』を以て、その最初とする。「好色」の二字は餘りに露骨にすぎるので、それに代へるべく「傾城」とした。爾來、好色本系統のものは争うて「傾城」の二字を外題の上に置く事となつたが、一方、都の錦が「風流」の二字を外題に冠したことも流行した。都の錦は日本神代の歴史を俗譯して『風流神代卷』六冊（元祿十四、十五年引續刊行）と題し、『源氏物語』の『桐壺』、『帚木』の卷を俗譯して、『風流源氏物語』とした。序に記す次第である。

其磧の『色三味線』の賣行きがよかつたのは在來のやうに遊里細見の附録として、花街の遊び振、傾城の心意氣などを描いたによるのであらうが、一つは、西鶴を模倣し乍らも、(一)文章を西鶴よりも、わかりよくして委曲を盡し、(二)趣向の上に複雑味、奇抜味を加へたにもよるであらう。それは京之卷、大阪之卷、江戸之卷、鄙之卷、湊之卷の五冊から成り、卷頭に吉原、島原、新町、榎木町、室津などの遊女の名寄を掲げ、それになむ短篇小説を四五篇乃至六篇ほど添へてゐる。即ち花街案内と花街小説との綜合見たやうなものだつた。

その趣向の具合は第一卷、京の卷に於ける第一話に徴しても、それとわかる。富家に生れた鎌倉屋の源が兩親なき後も商賣に出精して、八百貫目の金を二千貫目に殖やした折柄、豫ねて彼れと快からぬ男が、それを嫉み、傾城買の心玉をその門口へ捨てる。心玉が源の身内に入ると同時に、源は心機一轉、世の無情を感じて忽ち島原通ひに凝り出した。かうして殆ど財産を蕩盡した頃、心玉が彼れから離れると正氣に歸つたが残るは借金のみだつた。それで一計を案出して逃れ、江戸へ出て五年ばかり精出した結果、借金を返して富める身となつたといふのが一篇の結構である。傾城買の心玉を持出したところに其磧の働きが見える。

同じ卷の第二話「花を繕ふ柏木の衣紋」で其磧は西鶴の『五人女』の一篇を模倣し、同書中の父が室津の遊廓で清十郎を勘當するのを一寸變へて、京の富豪半六が廓での放蕩最中、父が酒樽の中へ隠れて來て勘當を申渡すといふことにした。そこに其磧の工夫があつたと云へるが、少しく細工に過ぎた。それよりも第三話「花崎實のる玉の輿」の方が結末に味を見せてゐる。一人の金持が太夫花崎を身請しようとする折、その間に起つた太鼓持彌七に慾があつて若し巧みに双方を操れば過分の利を得たのに、正直者の彼れは一方の金持が急に姿を隠して京を去つたことを競争者に告げた爲め、家一軒貫ひ損ねたといふ愛嬌話である。

以上の如く、其磧の『色三味線』は西鶴の影響下にありながら、趣向、文章の上で、いくらか彼れの工夫を示したことによつて、行詰つた好色本の上にかすか乍ら、一筋の道を開いた。それを土臺に、彼れは正徳元年、更に「色道大全」の四字を冠した『傾城禁短氣』を公にし、無類の喝采を得たのである。

禁短氣といふ三字が既に洒落れてゐる。當時の佛教談義流行にちなんで付けたのだが、それは「短氣を禁ずる」の意味にも、讚嘆の意味にも、談義の意にも解釋される。そこにもう洒落氣が横溢してゐる。かうして其磧一流の色道論を佛典の口調に擬して、眞面目らしく述べたところに、一種の可笑味がある。

當時、京都あたりでは、遊蕩兒の間に女色と衆道の優劣論が他愛なく繰返されたかと思ふと、他方では佛教談義の類ひが流行したらしく、寺院で法筵を開いた時、信者の自由質問を受けて、布教僧がそれに答へる風習が行はれたらしい。由來、京は寺の都、佛教の都とも云はれる位であるから、其磧は以上の様子を能く知つて、『傾城禁短氣』に活用したのである。

それで『禁短氣』は全體が教訓の形式を執り、眞面目くさくしてゐて、その實、洒落れのめし、佛教各宗は勿論、その祖師といはるる人も色道を説くために戲謔の材料に用ゐる、それによつて、讀者を哄笑、微笑へ導くと共に、その好色感を刺戟しようとした心組が見える。其磧は淨土宗論の形に託したり、佛典の形式を借りたり、説法の趣に近似したりして、彼れの見聞、體驗による色道觀を説き、粹の道を述べる。

今日から見ると、左様した形式は、いかにも馬鹿らしいが、當時の讀者は、その眞面目らしい戲謔を喜び、其磧一流の色道觀——衆道よりも女色が優つてゐるといふ説——に共鳴し、或は遊女の手管を微に入り、細に入つて、問答體に記したあたりに會心の笑を催したらうと思ふ。

兎も角、馬鹿らしいながらも、其磧の説くところは、確かに人情に觸れてゐるし、説き方も亦巧みだ。其磧

ほどの遊蕩に徹底した上加ふるに彼れほどの才筆を持たねば書けぬらしく思はるる點に、おのづから獨自の趣が見ゆる。『禁短氣』が非常の好評を得て、粹道の經典視せられ、その次篇、三篇が明和二年（作者は二世自笑）に出たのも、自然、讀者の要求が、然らしめたものと察せられる。津田左右吉氏が『文學に現はれた我が國民思想の研究』で頭から其磧を輕視し、『禁短氣』を靈賞的に讀みもせず、「西鶴の模倣」と一概に斥けてゐる如きは、作者に對して、聊か不親切だと云はねばなるまい。

これは獨斷かも知れぬが、江戸で流行した洒落本は、『禁短氣』などの影響から生れたのでなからうかと思ふ。支那流の『開卷一笑』とか、『板橋雜記』の類にその淵源を求めずとも、手本は『禁短氣』に於て、もう具體的に示されてある。唯それが「粹」を説くに對して、洒落本は「通」を説くといふ丈の相違だ。のみならず、洒落本中で最も古いといはれる『月花餘情』、『聖遊廓』などが、其磧文學の影響下にあつた大阪から出たのも成程とうなづかせるではないか。その作者が漢文趣味の深いことを匂はせてゐるといふので、これを藤井博士の如く、『開卷一笑』、『板橋雜記』の方へ持つてくるのは誤つてゐる。この點、私は『江戸文學研究』（藤井乙男氏著）の著者に教へを請ひたいと思ふ。

五 其磧の氣質物

其磧文學のうちで『禁短氣』よりも藝術的に一步立優り、曲亭馬琴が『著作堂一夕話』中で殊に推獎した

『風流口三味線』がある。それは寶永初年頃の作だと推定せられる。本篇も西鶴的印象を留めてはるるが、まだ西鶴が手を着けなかつた長篇を書き、一種の人情本とでも云ふべきものを示したところに、一つの意義が認められる。即ち複雑な筋立と委曲を盡した文章によつて、西鶴とは聊か異なる味を出さうと力めたのであつた。

先づそこに展開せられた和甚といふ男の半生に讀者は心を惹かれる。和甚は放蕩のために勘當せられてゐるうち、叔父に継り、三十貫目の持參金で京の富豪の家に聳入りをした。が、その富豪の家は長子の放蕩によつて大半、財産を消盡し、兄の勘當されたあとを受けた弟は家出したのである。和甚はそれと知らず、その美しい娘と睦じく暮すうち、馴染の太夫高橋を請け出さうとし、内藏の銀箱十個を調べると一文もない。和甚は驚いて面目上、家出し、途中、非人を殺して彼れの衣を着せ、表面、自殺と見せて藤の森の隠家に潜んだ。その留守に彼れの妻は悪手代に欺かれて島原に賣られ、琴浦と名乗つたが、和甚の従弟四五平が彼の女に心あつて身請し、藤の森を訪うて、和甚に逢ふに及び、手代の悪計が知れる。その後、四五平は琴浦を元の如く、和甚に渡したが、和甚は生活上の苦痛から妻と共謀して悪事を働かうとした事が露顯し、罪に落ちようとした處へ、和甚の實父卒去により、巨萬の富を継ぎ、四五平と共に、榮えた。といふのが一篇の結構である。多少、不自然の嫌ひはあるが、波瀾屈折によつて面白く讀ませる丈の用意はあつた。

その他、音羽峰右衛門とその妻とが双方、敵討に志してゐたことを結婚後に知り、妻が助太刀を頼んでも、

峰右衛門が先づ自分の敵討を先きにしうとして葛藤を生ずるといふ事が、軽い可笑味を以て描かれてゐるのもある。『色三味線』の單なる挿話から、かうした物語へ轉じたところに其積の進歩があり、藝術的展開があつた。

が、結局、其積獨自の面目を比較的鮮かに現はしたのは、その氣質物である。これとても、彼れの創造ではなく、既に西鶴が『五人女』（後、享保五年、『當世女容氣』と改題されて出版）及び『武家義理物語』、『日本永代藏』などで、武士、町人、婦女などにわたり、その氣質を描き出してゐた。が、西鶴のものは必ずしも氣質のみを目がけず、そこに種々の要素も加はつてゐる。ところが、其積はその氣質——殊に悪習、惡癖を擴大的に映し出して、聊か漫畫化さうと試みた。そこに一つの特色を帯びてゐる。

一體、氣質は必ずしも悪習、惡癖に限られてはゐない。よき風習、よき癖も、亦氣質を構成する要素であるが、後者は讀者側に於て、比較的に興味を持たぬ。即ち模範青年とか典型的女性の鑑だとかいはれる側には共鳴せず、今日いふところの不良青年、モダンガールと云つた方に讀者の興味が、おのづから集中する。そこが人の弱點であるが、其積は能くこの呼吸を知つて、老人、青年、娘、親仁、商人、手代などの悪い側に屬する癖を擴大的に描き出した。そこに讀者を破顔一笑せしめる魅力があつたと云へよう。

彼れの最初の氣質物は寶永六年、名優坂田藤十郎が卒去した折に際物として書いた『寛濶役者容氣』だとせられる。が、彼れの氣質物の存在が正確に一般に認められたのは、『世間子息氣質』（正徳五年刊行）からだ

つた。私は曾て拙著『日本近世文學十二講』のうちで、其磧の氣質物に言及し、「蓋し彼れは、西鶴の好色本以外に出ようと焦慮すると同時に、彼れの眼に映つた人情の表裏を描かうとして、息子、娘、老人、手代などの方面に材料を求めた……勿論、彼れは將軍家繼、吉宗らの時代に於ける風俗矯正のことなどに影響せられて、時代の傾向が自然、萎縮的になり、教訓風を求むることとなつたのに適應してゆかうとした心持が、氣質物に出てる。」と云つたが、それは少しく藪尻みに近いにせよ、教訓を振りかざして、氣質物の上に新展開をしようとした氣組は確かにあつたらうかと思ふ。

其磧の『世間子息氣質』は在來、好色本その他に描かれた子息氣質を一つに綜合大觀し、更にこれを殊別に分けて、その一々の癖を描き出さうとしたところに一つの趣向があつた。即ちいろいろの癖を持つ子息をいろいろの方面から眺めて、これを一纏めとして讀者の前にひろげ出したといふのが新しい思ひ付きにちがひなかつた。以上の氣質物も亦この立脚點を占めることによつて、存在の意義を確保したのである。

それで『子息氣質』は、目先きの變つた作として面白く讀まれるが、誇張の多いところ、現實よりも寧ろ空想で造りあげたと思はれる節が往々見える爲めに、其磧その人の氣分に同化しないと、興味を薄くする嫌ひがある。左様した趣は、『娘容氣』(享保元年刊行)の上にも見られる。それに教訓めいた言葉の多きに過ぎるのも亦煩はしい。ところが、『浮世親仁形氣』(元文元年刊行)のみは、其磧が漸くこの方面に於て筆馴れがした結果か、それとも教訓的臭味から漸く離れた爲めか、一番、無難に讀まれる。

それは比較的素直な筆で、老人氣質を各方面から描き、例の誇張はあつても、『子息氣質』や『娘容氣』ほどに甚だしくない。一つは硬化した老人には、いろいろの癖が多い爲めでもあらうし、頑固、保守、偏屈などに傾き易いところが、自然ある爲めにもよらう。即ち空想を主として造りあけずとも、現實上にそのタイプを見出すことが、左迄むづかしくない故に、其磧も存外、描き易かつたらうし、これまでの經驗にも助けられたらう。かうした結果、『親仁形氣』は相當に見られる。それには、元氣で食を樂む癖ある老人、相撲を樂む強力な親父、金を樂む高利貸の老人、殺生を喜び佛教を嫌ふ老爺、踊を樂む子供自慢の親父と云つた風いろいろの老人を描いてゐる。異色があるのは、「飛行を樂む仙人親父」で無論、空想の産物乍ら、黄表紙趣味が、ちらりと浮んでゐる。尙ほ其磧の作として、『役者不斷容氣』、『世間手代氣質』、『商人世帯氣質』などが享保から元文元年の間に出た。

其磧の氣質物が一般に歡迎せられたことは模倣した作品の續出してゐることでもわかる。上田秋成の如きも、和譯太郎の名で『世間妾形氣』を書き、多田南嶺も『世間母親容氣』を書いた。殊に永井堂龜友は明和から安永にかけて、九篇の氣質物を出し、それと前後して、八文字屋自笑の『世間長者氣質』なども出た。尙ほ他にも諸作家の手で七篇ばかり出てゐる。

第六章 近松・西鶴以後の京阪文學と江戸

文學との交渉 (下)

一 其磧が開拓した文學上の領土

以上、擧げたほかに其磧の作品として尙ほいろいろの意味で、見逃せぬものが二三ある。それは傾城物の脈を追うた『魂膽色遊懷男』、『通俗諸分床軍談』、『商人軍配團』などで、いづれも正徳四年頃の作だと云はれる。作品としては、西鶴の『日本永代藏』を模倣した『商人軍配團』が優れてゐる。『軍配團』の三字は、その時分『三國誌』、『漢楚軍談』などが流行したのにちなんだもので、軍書めかした外題が一部に行はれたのである。

一體、この方面は其磧の得意としたところではなかつたが、當時、八文字屋自笑と不和になり、對抗してゐた時代だから、何か目先きを變へた作を出さうとして、『商人軍配團』を書いたものであらうと思ふ。勿論、この作には西鶴の『本朝二十不孝』の一部を模倣したやうな、氣まついところも見えぬではないが、結構上確かに苦心したあとがわかる。即ち相反するものを對照せしめたあたりが、彼の思ひ付きだつた。例せば、貧乏神が入り込んだ家は衰へ、福の神が舞ひ込んだ家は、貧乏から一轉して金持になる。目出たいことが重つた家は却て祝ひ事のため身代を減らすから、此の上目出たくないやうにと恐慌する。それに對して、一族に不幸があつて涙の乾く暇がないところは、死者の遺産を續々貰ふ上に物見遊山を遠慮するため、物的餘裕を生じ、意外に金持になると云つた調子だ。その書き方も流暢で氣が利いてゐる。

それから『魂膽色遊懷男』は嬰粟人形のやうな小人が或人の懷に忍びこみ、到るところ、閨中の秘を探つたといふ黄表紙趣味に其磧の色合を示した。『通俗諸分床軍談』は傾城遊びの秘訣を説いた點で、『禁短氣』と變らぬが、篇中の人物を『漢楚軍談』中の人に見當てて、粹の象徴たる高惣（高祖）、野暮の象徴たる香宇（頂羽）を取巻く連中を一々、『漢楚軍談』にあてはめたあたりに可笑味があつた。後、馬琴が『漢楚賽擬選軍談』といふ草双紙を書いたのも、實は茲に暗示を得たのであつて、必ずしも馬琴の思ひ付の妙を推賞するには當らぬ。

尙ほ其磧は、時代物にも筆を染めたが、これは概ね成功しなかつた。蓋し彼れは、この方面に左程の興味を持たぬらしく、新古淨瑠璃などから材料を仰ぎ、或は謠曲、傳説、口碑の類からも、資料を見出したが、結局踏襲、模倣に墮し、僅かに結構の上で、彼れの才氣をいくらか示したに過ぎぬ。

要するに、其磧には西鶴や近松のやうな天才的なところがないのは止むを得ぬが、確乎とした人生觀や、深き反省と思索とに缺けてゐるのが物足りない。また西鶴に見る鋭い眼、近松に見る熾烈な同情心にも乏

しかつた。いくらかの想像力、才氣及び彼れの體驗、世間智などによつて、興味中心に人と事とを見たに過ぎぬ。それ故に時には、編輯的、補綴的に作物を書き、才筆にまかせて、描寫を誇張したり、滑稽な調子にまぎらかしたりして、當面を糊塗する風を生じた。

が、偉大な西鶴のあとに出て、兎も角も小さい乍らも彼れの一時代を造つたことは何と云つても、彼れの力であつて、傾城物から氣質物に迄、彼れの才能を伸張したことは、當事の群作家から一頭地を抜いてゐたわけである。今の眼で見ると物足らぬ點が少くないけれども、其積の時代に身を置き、彼れの氣分に同化したとして、『色三味線』、『禁短氣』や氣質物を讀むと、流石に捨て難い特殊の風味があり、且つ當時の京阪に於ける特色なども、略ほわかるやうな氣がする。曾て私は彼れの作品に向つて、少しく酷に過ぎるやうなことを云つたが、それは現代の眼で見、現代の尺度で一々彼れを解釋したからで、時代的意義の上からすれば、大體、以上の如く評價するを以て至當とする。

それに彼れの傾城物は、江戸の洒落本、人情本の先驅となつた形があり、一方には黄表紙趣味さへも伴つてゐた。また彼れの氣質物は、式亭三馬らの作品にも影響したやうに思はれる。例へば、『一盃綺言』、『古今百馬鹿』、『酪酊氣質』などがそれであらう。『禁短氣』の如きは、江戸通人の間に珍重せられ、麴庭篁村氏なども大分共鳴したことが曾てあつたと云はれる。以上の點から見て、其積はひとり、京阪文學を動かしたのみならず、化政期に於ける江戸の作家にも或影響を與へたことは想像に難くない。

尙ほ自笑については別に云ふべきことはない。元來が書肆で、その小説は賣名本位に作られたに過ぎぬから、評價するには當らぬ。唯當時の出版界に清新、潑刺な空氣を注入した功績を認めてよいと思ふ。

二 讀本に先驅した近路行者

其積の歿後、八文字屋物が衰へると、讀者はそれに代るべき讀物を要求した。それに應じたのが、『讀本』系統の諸作である。讀本とは繪本に對した言葉で、主に「字を讀む本」といふやうな意味を含むが、今日でいふ傳奇小説にはかならぬ。材を當面の世相に採るよりも、國史などに採り、好色本、傾城物などところがつて、生真面目な傾向を帯びた。従つて滑稽、洒落の味などは殆ど含まれてをらぬのが常である。

後來、現はれた山東京傳、曲亭馬琴などの讀本に先驅した京阪の作家は概ね學者肌の人物で、必ずしも文學を定職とせぬ、寧ろアマチュアのうちに見出された。それらは漢文學者でなければ、國文學者であつた。その人々は、上田秋成、建部綾足、賀茂真淵、荷田在滿、村田春海、本居宣長、岡島冠山、岡白駒、都賀庭鍾（近路行者）などである。そのうちで、上田秋成が一番優れた成績を示したが、岡島冠山、近路行者の功も亦決して少しとせぬ。

冠山は長崎出身で延寶三年の出生である。名を援之、通稱を喜兵衛と云つた。彼れは漢文のみならず、支那語に精通したので、口語體の支那小説を略ほ自由に讀みこなすことが出來た。彼れは寶永元年頃、京都に

遊び、『通俗皇明英烈傳』といふ譯書(原本は明の徐文長の『雲合奇蹤』、一名『皇明英烈傳』)を出版した。それは元明軍談である。次いで『水滸傳』の李卓吾の百回本に訓點を加へ、享保十三年、『忠義水滸傳』として公にした。それは一般に流布する迄に至らなかつたが、その後、『水滸』の翻譯を銳意完了した。それが彼れの歿後——寶曆七年に『通俗忠義水滸傳』の名で世に出た。彼れには尙ほ『通俗明清軍談』、『太平記演義』などの翻譯もあつた。それらは元祿年間に出た僧義輻の『通俗三國誌』及び『漢楚軍談』、『西漢演義』の譯述と共に世を益した。

冠山と同じ仲間だといはれる岡白駒も亦支那文學の趣味を鼓吹し、『今古奇觀』(抱甕老人選)のうちから短篇小説の佳篇を撰んで、傍訓を加へ、これを『小説精言』、『小説奇言』として刊行した。(山口剛氏は『小説粹言』を白駒の撰と云つてゐるが、書肆風間庄左衛門の撰である)その頃、支那小説熱が、京都の知識階級に於ける一部に起り、冠山を中心として、松室式部(秦熙載)、朝枝善次郎(晁世美)、田中瓊(田文瑟)、陶山尙善(陶冕)などが現はれ、『水滸傳』百二十回本などを讀んで大に新人を氣取つた。近路行者の如きも、やはり、この新風潮に觸れた一人だつた。彼等は皆支那人めかした名を持つたが、近路行者も水滸めかして、千里浪子などと云つた。この一派の影響から、建部綾足の『本朝水滸傳』(安永二年刊)が生れたのである。が、支那文學を活用して、早く京阪文壇に現はれた一人は近路行者(都賀庭鍾)だつた。彼れは大阪の人で、儒醫を業としたと云はれる。飄逸脱俗の風があり、木村兼葎堂(巽齋)らと親交があつた。國文學のみ

ならず、支那文學に精通して寶曆五年、『開卷一笑』に傍訓、註釋を附して出版したことがあつた。その『古今奇談英草紙』を公にしたのは寛延二年である。馬琴と親しかつた木村默翁は『國字小説通』のうちで、近路行者のことに言及し、『椿園主人(伊丹椿園)、剪枝畸人(上田秋成)、近路行者などいふ諸才子、唐山稗史剪燈新話、石點頭八洞天などに擬して繁々夜話、英草紙、雨月物語等を作る。』と述べた。

近路行者の『英草紙』は主として、その材を『今古奇觀』から採つてゐる。元來、それは唐宋、元明の物語三十六種を收めた『柏案驚奇』と明末の『三言』(喻世明言、警世通言、醒世恒言)とから合せて二百篇の物語を集めたのだつたが、抱甕老人が選刻して四十卷、四十回の物語としたのである。近路行者は一向、その出所を明示しないが大體、『今古奇觀』によつたのは左の如くである。

- (一) 後醍醐の帝三たび藤房の諫を折くの話……王刑公三難蘇學士
- (二) 馬場求馬妻を沈めて樋口が聳となる話……金玉奴捧打薄情郎
- (三) 豊原兼秋音を聴きて國の盛衰を知る話……兪伯牙摔琴謝知音
- (四) 黒川源太主山に入つて道を得たる話……莊子休鼓盆成大道
- (五) 高武藏守婢を出して媒をなす話……裴晋公義還原配

その他の四篇は出所明白でないけれども、すべて支那文學から翻譯したものと思はれる。山口剛氏は『英草紙』第一回の翻譯案を推賞し、『王荆公三難蘇學士』を三分して、その二つを『莠句冊』中に收めた手際を

鮮かだとしてゐるが、全體九篇を通觀すると、翻案としては日本化が足らず、翻譯としては嚴密だと云へぬ。『國文學講話』(藤岡東圃氏)の著者は文章遒勁として、そのスタイルを可としたが、漢臭あるを非難した。その漢臭は即ち日本化が足らぬところから來てゐる。

例へば、第四話「黒川源太主」のことは、原作によると、日本人から見ても可なり非人情な、殘忍な箇所がある。ところが、近路行者は人名を日本風にし、或一節を日本化した上で、大體は原作を意譯してゐる爲めに、腑に落ちぬところが往々見える。即ち或部分に小細工を施して、原作の意も半ば以上残さうとしたことが、却て翻案上、面白くない結果を來たした。(馬琴の支那式小説にも、往々、この傾向がある。)

それから第一話、「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折くの話」も、「王荆公三難蘇學士」を翻案し、荆公を帝、東坡を藤原藤房とし、黃州の菊を武藏野の逃水に作りかへたりしたが、この方は大體原作通りでなく、後醍醐帝と藤原藤房との事蹟に當てはめたのだが、國史上から考へると首肯し難い。のみならず、原作は荆公の鋭敏明察と東坡の才子風なところが能く出てゐるが、近路行者の翻案振は妥當性を失つてゐる。千里の馬の話は藤房の諫言として正しいものとせられ、そこに藤房の面目が現はれてゐるが、それを帝が事もなげに折かれたとは思はれぬ。やはり、荆公、東坡に近似した人物を用ゐて、翻案しなければならなかつた。

が、近路行者の文章は典雅、雄健で讀み易い。國語と漢文とを具合よく調和して、彼れ一流のスタイルを作つてゐる。それは同じ支那文學の翻案に當つた伊丹椿園の『唐錦』(安永九年刊行)の文章よりも遙かに

上位にある。それ故、右の如く、一々穿鑿さへしなければ、不知不識讀んで了ふやう、興味中心的に出來てゐる。『繁野話』、『莠句冊』(著者草官散人とあるも、實は近路行者)なども、大要、『英草紙』と同趣だと見て差支へない。私一個の趣味としては、『繁野話』の第一話「雲魂雲情を語つて久しきを誓ふ話」の詩情あるを殊に喜ぶ。同書第五話「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」は、『白猿傳』(作者未詳)の翻案であるが、『怪談全書』(林道春?)に記述されてゐるのよりも遙かに冗長で、縮りが無い。けれども近路行者が可なり苦心して日本化に力めた様子が想察される。

三 建部綾足の『本朝水滸傳』

右の如き漢學者の文學的活動に對して、國文學者も亦創作熱を生じ、荷田在滿は『白猿物語』、『落合物語』を元文、寛保年間に公にし、續いて賀茂真淵は『由良物語』を、建部綾足は『西山物語』を公にした。尙ほ村田春海の『竺志船物語』、本居宣長の『手枕』なども出た。後に六樹園(石川雅望)が『飛驒匠物語』、『近江縣物語』、『天羽衣』などを書いたのも、右の如き刺戟によると思ふ。

唯遺憾とすべきは、國文學者の創作的才能が、それほど豊かでなかつたことである。古雅、優美のスタイルにおいては、いくらか見るべきものがあつたが、描寫、結構については到らぬ點が往々にして見えた。綾足の如きも、『西山物語』に失敗し、『本朝水滸傳』に於ても、不成績だつた。が、後者は、その影響といふ上

から見ると、必ずしも、無意義の作品ではない。

綾足は可なり不遇の人で、『水滸傳』好きの曲亭馬琴が彼れを紹介する迄は、殆ど久しく忘れられ、埋もれてゐた。馬琴は『本朝水滸傳』が少しく早く出すぎたことを惜み、且つその苦心を察して、「我も人も古雅の詞もて得綴りがたき草紙物語をよくもあしくも綴り課せしは文場の豪傑なり。惜むべし、印行の頃は此の書、時好に稱はず。若し六七年後れて今の世に出るものならば、縦令いたく行れずとも、必ず後編も續きて出版せらるべし。」と云つた。正に馬琴の云ふ通りである。

綾足は秋成と同じく、崎人視せられるべき資質を持つてゐた。彼れは津輕藩家老職の二男として享保五年に出生した。早くから國を飛び出して、長崎に赴き、熊斐について繪を學んだが、畫家として定着せず、後京の東福寺の僧となり、轉じて俳諧師となり、江戸淺草に卜居したことがある。が、多くは南船北馬のうちに日を送り、安永三年、旅中、熊谷驛で歿した。彼れは片歌なるものを提唱して尙古主義を發揮したが、成功せず終つた。その著作として比較的知られてゐるのは、『本朝水滸傳』、『西山物語』のほか、『漫遊記』(一名『をりく草』)、『蕉門頭陀物語』などである。

彼れの『本朝水滸傳』は前編十巻だけで、後編十五巻は稿本の儘、未發表に終つたらしい。その内容は孝謙天皇の時代に起つた騷亂を背景とし、道鏡——高球に擬す——を討つため義軍を起した惠美押勝(宋江に當る)が敗北して、近江伊吹山(梁山泊)に隠れてゐる兄の白猪老人を尋ねてゆくと、後から清麿やその妻子

を始め、血盟の義士が續々集つてくるといふ仕組にしてゐる。未完であり、思ひ付も亦平凡、叙述も古めかしいが、唯讀本系の作として最初の長篇だといふ意味に於て、水滸物翻案の先鞭を着けたといふ點で意義があつた。爾後、世に出た水滸物及び同系統のものは頗る多い。

- 日本水滸傳 十 仇鼎山人 安永六年
- 女水滸傳 四 伊丹椿園 天明三年
- 通氣醉語傳 一 山東京傳 寛政元年
- いろは醉語傳 一 振鷺亭 寛政五年
- 忠臣水滸傳 十 山東京傳 寛政十年
- 新編女水滸傳 六 好花堂野亭 文化元年
- 新編水滸傳解 十 曲亭馬琴 文化三年
- 傾城水滸傳 二十五 同 上 文政八年——天保十一年
- 俊傑神稻水滸傳 百四十 岳亭定岡等 文化十一年——明治十二年

その他、瓢々舎千成の『天魔水滸傳』(天保八年)、岳亭丘山の『水滸太平記』(天保元年)などがある。また年代未詳の『俳諧水滸傳』も出た。『水滸』の二字を付けぬけれども雲府館天歩の『棧道物語』(寛政十年刊行)は『水滸』の叢商人を翻案した作であり、馬琴の『八犬傳』、『高尾千字文』なども『水滸傳』の影響を

受けてゐる。その源流に溯ると、綾足の『本朝水滸傳』に歸する。

かう云ふ風に、支那文學の影響が日本の文壇に相當の足痕を印象付けたが、他方、岡島冠山の『水滸傳』譯述の系統を引いた一派の人々の手により、支那に於ける有力な小説稗史の類が翻譯せられた。それは『通俗平妖傳』、『通俗女仙外史』、『通俗西遊記』、『通俗醉菩提』、『通俗金魁傳』、『通俗隋唐演義』、『通俗孝肅傳』、『通俗醫王耆婆傳』などで、傍系物としては、『開口新語』、『笑府』、『巷談奇叢』、『笑林廣記』などの滑稽類も譯せられたのである。

それらは馬琴、京傳の讀本に相當の影響を與へた。馬琴の『俠客傳』は『女仙外史』によるところがあり、『新編金瓶梅』は支那の『金瓶梅』を翻譯したのである。『風俗金魚傳』は『金魁傳』をもつたものとする。支那小説の翻譯者に對して、相當の敬意を表せねばならぬ。京傳の『本朝醉菩提』も亦支那の『醉菩提』に得るところがあつた。

四 藝術家肌の上田秋成

一方で和文を以て書いた小説が現はれ、又一方で支那小説の翻譯、翻譯が漸く旺んになりかけた時、上田秋成がこの新機運の選手として頭角を擡げた。彼れは學者で奇人で且つ詩人肌を兼ねた小説家で全く特異の人だ。彼れの一生は薄倖と孤獨との空氣に取巻かれてゐた。その自傳によると、彼れの父は誰だかわからない。母は大阪の遊女だつたらしいが、彼れの四歳の時、病歿した。爾後、彼れは上田氏の手で養はれ、少年時代から學問好きで、秀才だつた。漢文學はこれを都賀庭鐘（近路行者）に學び、國文學を加藤宇萬伎に學び、俳諧は几圭について練習したのである。

彼れは最初から、灰色の運命に咀はれたかのやうに不遇の人だつた。それは彼れの孤峭、狷介な性質にもとづいた。醫師となつても一向はやらす、國文學者又は小説家としても左程、世に迎へられぬ。五十七歳の時、視力衰へて、殆ど盲目に近い不自由を一時體驗したのみならず、世人からは狂人扱ひにされた。かうして秋成は七十六年間の生を淋しく終つた。けれども彼の文學上に於ける活動は始終緊張してゐて、學者、文人、歌人として相當、充實した生活をした。時には放蕩に身を持ちくづしたこともあつたが、彼れの先天的使命を閑却しなかつたのである。

彼れは、いろいろの意味で、もつと認識せられても宜い人だ。國文學者としては、本居宣長を向ふへ廻して論陣を張つたほどの意氣があり、歌人としても、自然味の多い叙景の歌で、彼れの個性をはつきり示した。それに彼れの隨筆『清風瑣言』なども彼れ一流の味を帯びてをり、茶について、これ程詳しく研究したものは少い。卒去前年に書いた『膽大小心録』はいかにも痛快だ。更に小説家としては、最初、専ら其積を學び、後、近路行者の風に共鳴して、到頭、獨自の領域を開いたのである。

彼れの小説は量に於て左程多くないけれども、質に於て優れた。『雨月物語』及び『春雨物語』を書いて、

その藝術的天分の優れたことを示した。蓋し彼れの『妾形氣』、『諸道聽耳世間猿』が世に迎へられなかつた爲め、發奮して、『雨月』を書くに至つたものと思はれる。右の二作品は、唯其積の悪いところを模倣したやうな箇所さへあつて、秋成その人の個性が餘り出てゐない。勿論、それは明和三年、三十二歳の時に書き、まだ平凡な小説的常識を脱しきらぬ折の産物だつた。が、自負心強き彼れは、最初の失敗に屈しないで、自ら工夫し、鍛鍊して、『雨月物語』を纏めるに至つた。

かう云つて了ふと、『妾形氣』、『世間猿』は庸劣の作であるやうに思惟せられぬかも知れぬ。が、流石に秋成の才氣、侮り難いところが、ちらと閃めいてゐる。處女作『世間猿』の如きも、在來の氣質物とちがつた味を出さうと力め、其積張ながらも、第一話「器量は見るに煩惱の雨やどり」などは、經濟中心時代に適應しようとする武士と坊ちやん氣質で武張ることのみ知つて世間を知らぬ金持とを對照して、榮枯、盛衰の姿を示したところ、其積らの着眼に比して鋭い點が見える。

それから彼れの『妾形氣』は、特殊の内容を有したものであるが、妾の生活を透して、社會に於ける武士、僧侶の裏面を描き、その頽廢、墮落を示したところに、秋成一流の皮肉味がある。それに彼れの文章は、多く國文の風味を取り入れて、優雅な、しつとりとした趣致を見せた。例せば、本篇に春の夜の情景を描いて、「比しも春の彌生、中の八日餘、前栽の花散りがてに咲亂れ、遣水に風の小皺もなく、寺々の夕ぐれつぐる鐘の音に山の月もや、遅くして、雪かとぞ白くさし出づる影の、松にうつろひて春の夜の眺め一入浮きたち

……」とあるあたりは、彼れの才筆が將來、更に進展すべきことを豫想せしめる。

かく以上の二作とても、秋成の影が少しはさしてゐるが、本來、詩人肌の彼れが俗人肌の世馴れた其積と同じ行き方をするのは損であつた。それ故、秋成は右の習作を終つてからは、本來の素質に立ち歸り、彼れにふさはしい題材を彼れ一流のスタイルによつて表現しようとして企てた。その結果、『雨月』が生れたのである。茲には、彼れの創作がなくて、支那小説の翻案がある。否、翻案的創作が展開せられる。

秋成の『雨月』(安永五年刊行)は全部五卷、九つの話から成つてゐることは、彼れの先輩、近路行者の『英草紙』と同様だ。唯各篇の外題が短くなつてゐる丈である。また文體は『雨月』よりも十年早く出た近路行者の『繁野話』第一話「雲魂雲情」と似通つたところさへ見える。勿論、近路行者のは、センテンスが少し長い。とすると、秋成は、その漢學の師たる近路行者の文學的成功を見て、彼れと同じく支那小説を翻案し、彼れ以上に出ようとして、おのづから近似したのかも知れぬ。私は左様に信ずる。文章は秋成の方が、一段立優つてはゐるが――。

○繁野話第一話の一節

(前略) 大永の初の春たつや、霞と共に出でて、秋風を歸る期とし、順路にあらふる高峰々々を眺望して富士の麓を過りながら、若かりし日は登臨の志やまさりしが、年經ぬる身は何事も思ひやりて心ゆくもをかし。往きかへる路の曉昏は、空の色、雲の容のみ月に親しく心に染みて、朝立つ雲に花落を出でて、夕る

る雲のあしたゆくも、なにはしるけき此寺の僧侶に知音ありて、數日の勞を休め、一夜此寺の「浮屠の五層に登り、佛像の上に坐するは恐れなきにあらねども、人の臨むべき爲の樓窓ならめ、隠るべき爲の欄にこそと、秋涼の通夜讀誦しけるに、かばかり高ければ、世とへだたりたる心地し、雲路近きかとうたがふ。人の心ほどけやけきはなし。上絃の月中ぞらに高けれども、雨氣くもり咫尺も朧なり。(下略)

○雨月物語「白峰」の一節

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山の黄葉見過し難く、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の煙、浮島がはら、清見が關、大磯小いその浦々、紫艷ふ武藏野の原、鹽竈の和きたる朝けしき……猶西の國の歌枕見んとて、仁安三年の秋は、葎がちる難波を経て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつても、行く行く讃岐の眞尾坂の林といふにしばらく節を植む。草枕はるけき旅路の勞にもあらで、觀念修行の便せし庵なりけり。この里近き白峯といふ所にこそ、新院の陵ありと聞きて、拜みたてまつらばやと、十月はじめつかた、かの山に登る。松柏は奥ふかく茂りあひて、青雲の輕靡く日すら、小雨そほふるがごとし。

(下略)

その言葉の用る方や全體の調子や句法迄が、大分似てゐる。疑ひもなく秋成は其積から離れて、近路行者の文學的傾向に共鳴し、その行き方を模しながら、自家の個性を没却しなかつた。そこに彼れの詩人的素質が幸ひしたであらうと思ふが、努力も亦一通りでなかつたであらう。

五 秋成の『雨月物語』

秋成の『雨月』は殆どその全部が支那小説の翻案であるが、巧みな翻案であり、創作的翻案だ。了意よりも、近路行者よりも、一段巧妙で、秋成の生きた呼吸が各篇に吹込まれてゐるかの如く感ずる。かうなると、よき創作と餘り變りはない。今、原本と對照して見る。

- 菊花の約……………兪伯牙琴琴謝知音(『今古奇觀』、『警世通言』)
- 淺茅が宿……………愛卿傳(『剪燈新話』、但し『伽婢子』譯より)
- 夢應の鯉魚……………魚服言(『古今說海』)
- 佛法僧……………伏見桃山亡靈の行列の事(『怪談とのる袋』)及び幽靈評諸將(『伽婢子』)
- 吉備津の釜……………牡丹燈記(『剪燈新話』)
- 蛇性の淫……………雷墳怪蹟(『西湖佳話』)
- 青頭巾……………武平靈怪錄(『剪燈餘話』)及び『怪談とのる袋』)

九篇のうち、以上七篇が直接または間接の翻案で、『白峰』は『撰集抄』、『山家集』などにもとづいてゐる。『貧福論』も何かの翻案であらうが、はつきり分らぬ。それから秋成は『日本靈異記』、『今昔物語』その他怪異文學をいろいろ調べて見たであらうと思はれる。

彼れは近路行者の如き半吞半吐的態度を執らず、了意の如き單なる日本化に甘んぜず、それへ彼れの心熱を加へ、主觀を投入し、一個秋成的怪談を編み出した。その最も佳なるものは、正にこれ創造的結晶であり、創作的形態の發現である。

これを「淺茅が宿」に徴して見ると、『剪燈新話』の「愛卿傳」を了意が「遊女宮木野」として日本化し、すらすらと讀めるやうにしてゐるが、了意は「語る」だけで「描かぬ」のである。秋成は「語る」よりも、「描く」ことを主とした。人と事とを具象化することに力めた。そこに秋成の翻案振の鮮かさがある。了意のは男主人公が叔父の病氣見舞にゆくとし、秋成のは商用のため京へ上るとしてゐるが、戦亂のため久しく歸郷を妨げられて、流離漂泊するのは同一だつた。漸くにして心を痛めながら歸ると、家なく、母なく、妻もない——秋成のは妻ばかりで母は始めから描いてゐない——といふ荒れた有様、この點を了意、秋成は左の如く描いてゐる。

○宮木野（了意）

（前略）幾程もなく、駿府は武田の手にいりてしづかになり、道開けて通路たやすく、海道の諸大將も和睦せし比なれば、藤井清六もやう／＼にして國に歸りければ、駿府のありさま替りはて我家には人もなし。柱傾き軒崩れ、草のみ茂くあれまさり、老母、宮木野はいづち行きけむとも知る人もなし。門に出て見れば、年比めし使ひける男出來り。是をよびて尋ぬるに、老母いたくわづらひ給ひけるを、宮木野我

身に替らんと神佛に祈り、晝夜付添うて看病せしに、その甲斐なく果て給ふ。その後、武田信玄のため府中を追ひおとされ、今川氏眞公は行方なし。宮木野は敵軍の手に身をけがされじとて縊れ死給ふを、兵ども、その貞節を感じて、後の柿の木もとに埋みしと語る……（下略）

茲で男主人公清六が亡き妻のことを悲み、翌日、墳墓に詣でて歸ると、夜、燈下に彼女の女の靈魂が姿を現はしたといふことにして、萬事、「愛卿傳」その儘である。ところが、秋成は、これをもつと具體化して、自然味を加へ、巧みに描寫した。それは一面、了意に負ふところがあるが、秋成の技倆が卓越してゐるたにもよるとせねばならぬ。

○淺茅が宿（秋成）

（前略）人々に志を告げて、五月雨のはれ間に手をわかちて、十日あまりを経て古郷に歸り着きぬ。此時日ははや西に沈みて、雨雲はおちかゝるばかりに闇けれど、舊しく住みなれし里なれば、迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、いにしへの繼橋も川瀬におちたれば、けに駒の足音もせぬに、田畑は荒れたきまゝ、にすさみて、舊の道もわからず、ありつる人居なし。たまたまこゝ、かしこに残る家に人の住むとは見ゆるあれど、昔には似つゝ、あらね、いづれが我住みし家ぞと立惑ふに、こゝ、二十歩ばかりを去つて、雷に摧かれし松の聳え立てるが、雲間の星のひかりに見えたるを、けに我軒の標こそ見えつると、先づ喜しき心地して歩むに、家は故にかはらでであり。人も住むと見えて、古戸の間より燈火の影もれて輝々とするに、他人

や住む。もしや其人やいますかと心躁しく、門に立ちよりにて咳すれば、内にも速く聞きとりて、誰ぞと咎む。いたうねびたれど、正しく妻の聲なるを聞きて、夢かと胸のみさわがれて、我こそ歸りまゐりたり。かはらで獨自淺茅が原に住みつることの不思議さよといふを、聞き知りたれば、やがて戸を明くるに、いといったう黒く垢つきて、眼はおち入りたるやうに、結けたる髪も背にかゝりて、故の人とは思はれず。(下略)

それは主人公勝四郎の妻の靈が姿を現はしたのであつて、茲で勝四郎の留守中の悲しい、淋しい有様を詳しく告げる。かくて二人は喜んで久振に安らかな夢を結ぶことが出来た。秋成はかう描いた後、勝四郎が幻夢から醒めた姿を描く。

窓の紙松風を吸りて、夜もすがら涼しきに、途の長手に勞れ、熱く寝ねたり。五更の天明けのく比、現なき心にもすゞろに寒かりければ、衾帳さんとさぐる手に、何物にや簾々と音するに目さめぬ。面にひやひやと物のこぼるゝを、雨や漏りぬるかと思れば、屋根は風にまくられてあれば、有明月のしらみて残りたるも見ゆ。家は扉もあるやなし、簀垣朽ち頽れたる間より、荻薄高く生ひ出でて、朝露うちこぼるゝに、袖濕ぢてしほるばかりなり。壁には葛葛延ひかゝり、庭は葎に埋れて、秋ならねども野らなる宿なりけり。さして臥したる妻はいづち行きけん見えず。(下略)

右の如く、秋成は「語る」よりも「描く」ことに力點を置き、日本的でない箇所即ち支那的で不必要と思はれるところは、時にこれを割愛したので、一層彼れの作品が創作同様のものとなつたのを感じる。了意から近路行者へ、近路行者から秋成へ、支那小説の翻案は、かうした進歩の道程を辿つた。

それに秋成の文章は閑雅、遒勁で、和文と漢文との長所を巧みに按配し、近路行者に似て更にその上にある。かくして彼れは「白峰」で崇徳院の事を描き、「菊花の約」では、恩人と再會を約した赤穴宗右衛門が幽囚されて逢へず、自刃後、亡靈となつて恩人を訪うたことを描き、「夢應の鯉魚」では、平生魚をよく描く僧興義が、突如死んで三日目に蘇生し、その間、夢的に魚となつて湖中を遊び廻つたことを描いた。更に秋成は「佛法僧」で關白秀次の幽鬼を描き、「吉備津の釜」で見棄てられた妻女磯良が生靈となつて、男を奪つた女を取殺し、合せて怨みある男を殺したことを描き、「蛇性の淫」では蛇が美女に化けて男に執着したロマンスを描き、「青頭巾」では男色に溺れた爲め鬼畜に墮した庵主が、ある行脚僧の功德によつて成佛したことを描いた。「貧福論」は題だけでは論文のやうであるが、實は黄金の精を描いたのである。

左様した幻怪の事を描くについて、秋成はそれにふさはしい筆を持つた。彼れは「青頭巾」のうちで、廢寺の物凄さを描いて、「寺に入つて見れば、萩尾花のたけ高くも生茂り、露は時めきて降りこぼれたるに、三つの徑さへ分らざる中に、堂閣の左右に頽れ、方丈庫裡に廻りたる廊も朽目に雨をふくみて苔むしぬ。さてかの僧の坐せしめたる簀子のほつりを求むるに影のやうなる人の僧俗ともわかぬまでに、髭髪も亂れし八葎結ほほれ、尾花おしなみたる中に、蚊の鳴くばかり細き音して、物とも聞えぬやうにまれ／＼唱ふるを

聞けば、「江月照松風吹。永夜清宵何所爲。」禪師見給ひて、やがて禪杖をとり直し、作麼生何所爲哉と一唱して、かれの頭を打ち給へば、忽ち氷の朝日にあふが如く消え失せて、かの青頭巾のみが草葉にとゞまりける。」と述べてゐる。

亡靈の凄味を描くについても、秋成は「吉備津の釜」で『牡丹燈籠』以上の巧妙な趣を示したが、「菊花の約」に於ける赤穴宗右衛門の亡靈の如き、凄味を故意に加へようとせずして、而も眞に迫る趣が見える。その一節を茲に引く。

(前略)月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉て、入らんとするに、たゞ見る、おほろなる黑影の中に人ありて、風のまに／＼来るをあやしと見れば、赤穴宗右衛門なり。踊りあがる心地して、小弟蚤くより待ちて今にいたりぬる。盟たがはで來り給ふことのうれしさよ。いざ入らせ給へといふめれど、只點頭きて物をもいばである。左門前にすゝみて、南の窓の下に迎へ座につかしめ、兄長來り給ふことの遅かりしに、老母も待ちわびて、翌こそと臥戸に入らせ給ふ。寤させまらせんといへるを、赤穴又頭を揺つてとゞめつゝも、更に物をいはでである。左門いふ、既に夜を續ぎて來し給ふに、心も倦み足も勞れ給ふべし。幸に一杯酌みて歇息せ給へとて、酒をあたゝめ、下物を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其臭を嫌み放くるに似たり。左門いふ、井臼の力はた欺すに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふことなかれ。赤穴猶答へもせて長嘯をつぎつゝ、しばししていふ、賢弟が信ある響應を、などいなむべき

ことわりあらん。(中略)今夜陰風に乗りてはるばる來り、菊花の約に赴く。この心をあはれみ給へといひをはりて泪わき出づるが如し。今は永きわかれなり。只母公によくつかへ給へとて、座を立つと見しが、かき消えて見えすなりける。左門慌忙とゞめんとすれば、陰風に眼くらみて行方をしらす。(下略)

六 群小作家を抜いた秋成の藝術

今一つ、云はねばならぬのは、彼れの「白峰」に就てである。これと同じ題材が、馬琴の『弓張月』に用ゐられ、幸田露伴氏の『二日物語』にも用ゐられてゐる。その源頭に溯ると、『撰集抄』がある。『撰集抄』と同一光景を描きながら、秋成の文章は能く引き締められ、すつと簡約した趣が見える。

○撰集抄

まのあたり見奉りし事ぞかし。清涼紫宸の間にやすみ給ひて、百官にかしづかれさせ、後宮後房のうてなには、三千の美翠のかんざしもあざやかにて御まなじりにかゝらんとのみしあはせ給ひしぞかし。萬機の政を當に握らせ給ふのみにあらず、春は花の宴を專にし、秋は月の前の興つきせず侍りき。豈おもひきや今かゝるべしとは。別けてもはかなきや他國邊土の岸の下に朽ちたまふべしとは。貝鐘の聲もせず、法華三昧つとむる僧一人もなき所に唯峯の松風のはけしきのみにて、鳥だに通はぬ有様、行奉るにそぞろに涙落し侍りき。始めあるものは終ありとは聞きはべりしかども、未だかゝる例をば承り侍らず、さ

れば思をとむまじきは此の世なり。一天の君、萬乗のあるじもしかの如く苦を離れましまし侍らねば、せつりもしゆだも變らず、宮も藁屋も共にはてしなきものなれば、高位も願はしきにあらず、我等も幾度か彼の國王となり給ひけんなれども、獨往即忘して具て覺え侍らず。唯行いてとまり果つべき佛果圓滿の位のみぞゆかしく侍る。兎にも角にも思ひつゞくるまゝに涙の洩れ出で侍りしかば……(下略)

○白 峰

まのあたり見奉りしは紫宸清涼の御座に朝政きこしめさせ給ふを、百の官人はかく賢き君ぞとて詔かしこみ仕へまつりし近衛の院にましても藐古射の山の瓊の林にしめさせ給ふを、思ひきや塵塵のかよふ跡のみ見えて詣づる人もなき深山の荆の下に神かくれ給はんとは。萬乗の君にわたらせ給ふさへ宿世の業といふものゝ、おそろしくも添ひ奉つて罪を遁れさせ給はざりしよと世のはかなさを思ひつゞけて涙湧き出づるが如し。(下略)

かう云ふ風に秋成は獨自の風味を出さうと心がけた。ところが、馬琴の『弓張月』第二十五回「八郎死を決して靈墳に詣づ」の中に描かれた同一材料は、可なり苦心し乍らも、美しい對句を列べることに氣を取られて、情味に乏しい憾みが少くない。秋成の如く、心熱に裏付けられぬ形式主義のみに傾いてゐるから左様なつたのであらう。そこに秋成の文章に見るやうな含蓄がない。

要するに、『雨月』は讀本系統の作品として劃期的のものであつた。その文學上に於ける影響は『英草

紙』、『繁野話』などよりも遙かに大きく、また深かつた。馬琴にしても、京傳にしても、六樹園(石川雅望)にしても、多少とも、『雨月』から影響を受けぬものはないと云つてよい。結構とか筋の上では、必ずしも、秋成の感化力がなかつたかも知れぬが、文章、文體といふ上では、相當に後に来る人々に有力な一典型を示した。序に云つて置くが、秋成と同じく怪異を材料とした綾足の『漫遊記』は文章に於ても、詩趣に於ても、『雨月』とくらべ物にならぬ。『漫遊記』は所詮、單なる奇談に過ぎぬ。

それから秋成の著作として尙ほ比較的に必要なものを挙げると、『雨夜物語』、『春雨物語』、『つゞらぶみ』、『癩癩談』などがある。『雨夜物語』は今日、傳はらぬが、饗庭篁村氏が四方梅彦(柳亭種彦門人)から筋を聞いて記述したのを見ると、「こは雨つゞく夜、灯火かきたて、獨り文を繙くに前裁のあなたに鐘の音かすかに聞ゆるより耳蔽てて近づきゆけば、土の下にて鳴れるなりけり。さてはいぶかすと歸り、鍬もて來り掘上げば、いつ入定したりけん、一人の老法師の息絶えずありて、一心不亂に佛を念じ居たるなれば、救ひ出して浮世の月に心の隈なく、互に物語る様を描けるもの」云々とある。

秋成の『春雨物語』は『雨月』に次ぐ傑作だ。『雨月』の絢爛はないが、平淡な澁い、枯れた味のあるロマンスである。今日傳はつてゐるのは、その中の五短篇だけで、多くは歴史小説である。それらは支那小説の翻案といふよりも、大體に於て、彼れの創作だと見られる。その筆力は『雨月』よりも一段老巧で印象が強い。

彼れは本篇中の「血かたびら」に於て、藤原仲成と薬子を取扱ひ、「天津乙女」では僧正遍照を、「海賊」では紀貫之を、「目一つ神」では、文明、享祿頃の歌人を主人公とした。他に「樊噲」の一篇がある。それは現在前半だけしか傳はらぬ。従つて後半を見ないと、評價し難いけれども、大體に於て、非凡の作と推察せられる。以上五篇共に秋成の個性に裏付けられて、独自の風格を反映した。

以上のうちで斷篇だといはれるが、「樊噲」は殊に興味深い。そこには、近代的な悪魔主義と云つたやうなものが現はれてゐる。その内容は、伯耆出身の大藏と云ふ男が、村の若者らと云ひ争つて、意地強くなり、夜半そつと大山に上ると、神のために捕へられて、隱岐の國へ追ひ飛ばされた。大藏もこれに懲りた様子で、一時眞面目に働いたが、一向、我慢が足らぬ。間もなく、賭博を始め、村の有金を盗んで逃げた。その際、彼れを追跡したものを谷底へ投げ込み、九州地方に赴いて依然、亂暴を働くので、樊噲と云はれ、到頭盜賊の群に入つて了ふ。それから偽法師になりすまして、諸國を歩き、冬は越後に留つて春になれば東國へ行かうといふところで、筆は終つてゐる。そこに秋成が因果應報的な小細工をせぬところに一種の深酷味がある。

次に「血かたびら」は薬子の死から怪異へ筆を進めるあたりに自然の凄味が生々しく漂うてゐる。「目一つ神」、「海賊」の二篇は自由な形式のもとに秋成の情想を託したもので、「目一つ神」に於ては、文明、享祿時代に生活した男が深森中で、眼一つの神人と怪物が歌談をしてゐるのを聞く趣向にしてゐる。その話中に堂上歌學の無生命を排撃してゐるのだ。「海賊」は紀貫之を驚かした海賊のことを述べ、それに託して貫之を諷じたのである。正に永井荷風氏の「冷笑」と云つたやうな作品で、當時に類の少い方であつた。

その他、彼れの歌文集『つゝらぶみ』の中には、「月の前」、「劍の舞」の二短篇がある。前者は頼朝と西行、後者は靜御前を取扱ひ、穩健なうちに、一味の藝術的芳香を放つてゐる。要するに、秋成は、そのスケエルこそ大きくないが、作品上、後半期に於て、藝術味の多い特異の短篇を相當に提供して、獨り靜かに輝くが如く見える。彼れには其積ほどの人氣はなかつたが、人生を見る眼に於て、其積に優つてゐた。唯彼れは飽迄も短篇作家に適し、長篇を書くにふさはしいところが少かつたやうだ。この方面は後に至つて馬琴、京傳らが開拓したのである。何れにもせよ、現代人が尙ほ興味を新たにすることが出来る作品を残したことは、何よりも雄辯に秋成の藝術的生命の長いことを意味すると思ふ。

右の如く、西鶴以後の京阪文學は、小説の上に於て既述した通り、江戸方面の小説と密接な交渉を持つてゐた。のみならず、依然、先輩の地位を江戸に對して確保した。それが後に至り、次第にさびれたのは、經濟中心の都市が物質偏重によつて、文學を閑却し壓迫した爲めであらう。物質主義が過度に精神文化を壓迫するところに文學の發達を見難い。

尙ほ京阪の戯曲については、江戸の戯曲と併行して、これを概観することにした。江戸戯曲は元祿期から漸く獨自の色合を示した點で、小説の發達過程とは、おのづから趣を異にしてゐるのである。

第二篇 笑を基調とした文學

第一章 江戸式短詩・短文の發達

一 金平本の流行

江戸文學勃興の前提として、西鶴以後の京阪文學が江戸文學に寄與するところあつた事情を前に述べたが、それと共に、江戸文學の野に於て、豫め花實を結ぶために培ふところがあつた順序、要素についても、亦聊か考察しなければならぬ。即ち江戸それ自體が、文學上如何にその花園に根を据ゑ、新芽を出し、花咲き葉茂る丈の用意をしたかといふ事情を明かにする必要がある。

遡つて江戸文壇初期の状態を見ると、まだ性に目ざめぬ少年にも似て、幼稚、素朴なところがあつた。それらの日に京阪では假名草紙——漢文で書いた本に對してかく云つた——の名のもとに、西鶴の出現を用意すべく、いろいろの小説が續出してゐた。ところが江戸文學の歩みは、それにくらべると、眞に緩慢だつた。それは文化の程度に正比例するわけで、止むを得ぬ現象である。その最初に出た小説は、明曆三年出版の『若衆物語』で、次ぎに舞の本『景清』(萬治二年版)が現はれ、更に『水鳥記』(寛文七年の上方版と延寶頃の江戸版がある)が公にされた。それは茨木春朔が當時の酒戦を記述したものである。

この時代に文學上、一番勢力があつたのは江戸で尙ばれた武家趣味を土臺とせる『金平本』であつた。金平本が何故、人氣を得たかといふと、武家の都である江戸では、まだ殺伐の氣が失せないで、兎角、武張つたロマンスを愛するものが多かつたからである。その淵源、先蹤を爲したのは、丹波掾（和泉太夫）の淨瑠璃本だつた。それに於て、坂田金時の子金平と渡邊綱の子武綱の二人を主人公とし、共に悪鬼、猛獸を退治するといふ筋が、ひどく一般の共鳴を得た。それらの日に於ける士民は、金平の勇敢無雙を愛し、喜んでこの種の讀物を手にしたので、茲に「金平本」の名稱を生じた。それが流行したのは、主として元祿時代である。

當時、金平本の作者として、名を知られたのは岡清兵衛、小島佐平次、四宮彌四郎らであつた。丹波掾と岡清兵衛とは丁度、魚と水のやうな關係にあつた。丹波はかりそめにも弱きことを嫌つて、勇壯な淨瑠璃を好み、その語るときは、二尺ばかりの鐵棒を以て調子を取つたと云はれる。それに對して、岡清兵衛も趣味を同じうし、丹波に向くやう、金平淨瑠璃の諸作を綴つた。彼れは多少、文學の素養を有し、『源平盛衰記』、『太平記』などから材料を撰み出し、源頼光の四天王から思ひついて、前に述べた金平の武勇と武綱の智略とを理想化し、誇張的に表現したので、金平は青少年を始め、一般士民の間に典型的英雄の如く仰慕せられたのである。

蓋しかうした種類の作品は京阪に於ては見られぬ。當時の江戸がまだ文化文政前後と違つて、武士本位

の傾向を帶び、市民も亦武士化の趣をいくらか存してゐた爲め、この種の作品が出来たのであつた。當時勇俠といふことが彼等の間に重んぜられ、茲に旗本奴、町奴などの發生を促したが、かの「六方詞」として傳へらるる遊俠人の言は、やはり武張つた調子を主とし、グロテスクの匂ひが強い金平趣味と一脈相通するところがあつた。例へば、荒木武兵衛の「なのり言葉」に、「とやかくや言ふ内には、はや峠にかつ附いた。けに雲を腰にひん巻いたる山のてんぺんにも、湖浪なんくと、細波こなまとうくと、うつたつ磯はさいの河原、西へ向いても双子山、をや有けていではないぞな。」といふのがあつたが、その言葉の調子が正に金平的であつた。

かうした金平熱の高潮に伴ひ、金平淨瑠璃の正本（虱本とも云ふ）を翻刻して、これに種々の繪を加へ、廣く世に弘通した。その結果、少年、幼童でも、金平のことを知らぬものなく、他に吉原本、野郎評判などと稱する好色文學もあつたが、金平本の勢力に抑へ付けられて、その存在の影がうすかつた。今、金平中心の淨瑠璃本を挙げると、その有名なものでも十種以上に上るのである。それは『金平天狗問答』、『金平千人切』、『金平法問論』、『金平兜論』、『金平黒熊』、『金平大酒論』、『金平化生問答』、『金平最後』などであつた。その他金平の名を冠しないで、而も金平趣味を鼓吹した『咸陽宮』のやうなものがあつた。また『金平武者執行』、『金平桐の小枕』、『金平歳旦發句』、『金平六條通』なども現はれた。

ところが、岡清兵衛が右の如き流行を頼んで、一風變つた趣を見せるつもりで、『金平最後』を書き、歿した金平が地獄めぐりするところを描くと、金平の不死を信じ、金平に渴仰した人々は大きい不満を抱き、評

判が急に悪くなつた。それは金平抹殺を憤つたからである。それで清兵衛は狼狽して、『金平蘇生』を書いたが、以前の如き人氣を恢復することが出来なかつた。金平本は、かくして自ら衰へて了つたのである。

この金平本は草雙紙とも稱せられ、御伽草紙、假名草紙の類と共に江戸で出版された。その製本は至極粗末で、淺草紙といふ漉返の薄いのを二切りとして、それへ文字を灰墨で摺つた原始的體裁を爲してゐた。それを手に取ると、一種の臭氣が鼻を衝くので、臭草紙と云つたが、更に風雅めかして、これを草雙紙としたのであるとも云はれる。

草雙紙には一冊物、二冊物、三冊物などがあつた。一冊の紙数は五葉で、價六文と定められた。ところが貞享の末から、丹色の表紙を付けて、一面にその書の題目を示したところから、これを赤本と云つた。この赤本の作者は大抵名を出さぬ。蓋しそれは挿畫本位で、畫家の名さへ出せば宜かつたからである。この風習を破つて、作家の名を出したのは觀水亭丈阿で、頃は丁度、享保時分のことだつた。

丈阿は純江戸ッ兒で、寶曆、明和の頃に黒本を度々書いた。黒本といふのは、表紙が黒いからで、他に青本（黄表紙）もあつた。丈阿の代表作は、『繪本蓬萊童遊』、『妖物十番斬』、『大鳥毛庭雀』などでまだ幼稚の域を脱しなかつた。かの戯作の名稱も、丈阿が黒本にこの二字を用ゐたのが最初だつたと云はれる。それから青本は江戸旅籠町の地本問屋鱗形屋から始めて出版し、藪黄色の表紙を用ゐて、外題に鳥居風の畫を入れた。後、その表紙を黄色にすると、茲に黄表紙といふ名稱を生じたのである。

それらに執筆した人々は、丈阿のほかに、耕雪亭桂子、米山鼎我、文祥通交らで、桂子は最も多作した。鼎我はそれに次ぐ作家である。彼等が筆にした内容は、實録物や金平流の武勇談や御伽話めいたもので、寧ろ青少年女の讀物と云つてよかつたが、大人向きといふ用意も、ほの見えぬではなかつた。要するに、江戸初期の作物は文學上から見ると、注目すべきものが殆どなく、京阪文學の進歩に對して、大分の遜色があつた。その開展、發達は、これを明和、安永時代に俟たねばならなかつたのである。

二 江戸の經濟的發展に伴ふ新興文學

江戸文學進歩の先行的光景として我らの視野に入り來るのは、狂歌、狂文、狂詩及び川柳、小話などの勃興である。それらは江戸小説の土臺を培ふ有力な養分であつたが、その勃興は何によつたか。それは（一）初期資本主義のもとに發達した江戸の商業が、ブルジョア階級の生活に餘裕を與へたこと、（二）ブルジョア階級の思想的安んずとして、狂歌、川柳の類が役立つこと、（三）武家の感化を受けた關東人が、漸く洗練された江戸ッ兒氣質を造るに至つたことなどが、有力な素因となつたらうと思ふ。

（一）既に述べたやうに江戸の經濟的生活は大阪よりも大分遅れてゐた。元祿時代までは武士が有閑、富裕に近い階級として勢力を有し、町人は概して頭があがらなかつた。人口の半数以上は、武士だつた當時にあつては、勢ひそれに制せられることを免れぬ。武士の前では、町人が「蟲けら」同様に看下されても、ま

た「切り捨御免」の亂暴なことをされても仕様がなかつた。のみならず、町人が富の上でその勢力を増大すると、忽ち追放、缺所、沒收などの壓制的處罰を受け、殆ど手も足も出なかつた。町奴の出現は、明白にそれらの不快に對する反抗を意味する。

ところが、町人は經濟中心時代の風潮につれて、次第に擡頭すべき機會を得た。元祿以後、商業の發達は著しくなり、利に敏い上方商人が、續々江戸に入り込んで、漸次活動した爲めに、大阪が關西、中國の經濟を主として支配したに對し、江戸は關東、東北の經濟を左右すべき力を培ふことが出來た。町人の數も、享保時代に十四萬八千七百十九人と云はれたのが、元祿には三十五萬以上となり、享保年間には五十萬以上に増した。天明時代に入ると、それが百三十萬人以上に達したと云はれる。

かく人口が激増したのみならず、享保二年頃には、町數九百三十三町に達し、江戸に於ける商業組織も上方に倣つて次第に整頓した。享保十五年には、大阪と同じく、先づ小網町に米市場が出來たが、次いで麩穀町、濱町にも設立せられ、それを三會所と稱した。その他、仲間、組合の組織、手形、爲替の制度、兩替、問屋、仲買、小賣商らの組織も略ぼ整ふに至つた。小賣商は江戸特有の發達物で、それに關する宣傳、廣告の方法や商品陳列及び裝飾などでは、獨自の進歩を爲したのである。

それから大阪に於ける特殊の大商人——藏元、掛屋などに對して、江戸では、既に述べて置いたやうに、札差の出現を見た。「札差考」によると、「札差といふ名稱は昔、廩米受取手形の渡るや、その人名を書いて、これを割竹に挟み、藏役所の藁苞に挿したるに始る……札差とは旗本の廩米受取方より賣買までを請負ふところの商人」とある。札差の起原はいつ頃であつたか明瞭でないが、大體、慶安年間から既に存在したと云はれる。當時、淺草に幕府の米穀倉庫があつて、そこから旗本、御家人に對し、俸米を支給した關係から、札差は淺草藏前に居住し、前記の如き營業に従事した。そして大岡忠相が町奉行を勤めたとき、享保九年に彼等特許商人の人數を百九人に定めた。彼等の營業利益は、本來、代理業者としての札差料（手数料）に存したのであるが、いつの間にか、それが副業化して、本業は旗本、御家人を相手に高利の金を貸すことになつて了つたのである。「守貞漫稿」には「府の臣僚萬石以下の祿米及び月俸を證として金を貸し、利息を收めるを業とする。」と云ふ旨を述べてゐる。

かうした傾向を招致した一因は、旗本、御家人の財政的窮迫にあつた。安永頃の落首に、「覆面の頭巾は御目にかゝれども、御目にかゝらぬ武士の不工面」とあるが、江戸市民が漸く經濟的に擡頭して、その特有の文學を有し始めた頃には、武士階級が次第に經濟的に窮して來たことを、茲に裏書してゐる。元來、金錢の觀念にうとい武士階級は、町人に乘ぜられて次第に貧乏し、中には、手内職をして、窮乏を補ふ下級武士も少くなかつた。それ故、札差はかうした風潮に乗じて巨利を占め、その財力により、花街、劇場などに豪華振を發揮した。この弊害を抑へようとして、松平定信が寛政の政治改革に當つた時、札差に嚴命して、旗本などに對する從來の債權を拋棄せしめたけれども、その位では追付かぬ。それで天保十三年には、水野越前守が